HITOTSUBASHI UNIVERSITY

Insights into the Socio-Economy of Germany and France

Reviewed and edited by
Milen Martchev and Kasumi Hashizume

Global Leaders Program 2024

FACULTY OF ECONOMICS

目　次

Contents

謝　辞 ACKNOWLEDGEMENTS ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
序　文 FOREWORD ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

Chapter 1 INTRODUCTION
1. 参加者プロフィール PROFILES ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
2. ゼミの様子 OUR SEMINAR ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

Chapter 2 RESEARCH & PRESENTATIONS

A. Presenting with Students from Paris-Cité University

1. How Will Self-Driving Technology Change the World ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
Shuji Ishida

2. What is the Cause of Japan's Low Productivity? ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
Kosuke Into

3. Refugee Integration Policies: Lessons from Germany for South Korea ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
Seoyeon Kim

4. Sustaining Japan's Traditional Crafts: Challenges and Solutions ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
Masaki Sakakibara

5. The Economic Disparity Between Men and Women in Sweden and Japan ・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
Ayaka Sakata

6. A Comparative Analysis of Human Rights Due Diligence: Lessons from Germany for Japan ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
Koki Shibata

7. Tourism Development Linked to Cultural Policies: A Comparative Analysis of France and Japan ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
Sora Takahashi

8. Japanese Regional Issues and Regional Banks' Operation ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
Soichiro Taguchi

9. Japanese-German Comparison of Regional Cities ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
Harumi Tanikawa

10. Sakagura Tourism ·····99
Yuka Maehara

11. The Importance of Changing the Japan-US SOFA ·····106
Ken Yatsuhashi

B. Presenting with Students from the University of Duisburg-Essen and the Ruhr UniversityBochum

Group 1 ·····113
A Consideration of Migration in Japan - Current Situation in Cultural Aspects

Koki Shibata, Ken Yatsuhashi, Sora Takahashi, Yuka Maehara, Seoyeon Kim, Harumi Tanikawa

Group 2 ·····118
The Macroeconomic Effects of Migration to Japan

Kosuke Into, Soichiro Taguhi, Ayaka Sakata, Shuji Ishida, Masaki Sakakibara

Chapter 3 OUR ELEVEN DAYS

Visits in Paris ·····130
1. パリ紹介
2. 交流授業（パリ・シテ大学）
3. 野村フランス 視察
4. Station F 視察
5. 在フランス日本国大使館 視察
6. パリ日本文化会館 視察
7. Village by CA 視察
8. 安發明子氏講演会

Visits in Duisburg ·····155
9. デュースブルク紹介
10. 交流授業（デュースブルク・エッセン大学 & ルール大学ボーフム）
11. ホーホフェルト・マルクト小学校 視察
12. デュースブルク市移民統合事務局視察

Visits in Frankfurt ·····165
13. フランクフルト紹介
14. マブチモーター・ヨーロッパ 視察
15. Honda R&D・ヨーロッパ 視察

Chapter 4 PERSONAL REFLECTIONS ·····183
1. 仏独でのコミュニケーション （石田 宗嗣）
2. 基準を変えるきっかけ （印藤 康介）
3. 越境する視点：多文化共生と社会統合の未来を探る （Kim Seoyeon）
4. ヨーロッパから得た学びと未来への視座 （榊原 将輝）
5. 刺激が多く、学習への意欲が高まった日々 （坂田 綾香）

6. “先進国”の先にある課題 （柴田 光輝）
7. 1 年間のゼミを経て （高橋 空）
8. ゼミナールと海外研修を振り返って （田口 蒼一郎）
9. 無知の知 （谷川 陽海）
10. 一橋の強さと交友関係について （前原 優風）
11. 文化相対主義へのめざめ （八ッ橋 賢）

学部長挨拶

一橋大学経済学研究科長・経済学部長
佐藤主光

一橋大学経済学部は 2013 年度からグローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）を実施しています。その狙いは英語などで優れたコミュニケーション能力を持ち、経済学の専門知識と分析スキルに基づいて国内外で活躍できるリーダーの育成にあります。

GLP の活動の柱の一つが短期海外調査であり、例年、中国と欧州において実施してきました。現地での調査に先立って学生たちは中国班と欧州班に分かれて中国、欧州について学ぶゼミを履修します。このうち欧州ゼミについては橋詰かすみ先生、マルチェフ先生に、ご指導頂きました。2020 年に始まった新型コロナウイルスの感染拡大で 2022 年度までは現地を訪問することができず、現地とはオンラインによる交流に留まっていました。その新型コロナ禍がようやく終息に向かってきたこともあり、昨年度から国際間の交流が再び活発になり、GLP の欧州短期海外調査も再開できました。今年度もフランス・ドイツの企業・団体や大学（パリ・シテ大学日本語学科・ルール大学ボーフム歴史学部・デュースブルク・エッセン大学）を訪問しました。現地企業・団体の活動を理解する他、現地の学生との交流は GLP 学生にとって自身の視野を広げる有意義な機会になったかと存じます。無論、学生の安全な引率と現地での円滑な調査に向けて、橋詰先生、グローバルオフィスのスタッフの皆様にはご尽力がありました。改めて感謝申し上げます。こうした支援なしには現地調査の成功はなかったかと存じます。また、フランス・ドイツで対応頂いた関係者の皆様のご協力にも深く御礼申し上げます。

この調査報告書は「短期」と銘打ってはいますが、教員と学生の 1 年にわたる濃密な共同作業が生んだ成果といえます。多彩なテーマにわたり熱心に学生をご指導いただきました橋詰先生、マルチェフ先生には、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。本調査に参加した学生の皆さんは、ロシアのウクライナ侵攻や政治的な不安定でこれまで以上に混迷を深める欧州の経済・社会を理解しようと精一杯取り組み、この報告書に表されている優れた成果を挙げたことに、ぜひ自信を持

ってください。今回の挑戦を通して培った知識と経験が、皆さんのグローバルな舞台でのさらなる活躍へ繋がるようにと期待しています。

最後にGLP（欧州班）はOrbray株式会社(Orbray Co., Ltd.)からご寄付を頂いたことを申し添えたいと思います。また、Orbray株式会社、並木取締役社長と和田副社長にはGLP学生を対象に寄附講義も実施していただきました。ここに深く感謝申し上げます。

Foreword and Acknowledgements

Motohiro Sato

Dean, Graduate School of Economics &amp, Faculty of Economics

The Department of Economics at Hitotsubashi University has been implementing the Global Leaders Program (GLP) since the 2013 academic year. The goal of this program is to develop leaders who possess excellent communication skills in English and other languages, as well as specialized knowledge in economics and analytical skills, enabling them to thrive both domestically and internationally.

One of the main activities of the GLP is the short-term overseas research program, which has been conducted annually in China and Europe. Before engaging in their actual field research abroad, students take seminars to study about their target regions. For the European seminar, we have been fortunate to have guidance from Professors Kasumi Hashizume and Milen Martchev. Due to the outbreak of COVID-19 in 2020, it was not possible to visit these countries in person until the 2022 academic year, and interactions were limited to online exchanges. However, as the pandemic has finally started to come to an end, international exchanges have become active again, and we were able to resume the European short-term overseas research program as part of the GLP last year. This year, we visited companies, organizations, and universities in France and Germany, including the Japanese Studies Department at Université Paris Cité, the Department of History at the Ruhr University Bochum and the University of Duisburg-Essen. In addition to understanding the activities of local companies and organizations, the interactions with local students provided our GLP students with a valuable opportunity to broaden their perspectives. Of course, the safe supervision of the students and the smooth progress of the field research were made possible by the dedicated efforts of Professor Hashizume and the staff of the Global Office. I would like to extend my sincere gratitude to them once again. Without their support, the success of the field research would not have been possible. I would also like to express my deep appreciation to all those in France and Germany who assisted us.

Although this report is titled “short-term,” it represents the results of intensive collaboration between faculty and students over the course of a year. I would like to take this opportunity to extend my heartfelt thanks to Professors Hashizume and Martchev for their enthusiastic guidance on a wide range of topics. To the students who participated in this research, I encourage you to take pride in the outstanding results reflected in this report, as you worked diligently to understand the increasingly complex economic and

social situation in Europe, which has been further complicated by Russia's invasion of Ukraine and other political instabilities. I hope that the knowledge and experience you have gained through this challenge will lead to further success on the global stage.

Last but not least, I would like to mention that the European group within the Global Leaders Program received financial support from Orbray Co., Ltd.. The company's President Namiki and Vice President Wada also kindly gave special lectures to our GLP students. We would like to extend our deepest gratitude to them and their organization.

序文

一橋大学大学院経済学研究科　特任講師

橋詰かすみ

2024年度の欧州短期研修はもはやコロナ禍による中止の心配はなかったものの、ウクライナ戦争ならびにイスラエル・ガザ紛争が続く不安定な世界情勢の中で実施されることとなりました。そして私たちが渡欧した2月18日には、アメリカ合衆国とロシアがウクライナを交えない外相会談を決行しており、EUとアメリカ合衆国との亀裂はさらに深まることが予想されています。さらに、私たちのドイツ滞在中には当国の連邦総選挙が実施されました。極右政権の台頭というヨーロッパ全体のムーブメントに反し、ドイツでは2021年より中道左派の社会民主党（SPD）が政権の座についていました。ところが今回の選挙でSPDは第三党へ転落、中道右派のキリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)が第一党へ、そして極右政党「ドイツのための選択肢(AfD)」が第二党へ浮上するという結果となりました。ドイツの政治もまさに大局面を迎えていると言えるでしょう。

こうした情勢下、本年度の研修は2025年2月18日から2月28日までの11日間で実施され、私たちはフランスのパリ、次いでドイツのデュースブルクとフランクフルトを訪れました。

本研修の核となっているのが、パリ・シテ大学、そしてルール大学ボーフムのご協力のもとデュースブルク・エッセン大学にて開催された交流授業です。まずパリ・シテ大学において、11名の学生たちは各々が設定したリサーチテーマに基づくプレゼンテーションを行い、現地学生と活発な議論を交わしました。英語でプレゼンテーションをするという経験、そして現地学生からのフィードバックを通して、参加学生たちは多くのことを学んだであろうと思います。

そしてドイツでは、デュースブルク・エッセン大学を会場とし、ルール大学ボーフムとも合同の交流授業を実施しました。こちらの交流授業では「移民」をテーマとして、参加学生たちはグループ・プレゼンテーションならびに現地学生とのディスカッションを行っています。その後はデュースブルク市の小学校ならびに移民統合事務局を訪問し、参加学生たちは現場で責任者として働く方々からお話を伺うこ

とが叶いました。本報告書では、参加学生たちが準備したプレゼンテーションの内容、そして実際に経験した交流授業の記録を掲載しています。

上記に加えて、パリとフランクフルトでは複数の企業ならびに公的施設を視察する機会をいただきました。視察先は多岐にわたっており、野村フランス、マブチモーター・ヨーロッパ、Honda R&D・ヨーロッパといった日系企業から、フランス系企業の Village by CA やスタートアップ支援施設 Station F、そして在フランス日本国大使館とパリ日本文化会館まで訪問し、さらにフランスの児童福祉についてのご講演を受けることもできました。密度の濃いスケジュールではありましたが、学生たちは全てのプログラムに積極的に参加した上で、空き時間を縫うように様々な文化施設や歴史名所にも訪れています。本報告書では、学生たちによる訪問記も掲載しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

このような充実した現地研修は、多くの方々のご支援なしには実現しえませんでした。紙幅の都合上、全ての方のお名前を挙げることはできませんが、以下の方々に格別の感謝を申し上げます。まずパリ・シテ大学の中島晶子先生、佐久間美樹先生、そしてルール大学ボーフムのカチャ・シュミットポット先生、ウタ・ホーン先生、ならびにデュースブルク・エッセン大学のケアスティン・ルクナー先生のご協力により、交流授業を開催することができました。

さらに充実した視察プログラムが実現したのは、ひとえに如水会支部の皆様、とりわけ様々なご縁を結んでくださったパリ支部長の山谷裕幸様（在フランス日本国大使館公使）、フランクフルト支部長の岡裕人様（フランクフルト日本人国際学校事務局長）のおかげです。

そして野村フランスの金澤啓樹様、Station F ならびに Village by CA の視察をお取次ぎいただいた日仏経済交流委員会の富永典子様、日仏複数大学間の交流会をご企画くださった HEC 同窓会のピエール＝イヴ・カルパンティエ様、パリ日本文化会館の国重沙耶香様、佐藤健様、子ども家庭福祉研究者の安發明子様、マブチモーターの阿部一博様、Honda R&D の和田岳弘様、荻原泰史様、ご多用中にもかかわらず誠にありがとうございました。

また、今年度の短期海外調査は Orbray 株式会社による寄附講義の一環として実施されました。Orbray 株式会社には資金面での手厚いご支援をいただいただけでなく、2024 年 12 月 3 日には並木里也子取締役社長と和田統副社長に本学へお越しい

ただき、GLP 選抜クラス向けの講演も行っていただきました。講演では、まさに「グローバル・リーダー」としてのビジョンが垣間見える非常に興味深いお話を伺いました。普段の勉学とは異なる内容に学生たちが大いに触発されている様子を窺うことができ、彼らにとっては目前の欧州短期研修のみならず、将来のキャリアにまで影響を与える意義深いイベントとなりました。Orbray 株式会社の関係者の皆様には、心より深謝する次第です。

最後に学内関係者として、学生たちに英語を指導してくださったミレン・マルチェフ先生、そして本研修含む「グローバル・リーダーズ・プログラム」をバックアップしてくださったグローバル・オフィスの梶浦里葉様、山下都様に心よりお礼申し上げます。

Foreword

Kasumi Hashizume
Specially Appointed Assistant Professor,
Graduate School of Economics

The 2024 short-term international field study in Europe was to take place during an unstable world situation with the ongoing Russia-Ukraine War and the Israeli-Palestinian Conflict, although there was no longer any fear of its cancellation due to the Corona disaster. On February 18, the day we arrived in Europe, the United States and Russia decided to hold a foreign ministerial conference without Ukraine, so the rift between the EU and the United States is expected to deepen further. Furthermore, during our stay in Germany, the country's federal elections were held. Contrary to the European movement of the rise of far-right governments, the center-left Social Democratic Party (SPD) had held power in Germany since 2021. However, this election saw the SPD fall to third place, with the center-right Christian Democratic Union and Christian Social Union (CDU/CSU) moving into first place, and the far-right Alternative for Germany (AfD) into second place. German politics may indeed be coming to a major turning point.

In this context, this year's field trip took place over 11 days from February 18 to 28, 2025. I and our 11 students visited Paris in France, and then also Duisburg and Frankfurt in Germany.

The pillar of our field study was two joint seminars: one organized by Paris-Cité University and one by the Ruhr University Bochum and the University of Duisburg-Essen. At Paris-Cité University, our students gave a presentation based on their own research and engaged in lively discussions. Through the experience of giving a presentation in English and receiving feedback from the local participants, the students were undoubtedly able to learn many new things.

In Germany, a joint seminar under the theme of "Migration" was held at the University of Duisburg-Essen, with the cooperation of the Ruhr University Bochum. Our students first gave a group presentation about the situations regarding migration in Japan and Germany, which was followed by discussions with their local counterparts. After the session, we visited two locations in the city of Duisburg, an elementary school and the Office for Integration and Immigration Service, where we were fortunate to meet professionals working in the field of immigrant integration. The English language portion of this annual report consists of the presentations which the students prepared in our seminars during the course of this academic year, as well as the impressions and experiences they gathered while conducting their field trip.

In addition to the above, we had the opportunity to visit several companies and public facilities in Paris and Frankfurt. The sites we inspected ranged from Japanese companies such as Nomura France, Mabuchi Motor Europe and Honda R&D Europe, to French companies such as Village by CA and Station F, a start-up support facility, as well as the Embassy of Japan in France and the Japan Cultural Institute in Paris. We also attended a lecture on child welfare in France. Despite the intense schedule, our students actively participated in all programs and visited various cultural and historical sites in their spare time. We hope you will find the records of these visits interesting as you read along.

This enriching research trip would not have been possible without the support of many people. We cannot list all the names due to space limitations here, but we would like to express our special thanks to the following persons. First, we owe our success in the joint seminars entirely to Prof. Akiko Nakajima and Prof. Miki Sakuma from Paris-Cité University, Prof. Katja Schmidtpott and Prof. Uta Hohn from the Ruhr University Bochum, as well as Dr. Kerstin Lukner from the University of Duisburg-Essen.

The field study was also supported by our Alumni association (Josui-kai), and especially by Mr. Hiroyuki Yamaya (Embassy of Japan in France), head of the Paris Branch, and Mr. Hiroto Oka (Japanese International School in Frankfurt), head of the Frankfurt Branch, who provided us with a variety of opportunities to meet people of great interest to the program.

We would also like to express our sincere appreciation to Mr. Hiroki Kanazawa (Nomura France), Ms. Noriko Carpentier-Tominaga (Franco-Japanese Exchange Committee) who acted as an intermediary for the visit to Station F and Village by CA, Mr. Pierre-Yves Carpentier (HEC Alumni) who organized an exchange meeting between several French 'grandes écoles' and Japanese universities, Ms. Sayaka Kunishige and Mr. Ken Sato (the Japan Cultural Institute in Paris), Ms. Akiko Awa (child welfare researcher), Mr. Kazuhiro Abe (Mabuchi Motor Europe), Mr. Takehiro Wada and Mr. Yasushi Ogihara (Honda R&D Europe), who all generously contributed their time and effort.

In addition, this year's short-term field study was conducted as part of a course specially organized for us by Orbray Co., Ltd. The company not only provided us with generous financial support, but also invited Ms. Riyako Namiki (President & CEO) and Mr. Osamu Wada (Executive Vice President) to visit our campus on December 3, 2024, to give a lecture to the Global Leaders Class. The lecture was very interesting and gave us a glimpse of their vision of what a "global leader" should be. The students seemed to be deeply inspired by the content, which was different from their usual studies. For them, it has no doubt been a meaningful event that is bound to have an impact not only on what they will take away from their actual

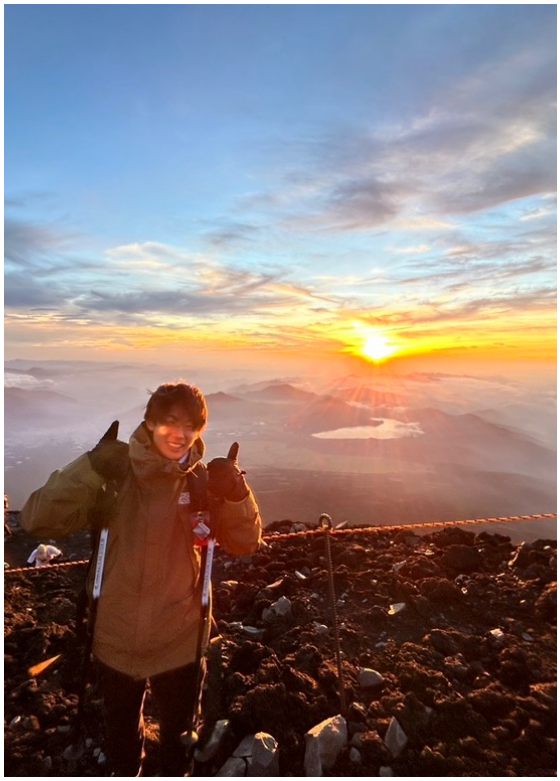
field trip to Europe, but also on their future careers. We would like to express our deepest gratitude to everyone involved with Orbray Co., Ltd.

Finally, we are deeply grateful to our own faculty and staff at Hitotsubashi University: Professor Milen Martchev, who worked to improve the students' English skills, together with Ms. Satowa Kajiura and Ms. Miyako Yamashita of the Global Office, who support our entire Global Leaders Program, including this research project.

Chapter 1

INTRODUCTION

経済学部 2 年　石田宗嗣



経済学部 2 年の石田宗嗣です。自分はラクロス部に所属しており、留学などにいくことは部の規則的に厳しいのですが、中高の時から夢だった海外への留学を諦めきれず、形や期間は違うものの、この短期海外調査に応募しました。今回許可をしてくれて応援してくれた関係各位には頭が上がりません。このゼミで一緒に活動した周りの GLP 生はとても優秀で、この一年間はとても刺激の多いものでした。ゼミを通して「欧州」のさまざまなことを調べたり、学んだりしていくのですが、「欧州」に対して抱いている漠然としたイメージをいい意味でも悪い意味でも壊してくれるような新しい発見や、全く新しい「欧州」へのイメージの獲得が期待できると思います。欧州での研修を通じてグローバルの視座の獲得や、文化的な風土を直に感じて精一杯吸収できればと思っています。現地で発見した小さなことを大切に、日本に持ち帰ってこようと思います。

ちょっとでもヨーロッパに興味がある人、ヨーロッパに行きたいけど留学だと重すぎるけど、旅行じゃ少し物足りないみたいな人にとてもオススメなゼミです。ぜひ応募してみてください！

経済学部 2 年　印藤康介

こんにちは。経済学部 2 年の印藤康介と申します。この文章を書いている今日は、一年間私たちを受け持ってくださったマルチェフ先生のゼミの最終日でもあり、帰宅してきた今、感慨深い気持ちに浸っています。

なぜ感慨に浸っているのかといえば、それはやはり一年間の欧州天気海外調査ゼミが大変ではありつつも、非常に刺激的で学ぶところが多かったと感じたからです。前述のマルチェフ先生の授業では、ちょっとしたプレゼン発表でも先生の指摘やアドバイスから、英語の面と内容面の両方で自分の未熟さや単純さを感ぜずにはいられませんでした。橋詰先生の方の授業でも、各々の発表やそれに対するリアクションが鋭く面白く、その場で即座に反応する力が少しはついたのではないかと思います。自分を多方面から成長させたいと思い、このゼミに入りましたが、実りのある一年間とすることができ満足です。

現地での調査も目前まで近づいていますが、私にとって海外に出向くのはこの海外調査で初めてなので、自分がどのようなカルチャーショックを受けて帰ってくるか楽しみです。今後も好奇心の赴くままに、様々な機会に挑戦していきたいと思います。

法学部 3 年 KIM SEOYEON

はじめまして！法学部 3 年のキム・ソヨン（KIM SEOYEON）です。普段は、K-pop コピーダンスサークル「Spica」に所属し、小平国際寮の Resident Assistant（RA）、さらに Language Community のコーディネーターとしても活動しています。

大学に入学してからの 3 年間、第二外国語としてフランス語を学んできました。しかし、実際にフランス語を使う機会は限られていたため、この研修を通じてフランスで現地の方々と直接会話できることを楽しみにしていました。また、私は多様なバックグラウンドを持つ人々と話すことが好きで、これまでも積極的に交流の場を広げてきました。その経験を通じて、私の視野が大きく広がったと実感しています。そのため、ドイツやフランスの大学生との交流も大きな魅力の一つとして、この研修に参加しました。

ゼミに参加して特に印象的だったのは、まだ自分が知らない世界がいかに広いかを実感したことです。私は法学部生ですが、ゼミでは経済学的な視点からの議論が多く、新しい知識を得る機会に恵まれました。また、自分の研究を通じて、これまで深く考えたことのなかった社会問題にも触れることができ、非常に貴重な学びとなりました。

この研修を通じて、異なる学問分野や文化的背景を持つ人々と交流し、より多角的な視点を養うことができたと感じています。今後もこうした経験を活かし、さらに学びを深めていきたいと思います。

経済学部 2 年 榊原将輝

経済学部 2 年の榊原将輝です。課外活動では国際部ディスカッションセクションと総合アミューズメント研究サークル LaBomaba に所属しています。欧州地方への留学を志して参りましたが、ニュースや日本史以外、欧州に関する経験や知識がなかったためこちらを選択しました。「百聞は一見にしかず」と言うように、日本というフィルターを通さない欧州を実際に自分で体験することがとても楽しみです。普段は画面の向こう側に映っている土地に足を踏み入れることに、なんだか不思議な感覚がしていますが、ゼミで学んだことを活かして、良き経験にできたらと考えています。

経済学部 2 年 坂田綾香

一橋大学体育会ゴルフ部とコピーダンスサークル Spica に所属していて、Spica の副代表をやっています。ゴルフは、祖父がゴルフ場を経営しているのですが、大人がやるスポーツのイメージが強く、それまでやろうと思い立たなかったので、大学入学を機に始めました。また Spica についても、高校時代から kpop はよく聴いていたのですが、ダンスもやったことがなかったので、新しいことを始めたいと思って入りました。部活やサークルのメンバーとは練習の時間だけでなく、ドライブや旅行に行ったり、アフタヌーンティーに行ったりなど、遊びに行くことも多いです。この欧州短期海外調査に参加したきっかけは、経済学部 GLP に参加する場合、この短期海外調査に参加が必須だったということ理由の一つではあるのですが、初めてヨーロッパに行ったときの旅行がとても印象的で、またヨーロッパに行きたいと思い、参加を決めました。今回の欧州短期海外調査では、フランスやドイツの学生と交流する機会もたくさん設けられています。私たちは、この一年間を通して、近代のヨーロッパの歴史を学んだり、学生との交流のための発表の準備をたくさんしてきました。欧州短期海外調査に行くメンバー同士の仲も深まったうえで、ヨーロッパに行けるので、この短期海外調査がとても楽しく有意義なものになると思います。来年、イギリスのマンチェスターに 1 年間、留学に行くのですが、その交換留学に行く前に実りあることを会得できたらよいなと考えています。

法学部 3 年 柴田光輝

法学部 3 年の柴田光輝（しばたこうき）と申します。私がこのゼミに参加した一番の理由は、自分の見識を広げたかったからです。現在、私は法学部の法曹コースに所属しており、日々法律の知識を深めるために勉学に励んでいます。私は、法学という学問は、社会のあらゆる分野と密接に結びついていると考えています。国際社会における問題解決にあたっては、法律の知識だけでなく、経済学や政治学をはじめ、多角的な視点・幅広い知識が不可欠です。そのような思いから、他学部の学生と議論をし、欧州各国の動向を現地で調査することのできるこのゼミへの参加を決意しました。ゼミに参加してみると自分の中にはない視点や考え方に触れる機会が多く、普段の自分の学びでは得られない経験をすることができました。経済学部に限らず、自分の視野を広げたい方にはおすすめです！

経済学部 2 年　高橋空

はじめまして。経済学部 2 年の高橋空と申します。現在は Pro-K という大学近くの商店街の復興を主な活動とするまちづくりサークルに所属し、「Cafe ここたの」の運営を行っています。

私が今回の欧州短期海外調査に参加した理由としては、日本以外の学生視点の世界の多様な問題についての意見を直接聞いてみたかったこと、高校時代に世界史に興味を抱き、いつかヨーロッパを訪れてその文化を肌で感じたいと強く思っていたことです。特に美術史に関心があるため、これから数々の絵画の題材となった街並みを実際に訪れることができるかと思うと非常に楽しみです。

正直、ヨーロッパに行ってみたいという気軽な気持ちで参加を決めた私ですが、ゼミの授業を通じて興味のあるテーマについて深く調べたり、ゼミのメンバーと意見を交わしたりする中で自分の将来についてより具体的に考えるきっかけにもなり、刺激的な 1 年間を過ごすことができました。今回の調査を通して、現地に行かないと知り得ない新しい世界を体感し、その文化や根付いている考え方などを学び取りたいと思います。

経済学部2年 田口蒼一郎

はじめまして。経済学部２年の田口蒼一郎です。愛知県知多半島で生まれ、勉強と家庭のおかげで一橋へ、経済学研究会というサークルに所属しています。GLP１１期生でもあります。

自分は､留学をしてある人に会うため、そしてその道の中で仲間をつくるためにGLPに応募し、調査に参加することになりました。一年に渡るゼミは山も谷もあり、そうして気の置けない仲間を得られました。また、この調査には多くの方が関わっておられます。今年が初年度の橋詰先生をはじめ、マルチェフ先生や事務の方には大変お世話になりました。このような環境に一年身を置けたことは僥倖であり、これからの調査にも身が引き締まる思いです。

偉大な経済学者の宇沢弘文は、人間的に魅力的で、豊かな文化・経済社会を維持するための社会装置としての「社会的共通資本」を重要視しました。一橋大学やこの欧州調査の環境は、単にグローバルだけでない人間的な豊かさを養うになるための、社会的共通資本のような一つの土台かと思います。過去の参加者とこの資本を共有できることを誇りに思い、そしてまだ見ぬ未来の参加者とも共有できることを光栄に思います。まずは自分が、この資本の在り方を示す一人になれるよう邁進してまいります。

経済学部 2 年　谷川陽海

経済学部 2 年の谷川陽海です。私は実家から 2 時間半程かけて通学しているのですが、その遠さを理由にして大学に入ってからは怠けた生活を送っていました。

そんな私が GLP 生でもないにも関わらず、このゼミに参加した理由は「海外に行けるうえに単位がもらえるなんて！」という非常に安直な分かりやすいものでした。ゼミに入ってみると、参加者達の意識の高さに気圧されました。しかし、一年間を通して日本語・英語を用いて様々なテーマについてゼミ生たちと議論を重ね、新たな視点や多くの学びを得ることが出来ました。またそういった経験によって、自分の意識も変わり、今回の調査が終了した後も様々なことについて学び、経験を重ねていきたいと考えるようになりました。1 年前から私の視野は大きく広がり、曖昧ではありますが自分の将来のビジョンを持つことが出来るようになりました。自己紹介の場を借りて、関わってくださった皆さんに感謝を伝えたいと思います。

もし私と同じようにだらだらと大学を過ごしてしまっている人がいたら、ぜひ海外短期調査に参加してみてください！きっと大学生活が大きく変わると思います！

経済学部二年　前原優風

初めまして。優風でゆうかと読みます。今回の欧州短期海外調査では酒蔵ツーリズムをテーマに調査を進めていったのですが、興味を深めていこうと思った結果、①酒蔵でのバイトを始める②一人で酒蔵巡り旅に出ることにしました。①に関しては青梅線に乗っていったところにある、石川酒造のゲストハウスにインスタ DM で突撃して働かせてもらいました。結果的には、ゲストハウスを運営しているのは石川酒造とは異なる会社だったので直接酒蔵に関わることはできなかったのですが毎度酒蔵の雰囲気を味わいながら通えたこと、賄いがありえないくらい美味しいかつのんびりシフトだったので最高のバイトでした。②の一人旅では日本三大酒どころと言われる、灘、伏見、西条のうち灘と伏見に一橋祭期間中、旅立ちました。ハイライトのみお話しすると、以前一度お会いしたことのあった佐々木酒造の杜氏に偶然出くわして、外国人カップルへの酒蔵見学に通訳として参加させてもらうことができたのです。端折りすぎですがとにかく偶然と縁がもたらしてくれた良い経験になりました。そして、最後に本来の自己紹介らしいことについて書くとすると、大学ではふりかけ（バスケ）、たまこまち（ゲストハウス運営）、インカレのダンスサークルに入っています。継続力と集中力に欠けていて浅い人間になってしまうのではないかという不安は常にぬぐい切れないですがどうにか生きています。こんな甘えた生活を送らせてもらえる人生、親に感謝。

法学部２年　八ッ橋　賢

初めまして。法学部２年の八ッ橋と申します。私は普段一橋大学フォークソングクラブという軽音サークルでベースを弾いています。ほぼ大学生に入って始めたようなものですが、周りの人達に助けられながら精進しております。私が法学部であるにも関わらず経済学部 GLP の一環である欧州海外短期調査への参加を志望したのは第一に欧州に行けるという魅力からでしたが加えて私が国際関係コースへの進学を希望しているというのも大きな要因です。国際政治という概念が誕生し、長年その主役であり続けた欧州の、しかも主要なアクターであったドイツとフランスに行けるというのは今後の人生を大きく変化させるだろうと思い志望しました。経済学部生でない人間が参加して良いものかと最初こそ困惑しましたが、ゼミ活動を通じて国際政治に欠かせない、経済的分野について知見を深めることができています。他学部生も参加する意義のあるプログラムだと思います！

ゼミの紹介

柴田光輝

春夏学期の初回授業では、欧州短期調査が経済学部 GLP 生だけでなく、他学部や異なる学年の学生で構成されていることから、まずお互いの自己紹介を行い、先生よりゼミの概要について説明を受けました。一年間を通じて、アットホームな雰囲気の中、自由な議論やコミュニケーションを重視するゼミの方針のもと、それぞれが主体的に学びを深める環境が整っていました。

春学期には、『ヨーロッパ現代史』（松尾秀哉著、2019 年）を輪読し、現代に至るまでのヨーロッパが抱える諸問題を概観しつつ、各章における筆者の主張、歴史的背景について議論しました。また、各自が欧州のニュースを紹介し、他の学生との意見交換を通じて興味関心を広げました。

夏休みにかけては、ゼミの主活動である論文執筆に取り組みました。先生から論文の書き方に関するガイダンスを受けた後、各自の研究テーマを選定し、図書館での参考文献調査や学生間でのフィードバックを通じて内容を深めました。夏休み期間中には自主的な執筆活動を行い、鋭い指摘や意見を共有する中で大きな刺激を受けました。このプロセスを通じて、論理的思考や分析力を高めるとともに、学術的な文章をまとめるスキルを習得しました。

秋冬学期には、執筆した論文を基に英語でのプレゼンテーションを準備しました。ミレン・マルチェフ先生から英語原稿の校正や効果的なプレゼンテーションの方法を指導いただき、内容や表現方法を磨き上げました。この活動は、英語力の向上だけでなく、国際的な場で説得力のある発表を行うスキルを養う貴重な機会となりました。また 12 月には株式会社 Orbray の寄付講義にも出席しました。事業内容の説明に加えて、並木社長と和田副社長それぞれのキャリアに関するお話を伺うことができ、グローバルに活躍するお二人の姿に感銘を受けました。

さらに、今回の調査では、現地企業訪問やデューブルクでの移民街の視察、パリ・シテ大学やルール大学ボーフムとの交流会を行いました。特に移民街の訪問では、移民問題に関する具体的な理解を深めることができ、現地での体験を通じて社会問題を多角的に捉える視点を得ることができました。

これらの経験は、ゼミメンバー全員にとって学問的および個人的に成長する

機会となり、今後の課題解決や国際的な活動に向けた大きな糧となりました。最後にゼミの皆を代表して、このような貴重な活動を支えてくださった現地の方々やグローバル・オフィスをはじめとする学内関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

Chapter 2

RESEARCH & PRESENTATIONS

A. Presenting with Students from Paris-Cité University

How Will Self-Driving Technology Change the World

Shuji Ishida

Feasibility and impact on the logistics and transportation industry in terms of legal development and moral public awareness.

1. Introduction

My name is Shuji Ishida from Hitotsubashi University. In my research, I examined the possibility that self-driving cars could solve the labor shortage problem in the logistics and transportation industries from the perspective of legal development and public awareness.

2. Current Situation in Japan and Germany

First, let me explain the current situation. With Japan's declining birthrate and aging population, as well as the ongoing reform of work styles, labor shortages are having a significant impact on the logistics industry and public transportation. In particular, driver shortages in logistics and restrictions on working hours due to legal reforms have become serious issues. Cab and bus drivers are also in short supply, and there is a growing sense of crisis that the infrastructure of our daily lives cannot be sustained.

On the other hand, there are growing expectations for “self-driving cars” as a technology-based solution.

Therefore, this study focused on the following three points:

- Current status of automated driving technology and progress in legislation
- Comparison of German and Japanese people's ideas about self-driving cars
- How automated driving technology can be used as a solution to manpower shortages in logistics and public transportation

As a research methodology, we compared Japan and Germany.

We chose Germany because its economic scale and the strength of its automobile industry are similar to those of Japan, making it a suitable comparison.

Let me now summarize the current issues in Japan and Germany.

First, we will discuss the issue of labor shortages in logistics and public transportation.

In Japan, there is a lack of standardization in logistics operations, which places a heavy burden on manual labor. In Germany, on the other hand, the Euro pallet, a unified standard, is in widespread use and is improving efficiency.

In the area of public transportation, there will be a shortage of 36,000 drivers in Japan and 10,000 drivers in Germany by 2030, due to the aging of the workforce and stricter regulations.

Next, let's look at public awareness.

Please see the graph here. This is a survey asking what concerns people have about self-driving cars.

In Japan, there is a high level of concern about the legal development and responsibility for self-driving cars. On the other hand, in Germany, concerns about the technology itself are higher.

The next question is about the progress of legal development and technological development.

There are six levels of automated driving. In terms of the current legislation, Japan lifted the ban on Level 3 automated driving in 2020, and Level 4 will be lifted in 2024. Germany has also developed Level 4 technical requirements and is currently conducting trials in urban areas.

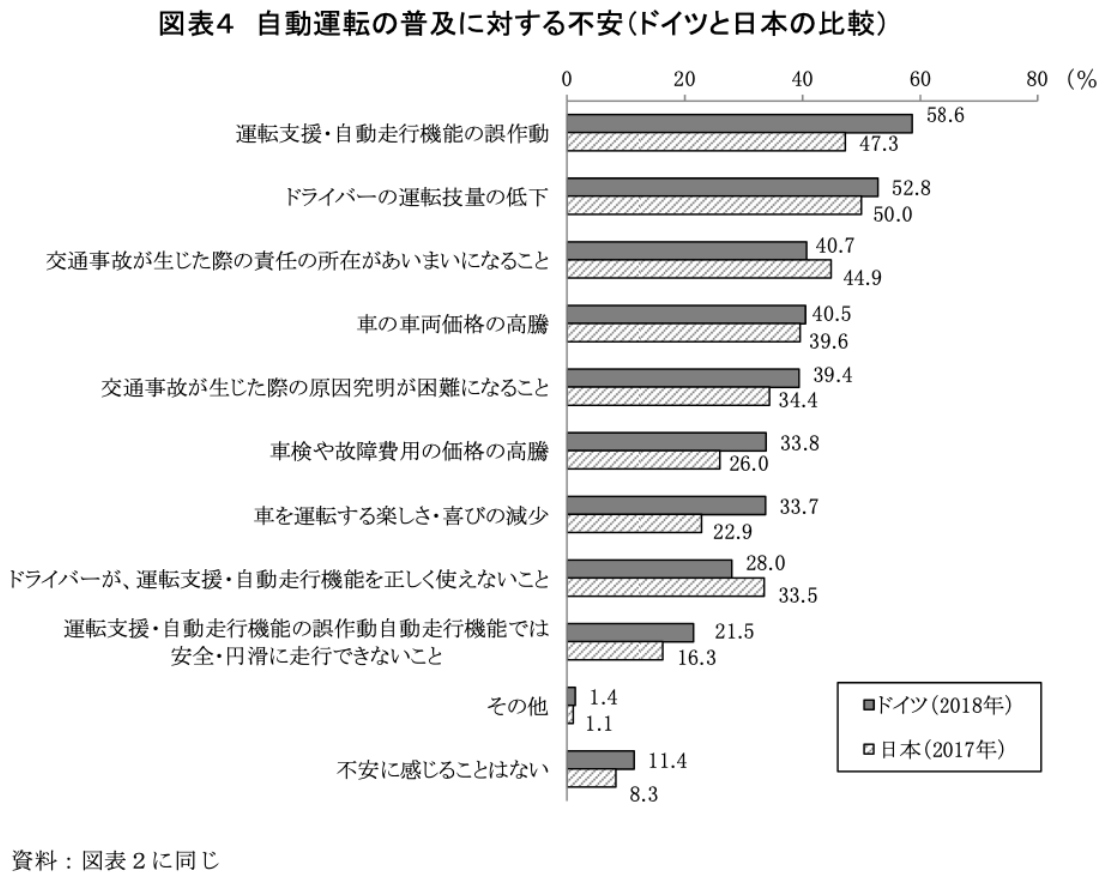


Fig. 1 *Concerns about the spread of automated driving (Germany and Japan)*

I will summarize the above.

First, as for issues in the logistics industry, much of the work is done manually in Japan, while in Germany efficiency has been improved through standardization. Therefore, the cost of introducing automated trucks and underground object tunnels may be greater in the former than in the latter.

Furthermore, as for public transportation issues, the shortage of bus and cab drivers is common to both Japan and Germany, but the impact of regulations is more pronounced in Japan. Unmanned buses and cabs can be expected to compensate for this.

Regarding differences in public awareness, Germany has a high level of “anxiety about technology,” while Japan has a high level of anxiety about “responsibility.” We found that this requires different approaches in each country.

3. Various Solutions in the World

Around the world, various solutions are being explored to take advantage of automated driving technology. Here are some examples:

In the United States, unmanned cabs are already in operation.

Google's Waymo and GM's Cruise offer unmanned cabs and have reduced collisions by 57%. However, there have been some accidents due to technical problems, and challenges remain.

In addition, Switzerland has started an initiative to build logistics tunnels.

A project called “Cargo Sous Terrain” is underway to streamline logistics by allowing unmanned automated robots to pass through underground tunnels. It is thought that a tunnel network concept between Tokyo and Osaka is possible in Japan based on this project. In Europe, a tunnel network connecting Paris and Germany may also be possible.

In Japan, a smart city project called “Woven City” is underway, led by TOYOTA.

This smart city plan is promoting efficient infrastructure development through the use of self-driving buses and logistics robots.

By building on the successes of these plans, it may be possible to solve the labor shortage in logistics and public transportation issues in Germany and Japan.

4. Conclusion

Finally, the following conclusions can be drawn from this study.

Automated driving technology can be a promising solution to logistics and public transportation problems in Japan.

Increased transparency of legislation and dissemination of best practices are needed in Japan.

In order to change public awareness, it is important to widely communicate the results of technology and legislation.

Harmony between technology and society is required to protect the infrastructure that supports our daily lives.

This concludes my presentation.

I am honored to have this opportunity to share our thoughts on how automated driving technology might affect our society.

References

① J. Connelly, W. Hong, R. Mahoney, D. Sparrow, “Current challenges in autonomous vehicle development”, 09,05,2006

② Teresa Brell, R. Philipsen, M. Ziefle “sCARy! Risk Perceptions in Autonomous Driving: The Influence of Experience on Perceived Benefits and Barriers”, 21,09,2018

③ Viktoriya Kolarova, E. Cherchi “Impact of trust and travel experiences on the value of travel time savings for autonomous driving”, 01,10,2021

④ Walter Morales-Alvarez, N. Smirnov, Elmar Matthes “Vehicle Automation Field Test: Impact on Driver Behavior and Trust”, 04,06,2020

⑤ Elizabeth A. Mack, Steven R. Miller, C. Chang “The politics of new driving technologies: Political ideology and autonomous vehicle adoption”, 24,03,2021

⑥ Patricia Böhm, Martin Kocur, Murat Firat, and Daniel IsemannAuthors Info & Claims “Which Factors Influence Attitudes Towards Using Autonomous Vehicles?” 24,9,2017

⑦ Shinpei Kato, E. Takeuchi, Yoshio Ishiguro, Y. Ninomiya, K. Takeda, T. Hamada, “An open approach to autonomous vehicles”, *IEEE Micro*, 2015

⑧ T. Luettel, M. Himmelsbach, Hans-Joachim Wünsche, “Autonomous Ground Vehicles—Concepts and a Path to the Future”, *IEEE*, 2012

⑨ Sven Beiker, Ryan Calo, “Legal Aspects of Autonomous Driving”, Santa Clara Law Review, 2010

⑩ R. Sushma, J. Satheesh Kumar, “Autonomous Vehicle: Challenges and Implementation”, *Journal of Electrical Engineering and Automation*, 2022

⑪ 山本 翔子, 結城 雅樹『トロッコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究』、2019 年

⑫ 金岡 京子『高度自動運転車の運行に係る制度整備課題―ドイツ道路交通法との比較法的検討―』損害保険研究 80 巻 3 号、2018 年

⑬ 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部・官民データ活用推進戦略会議「官民 ITS 構想・ロードマップ 2017」2017 年 5 月 30 日

⑭ 石田成則「自動運転が引き起こす保険業界の変貌とその対応」保険学雑誌 641 号（2018）33～37 頁

⑮ 後藤 元『自動運転・ライドシェアと民事責任』、損害保険研究 82 巻 1 号、2020 年

⑯ 後藤元「自動運転車と民事責任」弥永真生＝宍戸常寿編『ロボット・AI と法』（有斐閣,2018 年）

⑰ 明治大学自動運転社会総合研究所監修『自動運転と社会変革−法と保険』（商事法務,

2019 年）

⑱ 井川 雅貴, 村田 秀則, 福重 真一, 小林 英樹、『自動運転普及シナリオのライフサイクルシミュレーション』、2019 年度精密工学会春季大会書誌

⑲ 中山 幸二、『自動運転車両に関する法制度の現状と今後の課題』、IATSS Review 48 巻 2 号、2023 年

⑳ 樋笠尭士「自動運転の倫理」『自動車技術』Vol.77、No.1、pp.48-53、2023 年

㉑ 中山幸二「自動運転をめぐる法的課題と法整備の動向」『明治大学社会科学研究所紀要』59 巻、1 号、pp.183-202、2021 年

㉒ 谷口 綾子、『「クルマ」と「自動化するクルマ」の社会的受容を考える』, 2022 年 27 巻 7 号 p. 7_39-7_45

㉓ 中尾聡史, 田中皓介, 谷口綾子, 神崎宣次, 久木田水生, 宮谷台香純, 南手健太郎『自動運転システムの社会的受容の日英独比較分析—AVs を巡る論調に着目し』、 第 62 回土木計画学研究・講演集、2020 年

㉔ 堂柿栄輔『交通秩序の規範と日本人の法意識, 土木史研究講演集, Vol. 35, pp. 99-108, 2015.

㉕ 遠藤 薫、自動運転と社会倫理―文化的背景をふまえて』, 25 巻 5 号 p. 5_48-5_51、2020 年

㉖ 遠藤薫「AI 化する社会と倫理的ジレンマ――トロッコ問題の日米中文化比較から考える」『学習院法務研究』第 14 号,2020 年

㉗ 遠藤薫,『ロボットが家にやってきたら…――人間と AI の未来』, 岩波書店, 2018

㉘ 馬場 厚志『自動車分野における自動運転の安全論証(<特集>IT 技術・自動運転技術が担う交通安全)』、日本機械学会誌、 125 巻 1241 号 p. 13-16、2022 年

㉙ 笠木 雅史『自動運転の応用倫理学の現状と課題：自動運転車とトロリー問題』、日本ロボット学会誌、2021 年 39 巻 1 号 p. 22-27

㉚ 銭 雅純, 瀧本 禎之, 安村 明、『社会的人口属性が日本人の道徳判断に及ぼす影響-道徳判断における二重過程理論に基づいて-』人間環境学研究史、2023 年 21 巻 1 号 p. 61-68

報告要旨

本レポートは、公共交通産業などにおける人手不足問題への解決策としての自動運転技術について今後の展望と課題をまとめたうえで、国民性や法整備の観点からその実現可能性をドイツとの比較を通して考察したものである。物流業界：日本では物流作業の標準化が進んでおらず、手作業負担が大きい。一方、ドイツでは「ユーロパレット」の統一規格が導入され、効率化が進んでいる。公共交通分野においては、2030 年には日本で 3.6 万人、ドイツで 1 万人の運転手不足が予測されている。国民の意識では、日本では法整備や責任問題への懸念が大きく、ドイツでは技術的な安全性への不安が高くなっている。技術・法整備の進展状況としては、自動運転レベル 3（条件付き自動運転）は日本では 2020 年に解禁され、レベル 4（特定条件下での完全自動運転）も 2024 年に解禁された。ドイツでもレベル 4 技術要件を整備し、都市部での試験運用を進めている。対して、世界の先進事例として、アメリカ：Waymo や Cruise が無人タクシーを運行し、衝突事故を 57%削減。しかし技術的課題も残っている。また、スイスでは物流産業の人手不足を補う手段として、「Cargo Sous Terrain」プロジェクトを進行中であり、無人ロボットによる地下物流トンネルの建設を推進している。また日本でもトヨタが「Woven City」プロジェクトを進め、自動運転バスや物流ロボットを導入している。結論としては、自動運転技術は、日本の物流・交通業界の課題解決に有望な手段となりうるが、日本では法整備の透明性向上とベストプラクティスの共有が必要であり、国民の意識改革には、技術や法整備の成果を広く伝えることが重要だと考えられ、技術と社会の調和を図り、持続可能なインフラを守る必要がある。

パリ・シテ大学討論会報告

１．ディスカッションについて

- フランスでは自動運転技術についてどのような受け止めがなされているか？
  - ➢ 自動運転技術は必要じゃなく、フランスの世論では、まだまだ導入は難しいという考えが広まっていることが分かりました。

- 日本やドイツ、アメリカなどの先進的な開発についてはどのように感じているのか。
  - ➢ 日本とドイツにおける開発のテンポ感について、フランスの大学生に印象を聞くことができました。自動運転車が事故を起こした際の責任の所在については、フラン

スは日本とドイツの間のような国民性があると感じました。ただ、フランスはドイツよりも技術が進んでおらず、法規制が厳しいために改革的な技術革新が起きづらいという意見がありました。また、アメリカの急進的な開発についても感覚としては早いというものが大半でした。ロサンゼルスなどで自動運転タクシーを導入していることは認知されていたものの、フランスへの導入はまだ時期尚早だという意見が大半を占めていました。

- フランスでは EU の規制に対してはどのような意見があるのか。

➢ フランスでは規制が強く存在しているという点から、フランスは日本やドイツなど自動運転のレベルを 4 まで解禁している国と比べて、急進的な動きが起きづらいこともわかりました。
今回の研修では、他の研修先でも規制の話が多くあったことから EU が規制を作るという世界的な潮流を実感しました。

２．今後の課題

フランスではルノーが日産などと協力して自動運転技術を開発しているところもあるものの、まだまだドイツや日本と比べて技術開発が遅れているところがあるということが分かりました。また、同時に国民感情としてまだまだ自動運転技術に対する信頼度が低く、自動運転車が普及するには時間がかかるという認識があることが分かりました。今後の課題としては、さらなる技術革新を進めるとともに、フランスで課題となっている規制の緩和を訴え、国民感情としてもさらに自動運転技術に対する信頼を構築することが必要であると感じました。

What is the Cause of Japan's Low Productivity?

Kosuke Into

It has been pointed out that Japan's labor productivity has been especially low among the main developed countries, in spite of its advanced technologies. What is causing the stagnation of the Japanese economy? We will consider the issue in terms of the industrial strategy and the system of employment, while comparing Japan with other countries.

1. Introduction

To begin with, I will give you some related news and the motivation to find out factors for productivity. In February 2024, the news reported that Japan has been overtaken by Germany to be ranked 4th in annual nominal GDP. That news surprised me all the more because the population of Germany is three quarters that of Japan. It suggests that the labor productivity of Japan is lower than that of Germany. Next, please take a look at the graph in the next slide. This shows the output per hour in each country. The unit of output is the U.S. dollar in purchasing power parity conversion, in other words, PPP. As you can see, labor productivity in Japan is lower than in most developed countries in the world.

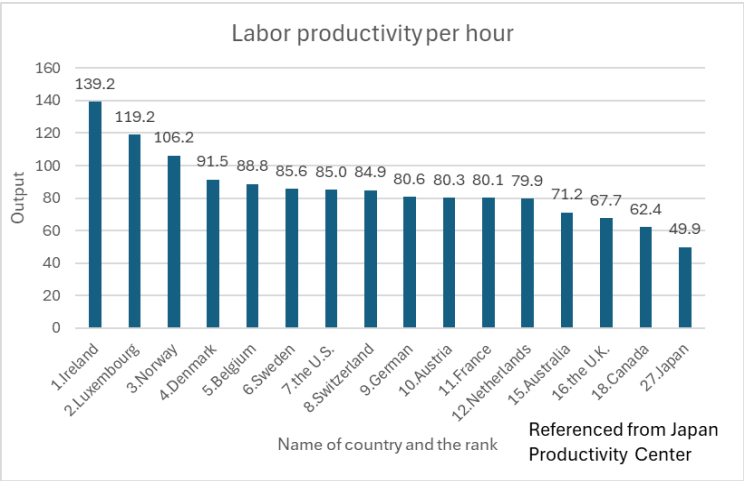


Fig.1 *Labor productivity per hour in 2020*

It might occur to you that wages tend to be high according to prices, but it doesn't make a significant difference. PPP is based on the notion that the same item is sold at the same price unless there are no taxes or transportation costs. For example, in the figure on the slide, the same item is sold at 5$€_1$ in Country 1, and 8$€_2$ in Country 2. Then, we can assume that $€_1$ equals $€_2$ times 1.6. So, if the wage in Country 1 is $€_1$10 and that in Country 2 is $€_2$14, is the wage in Country 1 lower than in Country 2? No, because the wage in Country 1 equals $€_2$16. In that way, with PPP, we can consider differences in prices and indicate an approximate conversion value. Therefore, what the graph shows seems to be reliable.

Now, I would like to examine the main cause for the low productivity in Japan. I pose two questions. First, does the Japanese industrial strategy prevent economic growth? Second, is Japan ready for Digital Transformation (DX)?

2. The Strategy Which Each Country Takes

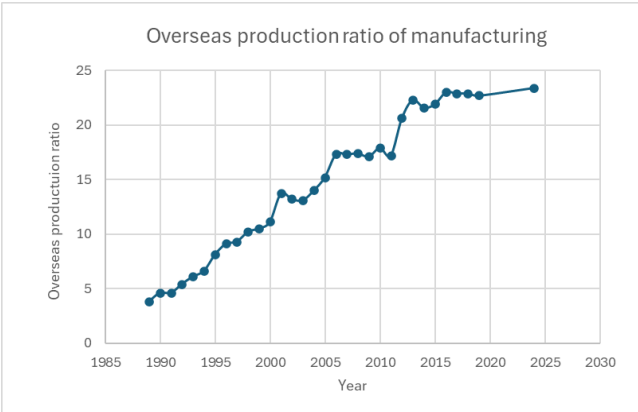


Fig. 2 *Japan's overseas production ratio of manufacturing*

Let's go on to the first question. The graph on the slide shows the overseas production ratio of manufacturing in Japan. We can find out that the ratio had been increasing until 2015 and has remained stable since then. Generally, the advantage of a high overseas production ratio is that it lowers the cost of wages and allows companies to make bigger profits in the short term. However, it also has disadvantages. It causes the domestic manufacturing industry to decline, adds no value to products and involves companies in low price competition. It means that companies make less profit in the long term. This seems to be part of the reason why Japanese companies cannot produce enough output compared to other developed countries.

What are the strategies in other countries? Let's look at Germany first. German manufacturing

companies make products within their country and try to maintain their quality and value. This sustains domestic output and provides small-and medium-sized enterprises (SMEs) with sales channels. Moreover, it also increases the domestic output that SMEs form industrial clusters. In the cluster, companies cooperate to share their own technology, and invest in universities or research institutes to accumulate technology while saving money. Universities and research institutes also willingly participate in the research since they can get funding from companies. In that way, SMEs in Germany have had an influence on domestic production. As the chart shows, the ratio of SMEs exporting and investing in European countries is obviously higher than that of Japan. German SMEs seem especially good at accumulating technology to produce high quality products, as I stated earlier, expanding their markets abroad, and earning money for their value.

	Japan	Germany	France	Italy	Spain
The ratio of companies exporting	2.8%	19.20%	19.0%	27.3%	23.8%
The ratio of companies investing abroad	0.3%	2.30%	0.20%	1.6%	2.1%

Fig. 3 *The ratio of SMEs in exporting and investing abroad in each country (Japan: 2012, EU: 2010)*

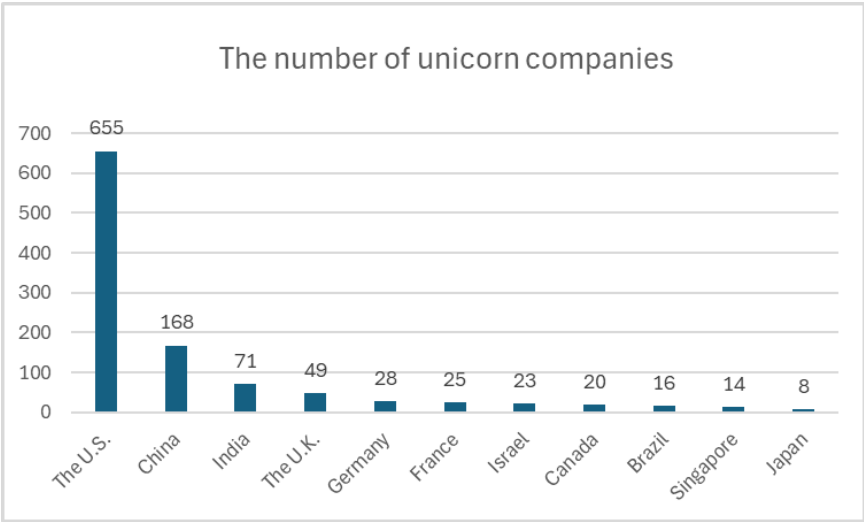


Fig. 4 *The number of unicorn companies in each country in 2021*

Next, let's look at the case of France. Did you know President Macron made an announcement that the government decided to invest €5 million into promising companies in 2019? In France, a culture of entrepreneurship had not taken root by that time, but that became the trigger for it to start taking root. In actuality, 12 unicorn companies were born in 2021, and the total number of unicorn companies became 25. The term "unicorn company" refers to a privately held startup company valued at over $1 billion. The number of French unicorns is now the 6th largest in the world. The number of Japanese ones is only 8 – rather few considering its industrial development.

3. The Change after Digital Transformation

Now, let's move on to the second question, "Is Japan ready for digital transformation?" As you know, utilizing Information technology increases productivity and provides new types of added value. Germany has already launched the project to utilize IT in industry, called "Industrie 4.0". Let me explain some of the effects of Industrie 4.0. First, it changes the original production ways, or uniform mass production into individual production. This helps companies add value to their products. Second, "standby mode" enables factories to resume manufacturing immediately. Third, automated systems can find a solution when some problems happen. Especially in cases like the second example, they can cut approximately 90 to 150 billion in costs according to the Boston Consulting Group. On the other hand, also in Japan, it is expected that we can improve the quality of services using IT. The Ministry of Economy, Trade and Industry estimates that real GDP growth will increase from 0.8% to 2.0%, and the rate of increase in wages will rise from 2.2% to 3.7% in 2015 to 2030.

However, the introduction of IT inevitably causes the loss of existing jobs. When that phenomenon arises, we would want to convert spare human resources to creative jobs that machines cannot do, but it seems to be difficult to realize that, especially in Japan.

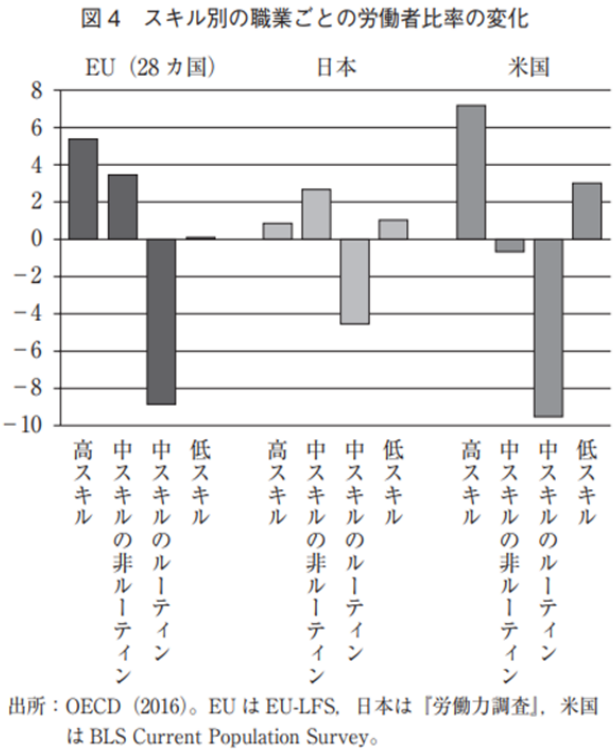


Fig. 5 *The change in the ratio of each job type*

(Kouichi Iwamoto, 2023)

This graph shows the variation of labor for each type in 2016. Low-skilled labor, medium-skilled laborers who work at conventional jobs or creative jobs, and high-skilled labor. The decrease in medium-skilled laborers who do conventional jobs is mainly due to the replacement of jobs by IT, and we expect that this type of labor will become low-skilled labor, medium-skilled labor at creative jobs, or high-skilled labor. As you can see, while labor in Europe and the U.S. moves to creative jobs which demand medium or high skills, the increase in such types of jobs in Japan is not as big as in those regions. Japanese companies haven't been paying attention to the expertise of employees when hiring, so it might be part of the reason why the increase in creative jobs in Japan is not so large.

Finally, let me conclude by suggesting 4 possible causes for the low productivity in Japan. First, Japanese companies have moved their factories overseas to ensure mass production at low wages. However, this has resulted in low price competition and companies do not make bigger profits now than before. Second, Japanese small and middle-sized companies do not export and invest overseas as much as European countries, which implies they may be missing opportunities to increase their profits by expanding the market to foreign countries. Third, Japan is not yet a good country for ventures to start

businesses. Supporting such companies will encourage more small companies to grow. Fourth, although we enjoy saving time for routine work thanks to today's digital transformation, Japan is likely to fail in utilizing human resources. That is because Japan underestimates employees' expertise and people can't get jobs which need creativity but are more valuable. I don't think the main causes for Japan's low productivity are only these, but these are likely causes for that problem. This is all for my presentation.

References

阿部悦生「生産性と日本経済 -日本経済の長期停滞の原因を探る-」『明治大学経営学研究所『経営論集』71 巻第 4 号』2024 年 3 月 19 日、CV_20240610_keieironshu_71_4_1.pdf (2024 年 6 月 10 日最終アクセス)

岩本晃一「DX が労働に及ぼす影響及びその国際比較」『日本労働研究雑誌　特集●DX が職場や仕事にもたらすもの』p.4~19 2023 年 5 月 https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2023/05/pdf/004-019.pdf2024 （2024 年 11 月 27 日最終アクセス）

欧州連合日本政府代表部「EU の雇用社会政策の現状と最近の動向について」2022 年 7 月 100423573.pdf (emb-japan.go.jp) (2024 年 6 月 11 日最終アクセス)

加藤哲夫「インダストリー4.0 に想起される新たなイノベーション分類の提言」*Journal of International Association of P2M* Vol.12 No.2, pp.129-144, 2018 https://www.jstage.jst.go.jp/article/iappmjour/12/2/12_129/_pdf/-char/ja （2024 年 11 月 27 日最終アクセス）

木下翔太郎「1990 年代以降のヨーロッパにおける職業構造の変化 —D. オシュ『ヨーロッパにおける職業構造の変化』」『教育・社会・文化：研究紀要』 https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/209714/1/sse_016_023.pdf (2016) (2024 年 6 月 11 日最終アクセス)

経済産業省「新産業構造ビジョン」 ～第４次産業革命をリードする日本の戦略～ 平成 28 年 4 月 27 日 https://selectr４ｒｆｖa.jp/sites/selectra.jp/files/pdf/008_05_01.pdf （2024 年 11 月 27 日最終アクセス）

新開潤一「日本の賃金停滞と産業構造変化」『近畿大学商経学会『商経学叢』第 70 巻 1 号』p.263~280　2023 年 7 月 31 日

新庄浩二、張星源「IT 資本投資と日本産業の生産性」『岡山大学経済学会雑誌』36 巻 4

号 2005, p 85~89
https://ousar.lib.okayamau.ac.jp/files/public/4/40538/20160528034758669096/oer_036_4_085_099.pdf （2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
関家ちさと「企業内人材育成策の日仏比較 ～日本型の有効性を評価する～2018 年 7 月 26 日 https://glim-re.repo.nii.ac.jp/records/4388 （2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
滝澤美帆、宮川大介「ICT 投資が生産性に与える効果～ミクロデータに基づく検討～」『内閣府経済社会総合研究所『経済分析』第 209 号』2024 年 3 月 29 日、https://www.jstage.jst.go.jp/article/keizaibunseki/209/0/209_87/_pdf/-char/ja（2024 年 6 月 10 日最終アクセス）
滝澤美帆、宮川大介「産業別労働生産性の国際比較：水準とダイナミクス」*RIETI Policy Discussion Paper Series* 18-P-007 https://www.rieti.go.jp/jp/publications/pdp/18p007.pdf 2018 年 4 月(2024 年 6 月 11 日最終アクセス)
武石恵美子編著「国際比較の視点から日本のワーク・ライフ・バランスを考える 働き方改革の実現と政策課題」ミネルヴァ書房（2012）（2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
独立行政法人 労働政策研究・研修機構 「令和３年『情報通信に関する現状報告』」総務省 2021 年 7 月 （2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
長野博「インダストリー4.0 は何の革命か ビッグデータ，オープンデータの動きと軌を一にする社会システム革命の始まり」*Journal of Information Processing and Management* 2016 vol.59 no.3 (2016, June) https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/59/3/59_147/_pdf/-char/ja （2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
濱口桂一郎／山内柳子／金川裕一／金井篤子／廣石忠司／小野公一「ディーセントワークをめざして ワーク・ライフ・バランスと働き方・働かせ方」第 114 回 部門別研究会（人事部門）『産業・組織心理学研究 2015 年，第 28 巻，第 2 号』 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaiop/28/1/28_151/_pdf/-char/ja （2024 年 6 月 11 日最終アクセス）
平田譲二「日本の生産性は低いのか否か？～日独米三国マクロデータ比較からの考察～」『産業能率大学紀要第 42 巻第 1 号』p.89~101 2021 年 9 月 https://www.sanno.ac.jp/undergraduate/library/cpir4n0000005s3x-att/4201all_01.pdf#page=93 (2024 年 6 月 11 日最終アクセス)
房文慧. "日本の大学等における産学官連携の現状, 特徴および課題― 海外との比較を通して." *敬和学園大学研究紀要= Bulletin of Keiwa College/敬和学園大学 編* 33 (2024): 1-18. https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/summary/summary01.pdf （2024

年 11 月 27 日最終アクセス）
藤内和公「ドイツ民間企業における人事評価」『岡山大学法学会雑誌』第 66 巻第 1 号（2016 年８月）
https://ousar.lib.okayamau.ac.jp/files/public/5/54516/20160905112742840973/olj_66_1_(236)_(376).pdf （2024 年 11 月 27 日最終アクセス）
NHK「日本の去年 1 年間の名目 GDP ドイツに抜かれ世界 4 位に後退」2024 年 2 月 15 日 https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240215/k10014358471000.html （2024 年 11 月 27 日最終アクセス）
Bloom, Nick; Van Reenen, John. “Management Practices, Work-Life Balance, and Productivity: A Review of Some Recent Evidence” *Oxford Review of Economic Policy*. pp.457-82. Winter 2006. retrieve (ebscohost.com) (accessed June 11, 2024)
Ganau, Roberto; Rodriguez-Pose, Andres. “Firm-Level Productivity Growth Returns of Social Capital: Evidence from Western Europe” *Journal of Regional Science.* pp.529-51. 15 January 2023. retrieve (ebscohost.com) (accessed June 10, 2024)
Grebel, Thomas; Napoletano, Mauro; Nesta, Lionel. “Distant but Close in Sight: Firm-Level Evidence on French-German Productivity Gaps in Manufacturing” *Review of Income and Wealth* pp.228-61. March 2023. retrieve (ebscohost.com) (accessed June 10, 2024)
Remes, Jaana; Mischke, Jan; Krishnan, Mekala. “Solving the Productivity Puzzle: The Role of Demand and the Promise of Digitization” *International Productivity Monitor.* pp.28-51. Fall 2018. Solving the Productivity Puzzle: The Role of Demand and the Promise of Digi...: EBSCOhost (oclc.org) (accessed June 10, 2024)

報告要旨

日本の生産性が先進国の中で異常に低いことに関して、算出方法による見かけの数値が出ているのではないかではないかという見解もあるが、物価による影響を取り除いたデータであってもその差は大きいうえに、国家間の比較を差し置いても、日本において資本や人的資源を最大限に活用するために既存の生産戦略や産業構造の転換を進める余地は十分にあると考える。そこで、日本がこれまで産業の空洞化と低価格競争に巻き込まれ続けてきた状況を振り返るとともに、日本と同様に産業の成熟と空洞化を迎えたヨーロッパに目を向け、ドイツにおいて国内生産の維持が取り組まれている状況、フランスでの産業活性化の政策が行わ

れた後ユニコーン企業が増加した事例を取り上げた。また、情報通信技術の普及によって業務の省力化が進む中で、専門性とキャリアの関連がそれほど重要視されない土壌のため日本で人的資源を有効活用できない可能性についても考察した。

パリシテ大学討論会報告

ディスカッションについて

- ヨーロッパでも日本と同じように工場の海外移転は進んでいるが、産業の空洞化について日本と異なる点はあるか。
  - 日本、ヨーロッパ企業ともに賃金の安い国への工場の移転は進んでいるが、プレゼンテーションで挙げたように国内の中小企業が海外に対して輸出や投資といった事業を行っている割合は日本では低く、国内の中小企業が販路や収益の拡大の機会を得にくいという可能性があるのではないかと考える。

- 日本で進んでいる M&A は国内の生産効率に好影響を与えるだろうか。
  - 市場のグローバリゼーションが進む中で、企業の統合は規模の経済の効果を生み出し国際競争力を強化する期待が持てるが、統合後に部門間同士の連携のマネジメントがうまく取れなかったり、異業種間の相乗効果が生まれなかったりすれば生産効率が向上しないという可能性も考えられる。それらの問題を考慮して M&A を進めるべきであると考える。

今後の課題

パリ・シテ大学の学生の方からキャリアの進め方について話を聞くと、大学の専攻はみられるものの、専攻に関連した仕事に就ける人が多いわけではないこと、一度入社した後も転職する人が多いことを聞いた。前者の事実は、ヨーロッパが必ずしも個人の専門性と職種を合致させられるような環境となっていないことについては分かるが、企業採用の中で要求される高等教育での専門性のレベルが日本とどれほど異なるかについては不明のままである。また、後者については日本の非流動的な雇用形態と対立的だがこれらの制度が労働生産性にどのような影響を与えうるかは分かっておらず、今後も調査を続けたい。

Refugee Integration Policies:
Lessons from Germany for South Korea

Seoyeon Kim

How can South Korea implement effective policies for integrating refugees into its society?

1. Introduction

The issue of refugee integration has become increasingly important in today's globalized world. Germany, as one of the leading refugee-receiving countries, has implemented comprehensive policies to integrate refugees into its society. Since 2015, Germany has accepted over 1.2 million refugees, making it the fourth-largest refugee-hosting country globally. In 2021 alone, Germany accepted approximately 1.32 million immigrants, surpassing its domestic birth rate of 790,000 in the same year. These figures highlight Germany's proactive approach to migration management. These policies offer valuable lessons for South Korea, a country which, while historically homogenous, is facing demographic challenges and labor shortages that could be mitigated through improved refugee integration strategies.

2. The Necessity of Refugee Integration Policies

Today, over 70 million people live as refugees or displaced persons, with conflicts such as those in Syria and Ukraine contributing significantly to these numbers. According to the South Korean Ministry of Justice, asylum applications have steadily increased, with 5,711 asylum seekers applying in 2015—nearly doubling from 2,896 in 2014. More recently, the Ukrainian refugee crisis has further underscored the need for clear and structured refugee policies. In response to the war in Ukraine, many European countries, including Germany, have taken in large numbers of Ukrainian refugees, setting a precedent for how nations can address sudden refugee influxes. The necessity of refugee integration policies extends beyond humanitarian concerns; it is also a matter of economic and social sustainability. South Korea is not immune to these challenges, as evidenced by the 2018 Yemeni refugee situation in Jeju, which sparked national debate on refugee acceptance and integration. Despite a low refugee acceptance

rate of approximately 4%—significantly lower than the OECD average of 30%—South Korea faces an aging population and labor shortages that present an opportunity for improved refugee policies.

3. Germany's Experience with Refugee Integration

Germany provides a useful case study due to its experiences with large-scale refugee inflows, particularly during the 2015 European migrant crisis. Initially, public opinion was divided, with concerns about crime and cultural integration. In a 2017 survey conducted by Bertelsmann Stiftung, 54% of German citizens opposed accepting additional refugees, citing concerns over social stability and crime rates. However, Germany developed proactive policies that facilitated refugee integration through a structured approach.

4. Key Aspects of Germany's Integration Policies

Germany's social integration policies are largely governed by the Integration Law (Integrationsgesetz) enacted in 2016, which focuses on three key areas:

① Language and Education

Refugees in Germany are required to take language courses, enabling better communication and cultural assimilation. However, challenges persist, as seen in the fact that only 13% of refugees arriving between 2013 and 2016 were employed, largely due to language barriers.

② Employment Opportunities

Germany allows refugees to access job training programs even before their asylum claims are approved. However, challenges remain in recognizing foreign qualifications, prompting Germany to introduce measures such as the "Professional Personnel Migration Act" and the "Central Service Center for Job Accreditation" to validate migrants' work experience and educational background.

③ The 'Welcome Culture' Approach

Under former Chancellor Angela Merkel, Germany promoted a "Welcome Culture" (*Willkommenskultur*) to encourage public acceptance of refugees. This initiative helped ease the transition for refugees by providing short-term accommodation, vocational training, and employment support, all while promoting a narrative that migrants contribute positively to society. According to sociologist Heckmann (2016), this policy was not solely driven by humanitarian concerns but also by

economic interests, as migrants played a crucial role in addressing Germany's labor shortages. The welcoming culture encouraged local governments and communities to actively support refugee integration through volunteer programs and social initiatives.

Interview Excerpt (Rijan Alshebru, Mayor of Ostelsheim, Germany):

"*Now we are trying to help refugees to be recognized as full citizens by offering them job opportunities through the so-called refugee integration program. Ultimately, German society is willing not only to physically accept migrants and refugees but also to provide them with substantial support so that they can gain access to society.*"

4. Policy Recommendations for South Korea

South Korea and Germany share similarities as historically homogenous societies facing aging populations and labor shortages. Germany's experience provides valuable insights for South Korea's refugee policies.

《Suggested Policy Measures》

① Strengthening Language Programs

Establishing mandatory Korean language courses would facilitate refugees' smoother integration into society and the workforce.

② Improving Employment Support Systems

Developing accessible pathways for skills validation and vocational training can help refugees contribute effectively to the economy.

③ Enhancing Public Perception

Implementing awareness campaigns, similar to Germany's Welcome Culture, can counter public skepticism and highlight refugees' economic and social contributions. Research shows that many individuals who interact with refugees recognize their economic contributions, particularly in labor shortages. "Participants reported that refugees come to their communities in search of work and play a significant role in the local economy in times of labor shortages but are not treated well enough for the hard and difficult work they do where they are needed."

④ Balanced Regulation

A structured approach—combining support mechanisms such as education and healthcare with regulatory measures—can provide both stability and opportunities for integration. One recommendation is to impose a residence obligation for a set period in designated areas, ensuring refugees contribute to local economies and fostering a sense of community integration.

5. Challenges and Considerations

Balancing economic and humanitarian concerns presents a key challenge in refugee integration. While increasing refugee intake can help address labor shortages, prioritizing economic benefits over humanitarian obligations can create ethical dilemmas. Koslowski (2013) highlights that many governments adopt selective migration policies to attract skilled labor while limiting asylum seekers' rights. In contrast, an overly humanitarian approach without economic planning may lead to social unrest and financial strain. South Korea must strike a balance between economic utility and its moral responsibility to protect refugees, learning from Germany's experience in integrating refugees as long-term contributors rather than temporary workers.

6. Conclusion

South Korea can learn from Germany's successes and struggles in refugee integration. Implementing comprehensive policies can address demographic challenges, labor shortages, and humanitarian responsibilities. Rather than viewing refugees as a burden, South Korea should consider them as an investment for its economic and social future. By adopting effective refugee integration strategies, the country can foster a more inclusive society while strengthening its economic resilience.

References

大西 楠テア「ドイツの難民受け入れ政策にみられる新たな傾向: 難民の社会統合による「危機」の克服？」『上智ヨーロッパ研究』No.12、2020、p.37-45.

河村 克俊・中川 慎二「〈研究ノート〉ドイツの難民受け容れと排外主義」『関西学院大学人権研究』号 21、2017、p.15-19.

久保山 亮「書評：昔農英明著『「移民国家ドイツ」の難民庇護政策』」『三田社会学』No.20、2015、p.159-162.

昔農 英明「リベラルな国家における難民管理の境界の構築：ドイツの難民に対する「歓迎文化」と排外主義の交錯の中で」『大原社会問題研究所雑誌』No.734、2019、p.77-89.

日経ビジネス「難民問題、日本も国民的議論が必要 『時事深層 ドイツ、難民を労働力にする覚悟』（9/28 号）」『往復書簡』2015/10/12 号、2015、p.96.

渡辺 富久子「【ドイツ】難民の統合を促進するための法改正」国立国会図書館調査及び立法考査局、『外国の立法』(2016.10) https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10202192_po_02690107.pdf?contentNo=1

Brücker, Herbert; Kosyakova, Yuliya; Vallizadeh, Ehsan "Has there been a 'refugee crisis'? : New insights on the recent refugee arrivals in Germany and their integration prospects", *Soziale Welt*, Volume 71, 2020, p.24-53.

Holmes, Seth M.; Castañeda, Heide "Representing the 'European refugee crisis' in Germany and beyond: Deservingness and difference, life and death", American Ethnologist, Volume 43, 2016, p.12-24.

Kayvan, Bozorgmehr; Oliver, Razum "Refugees in Germany—untenable restrictions to health care", The Lancet, Volume 388, 2016, p.2351-2352.

Lange, Martin; Sommerfeld, Katrin "Do refugees impact crime? Causal evidence from large-scale refugee immigration to Germany", Labour Economics, January 2024, https://www-sciencedirect-com.hit-u.idm.oclc.org/science/article/pii/S0927537123001410

MacroTrends "Germany Refugee Statistics 1960-2024", Germany Refugee Statistics 1960-2024 | MacroTrends.

Samar, Jean El Khoury "Factors that impact the sociocultural adjustment and well-being of Syrian refugees in Stuttgart – Germany", *British Journal of Guidance & Counselling*, Volume 47, 2019, p.65-80.

Schmidt, Katja "Proximity to refugee accommodations does not affect locals' attitudes toward refugees: evidence from Germany", *European Sociological Review*, 1 June 2023, https://academic.oup.com/esr/advance-article/doi/10.1093/esr/jcad028/7187857?login=true

UNHCR "GERMANY FACT SHEET", September 2023, https://www.unhcr.org/dach/wp-content/uploads/sites/27/2024/02/Bi-annual-fact-sheet-2023-09-GERMANY.pdf

"Republic of Korea FACT SHEET", UNHCR, November2023, file:///C:/Users/Seoyeon%20Kim/Downloads/UNHCR_Korea_Fact%20Sheet_ENG_202311.pdf

Yanaşmayan, Zeynep "Post-2015 refugees in Germany: 'Culture of welcome', solidarity or exclusion?", International Migration, Volume 61, 2023, p.3-11.

Kim, Gye Yeon (김계연) "독일에 지난해 35 만명 난민 신청…1 년 새 51% 급증", 연합뉴스, 1

January 2024, https://www.yna.co.kr/view/AKR20240109160100082

Kim, Youngran (김영란) “독일 다문화사회의 난민정책과 관련 법제연구 (A Study on Refugee Policy and Related Legislation in German Multicultural Society)”, 다문화콘텐츠연구, No.36, 2021, p.83-122.

Kim, Young Sool (김영술) “독일의 난민 수용과정에서 나타난 정책 변화의 연구 (A Study on Germany’s Policy Changes of Accepting Refugees)”, 분쟁해결연구 (Dispute Resolution Studies Review), Volume 16, 2018, p.99-134.

Lee, Byeong Ha (이병하) “The Politicization of Refugee Issues in South Korea”, 문화와 정치, Volume 5, 2018, p.33-68.

Lee, Jinwoo (이진우) “한국의 난민제도의 문제점과 개선방안에 대한 연구 -난민 불복 소송 판례 분석을 중심으로 (A Study on the Problems and Improvement Plans of the Korean Refugee System -Focusing on the Analysis of Refugee Lawsuit Precedents)”, 민족연구, No.79, 2022, p.68-91.

Shin, Sohee; Choi, Seori (신소희, 최서리) “대안적 난민 수용에 관한 논의: 2014 년 이후 독일의 난민 노동시장 통합정책을 중심으로 (A Study on Complementary Pathways for Refugees: A case of German labor market integration policies for refugees since 2014)”, 한국이민학, Volume 7, 2020, p.47-77.

Jeong, Hyuk (정혁) “독일이 난민 위기에 대응하는 방식”, 민주화 운동기념사업회, 24 December 2015, https://www.kdemo.or.kr/d-letter/all/page/26/post/1188

報告要旨

本レポートは、ドイツの難民統合政策を分析し、韓国における難民受け入れと社会統合の課題について考察する。ドイツは韓国と同様に民族的同質性を重視してきたが、2015 年以降に 120 万人以上の難民を受け入れ、「統合法（Integrationsgesetz）」を導入し、言語教育、雇用支援、受け入れ文化の形成を推進してきた。韓国もドイツと同じく少子高齢化や労働力不足といった課題を抱えており、難民統合政策の強化が求められる。この過程において、経済的利益と人道的責任のバランスを考慮しつつ、ドイツの経験を参考に効果的な政策を構築することが重要であると思わる。

ディスカッションと今後の課題

論会では、ナショナリズムと難民受け入れの対立が重要な論点となった。愛国主義者を説得するためには、難民が経済的利益をもたらすことを論理的に説明し、理解を得ることが重要であると考えられた。しかし、トランプ政権や欧州の経済危機を背景に、ヨーロッパ内で難民受け入れに否定的な意見が増加しているのも事実であり、ドイツでも難民政策に対する反対の声が政治に影響を及ぼしている。今後、世界的にナショナリズムが強まる中で、受け入れと国民感情のバランスをどのように取るかが課題となる。

フランスの事例では、都市部の若者は難民受け入れや難民に対して比較的開かれた態度を持つ一方で、地方や高齢層は難民に対してより慎重であることが指摘された。しかし、フランス政府は経済的な理由から、難民を地方の過疎地域に移住させる政策を採用しており、これにより地域のインフラ問題や労働力不足の解決を図っている。これはドイツでも見られる傾向であり、欧州各国では地方都市の過疎化を難民・移民によって改善しようとしている。韓国においても、このような活用方法が考えられるのではないかと議論された。

ドイツの成功例として、経済的な理由から移民と難民の受け入れを推進し、それが一定の成果を上げたことが挙げられた。フランスでは他の欧州諸国に比べて難民受け入れ率が低いが、EU 加盟国としての責任感や、難民を積極的に受け入れてきたドイツへの尊敬の念も感じられた。今後の課題として、韓国におけるナショナリズムと難民受け入れのバランスをどう取るか、また経済的な利点をどのように社会全体に認識させるかが重要なポイントとなるだろう。

Sustaining Japan's Traditional Crafts: Challenges and Solutions

Masaki Sakakibara

How can Japan better support its traditional crafts to ensure their sustainability?
We will examine strategies from Germany and Japan.

1. Introduction

Good afternoon, everyone. Today, I would like to discuss the importance of traditional crafts in Japan and how we can preserve them. They have been symbols of our culture, skills, and regional identity that have been passed down through the generations. However, they are now facing serious challenges, such as a lack of successors and a decline in demand for goods. Germany, on the other hand, has developed practical systems to support its craft industries. By adapting some of these ideas to Japan's unique context, we could find ways to protect our traditional crafts. Let us explore this topic step by step.

2. What Are Japanese Traditional Crafts?

First, let's clarify what we mean by "traditional crafts." They require unique techniques and materials that have been carefully preserved over centuries. For instance, Hakone marquetry is a famous type of woodcraft from the Hakone area in Kanagawa prefecture. These crafts contribute significantly to our economy (Small and Medium Enterprise Agency, 2018). This is because they create jobs in local communities, promote tourism, and add to the diversity of products Japan offers. In fact, Japanese traditional crafts have also been popular among foreign visitors, who admire the high quality and artistry involved in these items (Small and Medium Enterprise Agency, 2018).

3. Current Challenges and Support Measures in Japan

Next, let's examine the causes of the current situation. One of the biggest challenges is the lack of successors. Young people today are less likely to take up traditional crafting jobs. This reluctance may be due to the long training periods required to master these crafts. For instance, many traditional skills are passed down through apprenticeships that can last for years of hard work and perseverance. Additionally, unlike other jobs, traditional crafts often don't offer a stable income, which makes them

less attractive (Sanaka, 2005). As a result, we are seeing a decline in the number of skilled artisans. This has a serious impact, as it means that some unique techniques may be lost forever, along with the skills and knowledge, which are crucial for Japan.

Another issue is declining sales. In modern society, consumer preferences have shifted toward mass-produced items, which are often cheaper and more readily available (Sanaka, 2005). This change in consumer behavior makes it increasingly difficult for traditional craftsmen to maintain their businesses. Indeed, the production value of traditional crafts has been steadily decreasing since the bubble economy, when Japanese consumers preferred luxury items. Moreover, after the bubble burst, the prolonged economic recession caused production levels and productivity to decline (Yonemitsu, 2006). This made it even harder for craftsmen to respond to the worsening economic situation (Shibuya, Matsudo, & Matsumoto, 2021).

Now, Japan has already taken steps to support its traditional crafts. For instance, the Traditional Crafts Promotion Act, which was passed in 1974, designates certain crafts as culturally important. Currently, over 200 crafts have been designated under this act, which allows them to receive financial support and promotional opportunities (Association for the Promotion of Traditional Craft Industries, n.d.). However, while these efforts are certainly helpful, there are some issues with the current system.

One major problem is that the requirements to qualify for government support are quite strict. To be recognized as a “traditional craft,” a certain number of artisans and businesses are needed (Ono, 2021). This makes it difficult for smaller workshops to benefit, as they may not meet these criteria. Additionally, in Japan, most exhibitions are organized by industry associations, which means that companies often participate only out of "polite engagement" rather than actively look for new business opportunities. Because of this, exhibitions in Japan tend to function more as advertising platforms than as spaces for genuine negotiations or trade (National Diet Library, Research and Legislative Reference Bureau, Economic and Industrial Section, 2015). This makes them less effective in helping craftsmen connect with buyers or secure deals.

To address these challenges, the Japanese government introduced a subsidy program that offers financial support of up to 20 million yen (Ministry of Economy, Trade and Industry, 2024). However, many artisans have reported that the subsidy application process is too complicated and time-consuming, especially for workshops with limited staff. In fact, the Ministry of Internal Affairs has acknowledged cases where craftsmen gave up on applying for the subsidies altogether because they lacked the manpower to complete the process (Ministry of Internal Affairs and Communications, Administrative Evaluation Bureau, 2022).

4. Germany's Support Approach

Germany, on the other hand, offers a very practical example of how to support traditional crafts in a sustainable and effective way. I would like to highlight two key policies in particular: the education system and the use of large-scale trade fairs.

Germany's dual education system effectively combines school-based learning with company-based training. Students spend part of their week in vocational schools and the rest work in companies, where they gain practical skills tailored to specific industry needs (Komatsu, Kogō, & Komatsu, 2013). The size of companies accepting students varies widely, and about 70% of apprentices choose to stay with their training companies after completing the program, helping businesses secure a stable workforce (Tei, 2023). Many graduates later enter Meister schools, where they not only refine their technical skills but also learn business-related subjects like management and finance (Cedefop, 2020). In this way, the Meister qualification demonstrates expertise and enables artisans to manage their own businesses.

Another important strategy Germany uses is its large-scale trade fairs, where artisans from all over the country, and even abroad, come to showcase their work to a global audience (Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR), London Office, 2016). Traditional artisans also exhibit their products. Therefore, buyers from different countries attend these fairs, providing craftsmen with opportunities to expand their networks, secure business deals, and gain more visibility.

5. Key Takeaways for Japan

Finally, based on these strategies that Germany has implemented, I have two proposals for Japan.

First of all, Japan should organize large trade fairs that focus not only on crafts but also include other related industries. This could attract a wider range of international buyers and give our artisans a larger platform to promote their products.

One practical solution to secure successors is establishing craft-related departments in existing universities nearby. Building a new school would be costly, but adding specialized programs to current institutions is more feasible. Such programs would not only teach technical skills but also incorporate business management and other relevant subjects. This integrated approach would benefit students by offering them a broader skill set and reduce the financial risks associated with creating entirely new facilities.

6. Conclusion

In conclusion, traditional crafts carry our history, skills, and local identities. However, without adequate support, they may be lost. By learning from Germany's Meister system and trade fair strategies, Japan can take effective steps to preserve these valuable crafts. I believe that with the right approach, we can ensure that our traditional crafts continue to thrive.

References

大野園子「伝統的工芸品の輸出産業化促進政策」2021 年 1 月 31 日. https://www.pp.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2016/02/d1e7ed6c57b885d95eb34b62abc05973.pdf (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

経済産業省『令和 6 年度「地域団体商標の活用支援に関する事業」の募集』. https://www.meti.go.jp/information/publicoffer/kobo/2024/k240105001.html (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

小松裕子, 小郷直言, 小松研治『マイスター制度と技能伝承―ドイツ木工マイスター学校の職業教育から』富山大学芸術文化学部紀要, 第 7 巻, 2013 年. https://www.tad.u-toyama.ac.jp/_wp/wp-content/themes/wp-geibun/assets/images/research/bulletin07/p106.pdf (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

国立国会図書館 調査及び立法考査局経済産業課『ドイツの見本市・展示会とその支援政策―日本への示唆―』, 2015 年. https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8929059_po_0843.pdf?contentNo=1 (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

自治体国際化協会（CLAIR）ロンドン事務所『ドイツにおける伝統工芸品産業の概要と振興施策』, 2016 年. https://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/429.pdf (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

佐中忠司「伝統的工芸品産業の経済学的考察―『伝産法』による指定の現状と問題点―」『比治山大学現代文化学部紀要』第 12 号, 2005 年, 139-156 ページ.

渋谷美佳, 松土千穂, 松本充代「伝統的工芸品産業の統計的分析」『地域経済学』第 17 巻第 1 号, 2021 年, 51-65 ページ.

総務省行政評価局『伝統工芸の地域資源としての活用に関する実態調査結果報告書』, 2022 年. https://www.soumu.go.jp/main_content/000818488.pdf (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

中小企業庁『地域サプライチェーンと小規模事業者の関係』, 2018 年.

https://www.chusho.meti.go.jp/koukai/shingikai/syoukibokihon/2018/download/181012syoukiboKihon02.pdf (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

日本の伝統工芸品産業振興協会『日本の伝統的工芸品』. https://kyokai.kougeihin.jp/traditional-crafts/ (最終アクセス 2024 年 9 月 4 日).

米光靖「伝統的工芸品産業の振興についての考察：有田焼、博多織、京都の伝統的工芸品産業全般を事例として」『経済学研究』第 73 巻第 1 号, 2006 年, 51-74 ページ.

Cedefop. Vocational education and training in Germany: short description. Publications Office of the European Union, 2020. https://www.cedefop.europa.eu (Accessed on September 4, 2024).

報告要旨

本レポートでは、日本の伝統工芸の現状と課題を整理し、ドイツの支援策を参考にした解決策を提案する。

まず、日本の伝統工芸は単なる手工芸品ではなく、地域の文化や技術の象徴であり、経済や観光にも貢献している。しかし、後継者不足や市場の縮小などの深刻な課題に直面している。若者の間で伝統工芸を職業として選ぶ人が少なく、徒弟制度による長期間の修業や不安定な収入が障壁となっている。また、大量生産品の人気の高まりやバブル崩壊後の経済不況により、伝統工芸品の市場も縮小し、多くの工房が経営困難に陥っている。

日本政府は 1974 年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」を制定し、200 以上の工芸品を指定し支援しているが、認定基準が厳しく小規模な工房が支援を受けにくい状況がある。加えて、展示会が実質的に広告の場になっており、商談の機会としての機能が弱い。補助金制度もあるが、申請手続きの煩雑さが問題となり、多くの職人が活用できていない。

一方、ドイツでは「デュアル教育制度」により、職業学校と企業研修を組み合わせた教育を実施し、職人の育成を支えている。また、「マイスター制度」により、技術だけでなく経営スキルも学ぶ機会を提供し、工房の安定した運営を可能にしている。さらに、大規模な国際見本市を活用し、伝統工芸品の販路拡大を図っている。

これらを踏まえ、本レポートでは、日本でも大規模な国際見本市を開催し、伝統工芸品を広くアピールすることを提案する。また、新たな学校を設立するのではなく、既存の大学に工芸関連の学部・学科を設け、技術と経営の両面を学べる環境を整えることを提案する。

結論として、伝統工芸は日本の文化的・経済的に重要な要素であり、適切な支援がなければ消滅の危機に瀕する。ドイツの成功事例を参考にしつつ、制度改革を行うことで、日本の伝統工芸を未来へ継承し、社会全体に貢献できるようにすべきである。

パリ・シテ大学討論会報告

１．ディスカッションについて

- なぜこの問題に興味を持ったのか？

➢ 日本の伝統工芸は、単なる手工芸品ではなく、地域の文化や歴史、技術の結晶であり、観光産業や地域経済にも重要な役割を果たしている。しかし、近年は後継者不足や市場の縮小などの課題が深刻化しており、これらの技術が途絶えてしまう可能性があることに危機感を抱いた。特に、職人の高齢化が進む中で、次世代への技術継承が十分に行われていない点に注目し、持続可能な支援策が必要ではないかと考えた。そこで、ドイツの伝統工芸産業がどのように維持されているのかを調べ、日本への応用の可能性を探ろうと思った。

- 伝統工芸を支えるために、消費者としてできることは何か？

➢ 消費者として伝統工芸を支援するためには、まず積極的に伝統工芸品を購入し、需要を維持することが重要である。特に、クラウドファンディングやオンラインショップの活用が広がっており、職人と直接つながることが可能になっているため、こうした新しい販売チャネルを利用することも効果的だ。また、伝統工芸のワークショップや体験イベントに参加し、その価値を深く理解することも支援の一つとなる。さらに、若い世代に向けたデザインの工夫や、現代のライフスタイルに適応した新商品の開発を支援することで、伝統工芸をより身近なものにすることも求められている。

２．今後の課題

今後の課題として、質疑応答の際により深い知識と論理的な説明が求められることを痛感した。そのため、今後は具体的なデータや事例を用いて説明できるよう準備を強化する必要がある。また、当初の計画よりも大幅に文量を削ったものの、それでもまだ長く、時間内に十分な説明ができなかった点も課題である。さらに、相手が誰でも理解しやすいように、専門用語の使い方や説明の順序に工夫を加える必要があると感じた。今後は要点を整理し、より簡潔で伝わりやすい構成を意識することで、効果的な発表を目指したい。

The Economic Disparity
Between Men and Women in Sweden and Japan

Ayaka Sakata

How should the Japanese government decrease the disparity between men and women? We will look at cases from Sweden and Japan.

1 Introduction

The reason why I chose this topic as a presentation is that I felt that it is more difficult for women than men to live in Japan. I heard from a friend that her mother, who is a single mother, worked hard but she couldn't earn enough money. According to my research, the gender wage gap in Japan is much larger than many other developed countries. In the OECD, Japan is the third biggest country in terms of the gender wage gap. But the gender wage gap of Sweden is much smaller than that of Japan.

Meeting students from Paris-Cité University

2. Childcare Leave System

In Japan, the percentage of fathers who take childcare leave is only 17%. But in Sweden, more than 90% of fathers take one.

Like Nordic countries, Japan has a childcare leave system, but they are very different. In Sweden, parental benefits are paid out for 480 days for one child. Both parents have to take at least 90 days off.

If they don't do so, they cannot receive benefits. On the other hand, Japan has no restrictions like this.

In Japan, if you take a lot of days off, you won't be promoted, even if you took childcare leave. However, Swedish companies consider those who take the leave as responsible and efficient because they care about their children and can afford to balance their work and private life and think much of them.

Small Japanese companies don't have enough staff and if some of them are absent, they don't work well. But in Sweden, it is common to employ '*vicarje*' which are temporary workers. This system is also beneficial for '*vicarje*' because it is a good opportunity to take a better position.

3. Non-regular Employment of Women

The percentage of Japanese women who work part-time is more than 50%. That of Swedish women is less than 30%.

In my opinion, the cause is the environment where women find it hard to balance between work and household. In fact, many Japanese women are not confident of being able to balance them. Thus, they are unwilling to be promoted. Besides, a lot of Japanese men are reluctant to accept that women take an active role in society because of their stereotypical thinking.

4. Conclusion

I explained that the income of women is much smaller than that of men in Japan, though the wage gap between men and women is not so different in other developed countries. I stated possible causes, taking successful Swedish examples. We can introduce childcare leave and other related systems like Sweden's to Japan. However, it is difficult to change the way of thinking of Japanese men.

References

Ann-Zofie Duvander, Eleonora Mussino and Jussi Tervola, "Similar Negotiations over Childcare? A Comparative Study of Fathers' Parental Leave Use in Finland and Sweden", Department of Sociology, Stockholm University, 106 91 Stockholm, Sweden, Finnish Institute for Health and Welfare (THL), 00271 Helsinki, Finland, The Social Insurance Institution (Kela), 00056 Kela, Finland, 24 June 2021, https://www.mdpi.com/2075-4698/11/3/67

Eva Österbacka, Tapio Räsänen, “The Association Between Gendered Workplaces and the Length of Childcare Leave”, 10 May 2024, https://journal.fi/fypr/article/view/131786

Cho, Don-Moon, “The Actual Use of Non-regular Workers and the Strategies of Social Partners in Sweden: with a Special Reference to Temporary Workers”, Korean Journal of Labor Studies, 28 February 2017, https://koreascience.kr/article/JAKO201735766081093.page

Mörk Eva, Ottosson Lillit, Vikman Ulrika, “To work or not to work? Effects of temporary public employment on future employment and benefits “Institute for Evaluation of Labour Market and Education Policy (IFAU), 2021, https://www.econstor.eu/handle/10419/246047

報告要旨

本レポートは、日本とスウェーデンの男女の経済格差について述べています。このテーマを選んだきっかけは、友達の母親がシングルマザーで、フルタイムで働いているにもかかわらず、十分に娘を養っていくことのできるお金を稼げないと聞いたことです。OECD によると、男女の賃金格差は、日本は世界第三位と大きいが、スウェーデンは日本よりかなり小さいです。

日本の男性はたった 17%しか育休を取得しないが、スウェーデンの男性は 90%以上が取得するそうです。日本にも育休制度はあるが、スウェーデンの育休とは大きく違う点があります。スウェーデンでは男女共に少なくとも 90 日以上取らないと、育休自体が取得できないという制限があります。

日本では育休をとると昇進に響くということや中小企業など従業員の少ない会社では周りに迷惑がかかるということで、育休を取りたがらない男性が多いですが、スウェーデンは育休の取得が昇進を妨げることにつながらない、またヴィカリエという一時的な雇用者を雇う制度が存在するため、人手不足の問題が生じないようです。

日本では、女性の半数以上が非正規雇用ですが、スウェーデンでは 30%以下だそうです。これは日本では、女性が活躍することを嫌がる男性の偏見もあいまって、女性が働きやすい環境が整っていないということやそもそも女性の昇進意欲が低いことが影響しているのではないかと考えました。

日本では、男女の賃金格差が大きいということについて説明し、スウェーデンの良い例を用いながら、考えられる要因について説明しました。育休制度やそれに関連する制限など、日本に応用できる制度もいくつかありますが、男性の固定概念を変えていくということは難しいと思われます。

パリ・シテ大学討論会報告

１．ディスカッションについて

- フランスの男女の経済格差の実態はどのようであるのでしょうか？

➢ フランスはスウェーデンほど、男女の経済的な平等が実現されてはいないそうで、男女の賃金格差はある程度あるようですが、日本よりは進んでいるそうでした。マクロン大統領は北欧社会を目指すことを公約に挙げていたそうですが、実際には実現されていないと、シテ大学の学生が話していました。また、非正規労働者についてはほとんどのフランス人女性がフルタイムで働いているそうですが、フランスでは男女どちらも 18 時くらいに帰宅できるそうですが、日本の男性は残業が常習化しているから日本人の女性がフルタイムで働くことができないのは仕方ないのではないかという意見が出ました。こうした観点で見ることはなかったので、別の社会で暮らしているフランス人ならではの視点だと感じるとともに、間接てきに関係している課題の解決も求められていると思いました。

- なぜこの問題に興味を持ったのでしょうか？

➢ 中高女子校で、大学に入学するまでは男女の差別をほとんど感じてこなかったのですが、大学に入学してから男子の割合の方がかなり高く、特に経済学部では女子が 1 割しかいないということに驚きました。こうした教育格差が将来の男女の賃金格差に影響するのではないかと感じ、日本の課題であると思い、興味を持ちました。

２．今後の課題

シテ大学の学生がかなり日本語を話せるので、交流するうえで支障がほとんどありませんでしたが、もっと瞬発的に英語を話せるようになりたいと、英語力で課題を感じました。

A Comparative Analysis of Human Rights Due Diligence: Lessons from Germany for Japan

Koki Shibata

How can human rights due diligence strengthen corporate responsibility and support sustainable development?

1. Introduction

In recent years, human rights due diligence (HRDD) has become an essential requirement for companies operating in global supply chains. The increasing scrutiny on corporate responsibility regarding forced labor, child labor, and environmental sustainability has led to the introduction of legal frameworks worldwide. While Japan has issued voluntary HRDD guidelines, they lack legal enforceability, resulting in inconsistent implementation across industries. In contrast, Germany has adopted the Supply Chain Due Diligence Act (Lieferkettensorgfaltspflichtengesetz, LkSG), which mandates companies to assess and mitigate human rights risks throughout their supply chains. This paper aims to examine the challenges Japan faces in implementing HRDD and explore how Germany's LkSG provides a viable model for effective regulation. The discussion begins with an overview of Japan's current HRDD landscape, followed by an analysis of Germany's legal framework. Based on this comparative study, I propose a legal structure tailored to Japan, considering its unique economic and corporate environment.

2. Japan's Current HRDD Landscape

Japanese corporations are deeply embedded in global supply chains, which exposes them to significant human rights risks. Cases of forced labor in China's Xinjiang Uyghur region and child labor in cobalt mining in the Democratic Republic of Congo have drawn international criticism and highlighted the need for Japanese firms to ensure ethical sourcing. Despite these concerns, Japan lacks a legally binding framework for HRDD. Instead, companies operate under the "Guidelines for Respecting Human Rights in Responsible Supply Chains", which only encourage voluntary efforts without enforcement mechanisms. Additionally, corporate culture in Japan prioritizes self-regulation and business-friendly policies, leading to limited engagement in proactive human rights risk

management. The absence of strict legal obligations results in companies conducting superficial assessments, often relying on self-reported supplier data rather than rigorous third-party audits.

Japan's voluntary HRDD approach has resulted in uneven adoption across industries. Large multinational corporations with global exposure have stronger incentives to comply with international standards, while small and medium-sized enterprises (SMEs) face significant barriers due to resource constraints. Unlike the EU and the US, where supply chain transparency is legally required, Japanese companies face minimal consequences for non-compliance. As a result, Japan risks falling behind in global regulatory standards and losing access to markets with stricter HRDD laws.

3. Germany's Supply Chain Due Diligence Act (LkSG)

Germany's Supply Chain Due Diligence Act (LkSG), enacted in January 2023, mandates that companies conduct comprehensive risk assessments of their supply chains, ensuring compliance with human rights and environmental standards. It applies to companies with 3,000 or more employees (expanding to 1,000 by 2024), requiring them to prevent, mitigate, and remediate human rights violations.

LkSG has strict penalties for non-compliance, including:

- Fines up to €8 million or 2% of annual turnover for large corporations.
- Exclusion from public procurement contracts for repeated violations

Germany's enforcement model ensures accountability, unlike Japan's voluntary approach. LkSG's success in promoting transparency suggests that a legally binding HRDD framework can drive corporate responsibility without compromising business operations.

4. Key Features of a Proposed HRDD Law for Japan

Japan's HRDD law should require companies to regularly assess and disclose human rights risks in their supply chains. A tiered approach can be adopted, where large corporations lead compliance efforts while SMEs receive phased implementation support. For example, companies with over 1,000 employees initially, expanding to SMEs within five years and firms must submit HRDD reports to the Ministry of Economy, Trade, and Industry (METI), ensuring public transparency.

Companies should be legally required to integrate supplier codes of conduct into contracts, ensuring ethical labor practices. Key elements include prohibition of forced labor, child labor, and hazardous

working conditions, implementation of third-party audits to verify compliance and training programs for suppliers on human rights and environmental sustainability.

To ensure compliance, Japan must introduce penalties for HRDD violations similar to LkSG such as fines proportional to annual turnover (e.g., up to 2% of revenue), exclusion from government contracts for repeated non-compliance, and criminal liability for corporate executives in severe cases of negligence.

Recognizing the challenges SMEs face, government subsidies and training programs should be established to help smaller firms comply with HRDD regulations. Similar to Germany, Japan can provide financial assistance for HRDD implementation and establish public-private partnerships to facilitate compliance support.

5. Conclusion: A Path Forward for Japan

Japan's current HRDD framework remains inadequate due to its voluntary nature and lack of legal enforcement. In contrast, Germany's LkSG has demonstrated that a legally binding HRDD framework enhances corporate accountability while maintaining economic stability. Implementing a similar HRDD law in Japan would align its corporate governance with international human rights standards and protect Japan's global economic reputation. In short, while transitioning to a mandatory HRDD system may face resistance from businesses, a phased approach and government support will help ease implementation. By adopting a robust HRDD law, Japan can ensure that its businesses remain competitive in international markets while upholding human rights principles.

References

・1) 西村あさひ法律事務所「ビジネスと人権」プラクティスグループ『「ビジネスと人権」の実務』商事法務 2023 年

・2) 日本弁護士連合会・国際人権問題委員会『詳説ビジネスと人権』現代人文社 2022 年

・3) 小林一郎『日本の契約実務と契約法:日本的契約慣行の研究」商事法務 2024 年

・4) 大村恵実・佐藤暁子・高橋大佑『人権デューディリジェンスの実務』金融財政事業研究会 2023 年

・5) 中西優美子『E U 基本法の体系』法律文化社 2024 年

・6) 近藤敦『国際人権法の規範と主体』信山社 2023 年

・7) 小林一郎「サプライチェーン・デュー・ディリジェンスと契約管理(上)ドイツ企業との比較から見える日本企業の課題」『NBL』1255 号 2023 年、10-19 ページ。
・8) 小林一郎「サプライチェーン・デュー・ディリジェンスと契約管理(下)ドイツ企業との比較から見える日本企業の課題」『NBL』1256 号 2023 年、15-24 ページ。
・9) 藤川信夫「経済安全保障法制と人権デューディリジェンスにかかるグローバル・サプライチェーンのリスクマネジメント：国際取引法・国際私法の視点からの考察を主に」千葉商大論叢第 60 巻第 3 号、2023 年、191―213 ページ。
・10) 「責任ある企業行動のための OECD デュー・ディリジェンス・ガイダンス」
http://mneguidelines.oecd.org/OECD-Due-Diligence-Guidance-for-RBC-Japanese.pdf
・11) Doris Fuchs and Benedikt Lennartz, ”Business interest in human rights regulation: shaping actors’ duties and rights”, Critical Review of International Social and Political Philosophy, August 23, 2022,
https://www.tandfonline.com/doi/epdf/10.1080/13698230.2022.2113226?needAccess=true
・12) 森詩織「人権デューディリジェンス、日本企業の対応は?」『JETRO ビジネス短信』2023 年 4 月 18 日、
https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/special/2023/0303/9cfcf53ac729103f.html
・13) European Commission, “The European External Action Service, Guidance on Due Diligence for EU Businesses to address the Risk of Forced Labour in their Operations and Supply Chains” July 12, 2021, https://trade.ec.europa.eu/doclib/docs/2021/july/tradoc_159709.pdf
・14) Commission Proposal, COM (2022) 71:Proposal for a DIRECTIVE OF THE EUROPEAN PARLIAMENT AND OF THE COUNCIL on Corporate Sustainability Due Diligence and amending Directive (EU) 2019/1937 (CSDDD),
https://eurlex.europa.eu/legalcontent/EN/TXT/?uri=CELEX%3A52022PC0071
・15) Commission Proposal, COM (2022) 453: Proposal for a REGULATION OF THE EUROPEAN PARLIAMENT AND OF THE COUNCIL on prohibiting products made with forced labour on the Union market (EU Forced Labour Ban),
https://eur-lex.europa.eu/legalcontent/EN/TXT/?uri=CELEX% 3A52022PC0453
・16) United Nations Human Rights Council, Guiding Principles on Business and Human Rights: Implementing the United Nations "Protect, Respect and Remedy" Framework (A/HRC/17/31)(2011),
https://digitallibrary.un.org/record/705860?ln=en#record-files-collapse-header
・17) ドイツサプライチェーン・デューディリジェンス法(参考英訳)

Federal Ministry of Labour and Social Affairs, “Act on Corporate Due Diligence Obligations in Supply Chains ”, BMAS, August 18, 2021, https://www.bmas.de/EN/Services/Press/recent-publications/2021/act-on-corporate-due-diligence-in-supply-chains.html

・18) ジェトロ調査部欧州課「ドイツ サプライチェーン・デューディリジェンス法に基づくリスク分析の実施ガイダンス - リスクの特定、比較衡量、優先順位付け(参考和訳)」『JETRO 調査レポート』2023 年 3 月 15 日 https://www.jetro.go.jp/world/reports/2023/01/c068d17a0c143347.html

・19) 二片すず「デューディリジェンス法施行から 1 年、2024 年 1 月から対象企業拡大」『JETRO ビジネス短信』2023 年 12 月 27 日 https://www.jetro.go.jp/biznews/2023/12/015b5a23d6d676ee.html

・20) ジェトロ調査部「「サプライチェーンと人権」に関する政策と企業への適用・対応事例」『JETRO 調査レポート』2023 年 12 月 https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/01/136c666a3a6cfcc4/20230008rev1.pdf

報告要旨

本発表では、日本における人権デューデリジェンス（HRDD）の課題と、その解決策としてのドイツ「サプライチェーン・デューデリジェンス法（LkSG）」の示唆について論じた。国際社会では、企業のサプライチェーンにおける人権リスク管理が重要視され、EU やドイツでは法的拘束力のある規制が導入されている。一方で、日本においては HRDD に関する法規制が存在せず、企業の自主的対応に委ねられている。その結果、対応の格差が生じ、多くの企業が実効的なリスク管理を行えていない。

まず、日本とドイツの HRDD 政策の違いを整理し、日本が直面している課題について明らかにした。特に、日本の企業が法的義務のない自主規制の下で、形式的な対応にとどまる傾向が強い一方、ドイツの LkSG では、企業に対するリスク評価・是正措置・報告義務が明確に規定され、違反には罰則が科される。この仕組みにより、ドイツ企業はより積極的に HRDD に取り組んでいることが分かる。最後に、日本が LkSG から学ぶべき点を整理し、法的拘束力のある HRDD の導入が求められる理由を提示した。具体的には、①リスク評価と定期報告の義務化、②サプライヤー行動規範の法的拘束、③違反企業への制裁措置、④中小企業への支援策の 4 つの柱を軸に、日本に適した法規制の在り方を提案した上で、企業の反発を抑えるため、段階的な導入や政府の支援体制の強化が必要であることを論じた。

パリ・シテ大学討論会報告

1. ディスカッションについて

今回の交流授業では、日本とドイツの人権デューデリジェンス（HRDD）法制の比較をテーマとし、フランスの学生とディスカッションを行った。私の発表後、質疑応答を経てフランス側の発表があり、その後テーマに関する自由討論を実施した。後半では懇親会も開催され、プレゼン以外のトピックについても広範に交流を行った。特に、フランスの学生は EU の企業持続可能性デューデリジェンス指令（CSDDD） に関心を持っており、日本の現状との違いに対する質問が多く見られた。また、フランス企業がどのように HRDD を実施しているのかについても話題になり、日本企業との認識の違いが浮き彫りになった。加えて、フランスの学生からは「なぜ日本では強制的な法整備が進まないのか」「企業の自主規制ではどのような問題があるのか」といった、政策決定の背景に関する質問もあった。

以下に、主な質問とそれに対する回答をまとめる。

- 日本企業の HRDD に関する現状はどのようなものか？

→ 現状、日本では企業の自主的な取り組みに委ねられており、EU のような強制的な法規制がない。そのため、企業ごとの対応のバラつきが大きく、一部のグローバル企業は対応を進めているものの、多くの中小企業はリソース不足から対応が遅れている。

⇒ フランスでは、企業持続可能性報告指令（CSRD） に基づき、一定規模の企業は HRDD を含めた詳細なサステナビリティ報告が義務付けられている。フランスの学生からは、「日本の企業は国際市場での信頼性を維持するために、いずれにせよ対応を進める必要があるのでは？」との指摘があった。

- 罰則がないことで、企業の取り組みにどのような影響が出るのか？

→ 罰則がないため、HRDD の取り組みが形式的になりやすい。たとえば、サプライヤーへのアンケート調査のみでリスク評価を終える企業もあり、実効性が低い。

⇒ フランス側からは、「EU ではサプライチェーン上のリスクが判明した場合、企業は具体的な是正措置を求められる。単なる報告ではなく、対応しなければ罰則が科される」とのコメントがあった。これは、日本企業にとって大きな違いであり、法的拘束力のある HRDD の必要性を改めて認識する機会となった。

- ドイツの LkSG と日本の自主規制の違いは？

→ LkSG では、企業がリスク評価と是正措置を行うことが義務付けられており、違反した場合には高額な罰金や政府調達からの排除といった制裁がある。日本の自主規制ではこのような制裁がなく、企業の裁量に依存する形になっている。

⇒ フランスの学生からは、「企業の自主的な対応だけでは不十分であり、消費者や投資家に対する説明責任のためにも、法的枠組みが必要ではないか」という意見が出た。これは、日本の現状に対する批判的な視点として興味深いものだった。

3. 今後の課題

今回のプレゼンは、情報量が多くなりすぎたことから、一方的な説明になってしまったと感じた。特に、8 分間という時間の制約の中で LkSG の詳細、日本の現状、HRDD の課題と解決策 をすべて盛り込もうとしたため、フランスの学生にとって理解しにくい部分もあったかもしれない。また、日本の企業文化や法律の枠組みがフランスの学生にとって馴染みが薄い点も考慮し、より身近な例を交えた導入を工夫すべきだったと反省している。例えば、日本のサプライチェーンに関する具体的な事例 を挙げ、問題の深刻さを強調した方が、より説得力のあるプレゼンになったと考えられる。

今回の議論を通じて、日本とドイツの比較だけでなく、フランスの HRDD 政策との違いについても分析を深める必要性を感じた。フランスではすでに EU の枠組みに従い、企業の説明責任が厳格に求められており、日本の自主規制とのギャップが明確になった。今後は、日本の企業がどのように EU の規制対応を進めるべきかについて、さらに掘り下げた研究が必要だと考える。また、フランスの学生からは、「フランスでは、他国の評価の高い政策を積極的に導入し、必要に応じて修正する手法が一般的」という指摘があった。この視点は、日本の HRDD 政策の導入においても示唆に富むものである。日本では、慎重な検討の末に独自の仕組みを構築しようとする傾向が強く、その結果として国際基準への適応が遅れることが多い。しかし、フランスのようにまず導入し、運用しながら修正するという手法も考慮すべきである。

Tourism Development Linked to Cultural Policies: A Comparative Analysis of France and Japan

Sora Takahashi

With a declining birthrate and an aging population, Japan is facing a serious problem in urban areas and depopulation in rural areas. Tourism could be a solution.

1. Introduction

To create a sustainable society, it is necessary for each region to make use of its resources and promote them effectively.

In the 2022 international tourist arrivals ranking, Japan ranks 42nd with 3.83 million people compared to France ranking 1st with 79.4 million people. In addition, in the 2022 international tourism revenue ranking, France came in 4th with 59.7 billion US dollars, compared to Japan ranking 11th with 9.2 billion US dollars. This highlights the gap between France and Japan in tourism.

Here, I would like to introduce the idea of Destination Management Organizations (DMOs) which is starting to gain recognition worldwide. This research aims to identify effective systems in France, especially in cultural policies, so Japan can improve its regional tourism systems.

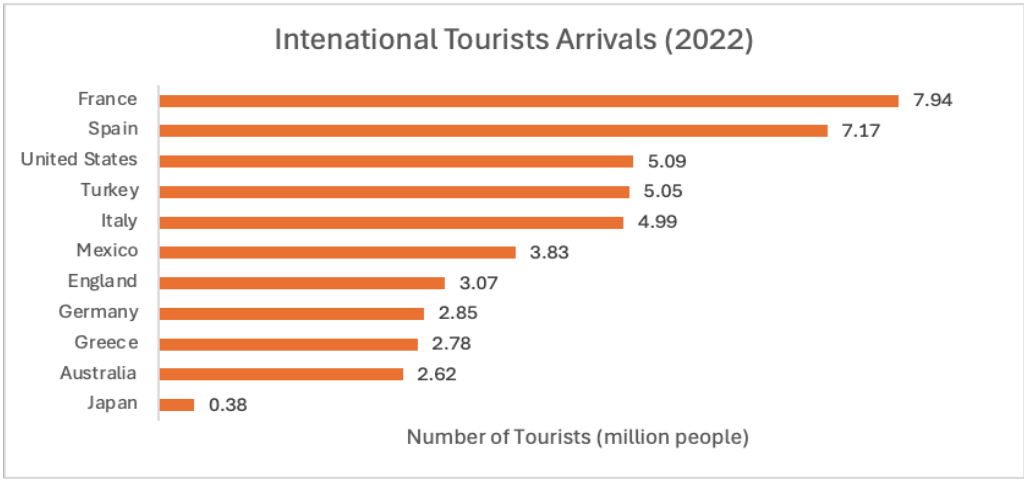


Fig 1. *International Tourist Arrivals in 2022*

Fig 2. *International Tourism Revenue in 2022*

2. Current Status

Here is some basic information about Japan and France. Japan has a population of approximately 120 million (2023) and is divided into 47 prefectures and 1,718 municipalities. 6.64 million people visited Japan as tourists in 2023.

France has a population of approximately 67.16 million (2023) and is divided into 18 regions, 101 departments, 334 districts, and 35,499 municipalities. In 2023, over 100 million tourists visited France.

Japan's DMO system was established in 2015, which aimed to form an organization that serves as a commander of regional tourism. There are 4 categories of DMOs. The national DMO, the large area cooperation DMOs, the regional cooperation DMOs, and the regional DMOs. The point here is that Japan holds their DMO as part of the government's tourism policies, rather than an independent tourism management organization.

France's DMO structure also has 4 types, with the nation's official tourism development agency known as Atout France, followed by regional, departmental, and municipal DMOs. What I would like to point out is the project "Destination France plan". This project aims to promote France as a tourist destination and strengthen their market share.

3. Strategies for Expanding Local Tourism Benefits

To expand local tourism benefits, it is necessary for people living in a particular region to have some kind of benefit from the DMO and for the major tourism areas to be decentralized.

In the DMO registration guidelines which the Japan's Tourism Agency announced, there is only a description about inbound strategies, and it is not mandatory for residents to be involved in DMOs.

By contrast, one of France's regional DMOs, Bouches-du-Rhone Tourism Office, made progress offering support programs for tourism workers. The same can be said for Occitanie Tourism Office prioritizing the residents' well-being in tourism strategies.

What is also important is to diversify the flow of tourists within the country. In Japan, only 28.23 million stayed in hotels outside of the three main prefectures, Tokyo, Osaka, and Kanagawa out of 66.4 million tourists in 2015. The French Tourism Development Agency has created 15 destination brands in France to tackle this kind of problem. It also encourages new tourist destinations to appear with a three-year destination agreement that the Tourism Bureau and the French Tourism Development Agency holds.

4. Destination Management

Effective destination management will strengthen products, services, and regional brand value. In France, destination management with cultural policies were particularly effective. This is demonstrated by two cases.

Metz: The Pompidou Center Metz opened as a branch of the Pompidou Center in Paris. In the first two years, the number of visitors exceeded 1.4 million, breaking a record for a museum outside of Paris. The Pompidou Center Metz continues to promote the whole region by selling passes that include admission fees to the city's museums and bus passes. The Pompidou Center Metz is the first step toward the decentralization of French culture.

Nantes: In the Nantes islands, a project was initiated to achieve the renaissance of culture. Before the project was launched, discussions were held in public, and local artists and designers participated in the design of public spaces. The cultural policy aims to reach out to citizens who have never attended a theater, concert, or exhibition before, and to create opportunities for encounters and excitement. Festivals like "La Folle Journee", being in a reasonable price range of 5-20 euros, made cultural events accessible to everyone.

There are some successful examples in Japan as well.

One is the 21st Century Museum of Contemporary Art in Kanazawa. The art museum opened in 2004 with the goal of creating new culture and a new liveliness in the city. Having a more casual and approachable atmosphere compared to conventional art museums, this museum has been successful in

attracting visitors, especially children and the younger generation. It offers art programs for elementary school students and holds a tour where trained volunteers guide children through the museum. An atelier is also set in the museum's garden, where visitors can watch artists at work during the exhibition's run.

Another is the Setouchi International Art Festival. The Setouchi area originally prospered as a place for people to come and go, but in an age where convenience is emphasized, the population has aged and declined. However, this art festival brought people living in the Setouchi area, tourists, and artists together, spreading the charms of this region to the world. Not only do artists outside the Setouchi area participate, but also local people living inside the area can participate as artists. Thanks to the festival, the number of new residents has increased, and public facilities have improved. Artworks attract tourists from Japan and abroad.

5. Recommendation

Based on the mentioned successful cases, I propose three main strategies for Japan's tourism policies.

The first one is incorporating resident participation. DMOs should involve residents more actively in tourism planning. However, it will probably not be effective if ordinary residents without any expert knowledge participate, so educational programs in the branches of marketing and data analysis should be implemented.

The second is youth and community workshops. Museums in rural areas do not hold workshops as much as famous museums in Tokyo even though they are the ones who need regional development. I think it is important for local people, not just tourists, to experience art. This will create interaction between people and create a local atmosphere, facilitating the smooth development of towns. Destination management is not just about developing a tourist destination; it is about creating a sustainable tourist town. And sustainability cannot be attained if it is not familiar to residents.

The third one is to enhance the value of each destination. To achieve sustainable tourism, we should now focus on the quality of tourism, and not the number of visitors. Changing admission fees between residents and others could be an effective form of monetization. Communicating the history and significance of cultural heritage has been a key challenge in Japan. Most of the detailed information is only accessible on pamphlets and on-site displays, and online information is limited. We must prioritize making as many people as possible in Japan and abroad aware of, and interested in experiencing, cultural heritage, rather than keep a closed mindset of "one must go there to understand the fascination." It is necessary to use social media and digitalize the information such as using cell phones to read QR codes and listen to information in audio and video formats.

6. Conclusion

Successful examples of France's tourism policies were mostly based on cultural facilities. They were accepted by residents by involving them as part of the project. Therefore, it is necessary for Japan's DMOs to encourage the participation of residents and target those who live there as the subject of destination management.

Japan's DMOs were established in 2015 and are still in the process of development. Japan is a country full of unique attractions. Before they fade out, we must ensure that they are introduced to international audiences and utilize them as tourism resources.

References

青柳正規「日本の文化庁の国家予算はフランスの 10 分の 1 美術館好きは多いのに、アートにお金が回らない理由」『logmiBiz』2019 年 3 月 11 日 https://logmi.jp/business/articles/320595（最終参照日：2024 年 6 月 4 日）

秋元雄史「美術館の文化プログラムによるまちづくりと文化観光」 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/wg_dai4/siryou4.pdf

有馬昌宏「文化経済学における実証研究の同行と課題」『文化経済学』第 3 巻 1 号、2002 年 https://doi.org/10.11195/jace1998.3.11

池上淳「文化と固有価値の経済学」『文化経済学』第 2 巻 4 号、2001 年　p.1-14 https://doi.org/10.11195/jace1998.2.4_1

一般社団法人芸術と想像. "諸外国の文化予算に関する調査". 文化庁ホームページ.2012. https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/h24_hokoku_3.pdf

伊藤徹哉「ヨーロッパにおける文化景観保全制度による地域変容」『歴史地理学』第 49 巻 1 号、2007 年 p.52-68 http://hist-geo.jp/img/archive/232_052.pdf

神吉紀世子「農村における文化的な景観の保全と創造」『農村計画学会誌』第 30 巻 3 号、2011 年　p.478-481　https://doi.org/10.2750/arp.30.478

亀岡聖朗「美術館・博物館利用者の認知に関する環境心理学的研究」『人間・環境学会誌』第 8 巻 2 号、2002 年　p.1-10　https://doi.org/10.20786/mera.8.2_1

河島伸子「都市文化政策における創造産業：発展の系譜と今後の課題」『経済地理学年報』第 57 巻 4 号、2011 年　p.295-306 https://doi.org/10.20592/jaeg.57.4_295

河村千鶴子「美術館・大学を核とした地域再生」『Clair Report』第 362 号、2011 年 https://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/362.pdf

島内智子「フランスの基礎自治体における文化施設の管理」『Clair Report』第 556 巻、2024 年 https://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/556.pdf

清野貴幸「砂の美術館エジプト編の経済効果 171 億円 コロナ後は海外客 4 倍」『朝日新聞』2024 年 1 月 24 日 https://www.asahi.com/articles/ASS1R7H84S1QPUUB004.html （最終参照日：2024 年 6 月 4 日）

高阪一治「美術史学と文化政策：19 世紀ドイツ美術の研究と当時の文化政策をめぐって」『鳥取大学教育地域科学部紀要』第 5 巻 1 号、2003 年　p.93-97 https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/record/567/files/tujfersesh5(1)_93.pdf

高橋和司ほか「フランスの文化政策」『Clair Report』第 260 号、2011 年 https://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/360.pdf

槌田洋「持続可能な都市の文化政策」『地域経済学研究』第 38 巻、2020 年　p.61-82 https://doi.org/10.24721/chiikikeizai.38.0_61

文化庁. “令和 6 年度予算の概要”. 文化庁ホームページ. 2023. https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/94041801_01.pdf

松島昇「ドイツバイエルン州における景観保全について」『第 121 回日本森林学会大会』2010 年 https://doi.org/10.11519/jfsc.121.0.13.0

山田浩之「文化産業論序説」『文化経済学』第 3 巻 2 号、2002 年　p.1-7https://doi.org/10.11195/jace1998.3.2_1

渡部薫「英国における都市をテーマにした文化プロジェクトと都市再生：リヴァプールの 2008 年ヨーロッパ文化首都を事例として」『熊本法学』第 149 巻、2020 年 https://kumadai.repo.nii.ac.jp/record/31894/files/KLaw0149_121-158.pdf

和田幸信「ZPPAUP の景観保全制度としての特徴と作成状況：フランスにおける建築的・都市的・景観的文化遺産保存区域（ZPPAUP）に関する研究その 1」『日本建築学会計画系論文集』第 63 巻 512 号、1998 年　p.221-228 https://doi.org/10.3130/aija.63.221_2

Oehler, Kay. “Mill Town, Factory Town, Cultural Economic Engine: North Adams inContext” https://web.williams.edu/Economics/ArtsEcon/library/pdfs/NA%20History%20and%20Ethnograp hy%2012006.pdf

Pollicino M. and D. Maddison, “Valuing the Benefits of Cleaning Lincoln Cathedral”, *Journal of Cultural Economics*, Vol.25, pp. 131-148, 2001.

Santagata W. and G. Signorello, “Contingent Valuation of a Cultural Public Good and Policy Design: the Case of “Napoli Musei Aperti”, *Journal of Cultural Economics*, Vol.24, pp.181-204, 2000.

Sheppard,Stephen. “The Economic Impact of MASS MoCA in 2017”

https://web.williams.edu/Economics/ArtsEcon/library/pdfs/MASSMoCAEconomicImpacts2017.pdf

Throsby, David, “Modelling the Cultural Industries”, *International Journal of Cultural Policy*, Vol.14, pp217-232, 2008

報告要旨

本レポートではフランスの文化政策における成功事例を分析することで日本の地域観光の改善策を模索する。特に、観光業による利益を地域に還元する施策、そしてデスティネーションマネジメントについて比較した。

日本の DMO は 2015 年に導入され、政府主導で設立したのに対し、住民参加の要素が乏しい。対してフランスの DMO では住民の生活向上を重視し、15 のデスティネーションブランドで新たな観光地の開発を促進している。

フランスの文化政策に基づく観光開発の成功事例としてポンピドゥセンターナントでは市民参加型のプロジェクトを通じて、文化に触れる機会を創出し、誰もが気軽に楽しめる文化政策を実現した。日本でも金沢 21 世紀美術館や瀬戸内国際芸術祭が観光と地域活性化に貢献しているが、さらなる発展の余地がある。

本研究では日本の観光政策に関して以下の３つの戦略を提言する。

住民参加の促進：DMO の観光計画に住民を積極的に関与させる。

地域に根ざしたワークショップの推進：美術館や文化施設と地域住民のつながりを強化する。

観光地の価値上昇：観光の質を向上させるためのデジタル戦略。

フランスの成功事例から学ぶべき点は文化施設を活用した観光政策が住民に受け入れられやすく、地域とのつながりを深めることで持続可能は観光が実現するということである。日本の DMO はまだ発展途上であり、地域の魅力を世界に発信し、観光資源として最大限活用されてほしい。

パリ･シテ大学討論会報告

ディスカッションについて

- 討論会の雰囲気

➢ 3-4 人のパリ・シテ大学の学生にプレゼンを 2 回行った。質疑応答も行い、パリ・シテ大学の学生たちによる発表もあった。一人で異国の生徒にプレゼンをするということで緊張していたが、パリ・シテ大学の学生たちはプレゼンの前に話しかけてくれたことで緊張もとけ、日本語学科の学生でありながら、フランス語はもちろん、皆英語も流暢で、終始和やかに交流できた。後半はお菓子やジュースを食べながらフランスに関する一般常識クイズやフランスの学生からの出し物を通して交流を深めた。短い時間の中でアカデミックな話だけではなく、普通の友達のようなカジュアルな会話もできた。

- なぜこのテーマにしたのか。

➢ 私は高校時代に世界史を学んでから特に中世ヨーロッパの絵画に興味を持っていた。フランスのルーブル美術館などに比べて日本の美術館はまだ観光地として有効活用できておらず、日本の美術の知名度ももっとあってもいいと思う。そこで、アートツーリズムの面でフランスと日本では何が違うのか調べてみようと思った。

２．今後の課題

質疑応答の時間で他にも身近にフランスが行っているアートツーリズム活性化政策はあるか聞いたところ、美術館のチケットを見せると近くのレストランで割引があったり、各街にインフォメーションセンターがあって周辺の全ての美術館の広告が‘あったりと、バスと美術館の連携以外にもレストランと美術館、街と美術館との繋がりが強いことがわかった。日本ではその施策がない。もしくは広く認知されていない、不完全なものであるため、「連携」という面で改革を進めなければならないと感じた。また、ルーブル美術館に行くことを伝えると皆すぐに好きな彫刻や絵を教えてくれたり、先ほど述べた通り美術館に関する施策を認知していることから日本の学生に比べて美術への関心が強いように感じた。しかし、美術には興味を持っていたものの、質疑応答の時間などで日本の美術館についての具体的な質問はなかったため、日本の美術館の海外へのアウトリーチは足りていないと言える。

Japanese Regional Issues and Regional Banks' Operation

Soichiro Taguchi

An analysis and comparison of the effects of demographic change on regional banks' operation between Japan and France, with OLS regression.

1. Introduction

My research topic is about Japanese regional issues and regional banks' operation. I will show you my analysis about the operational outcome for regional banks and my comparison between some Japanese ones and Crédit Agricole in France.

First, I will introduce the background of my research. Japanese regional areas face serious crises and it is said that the two main causes are the 'population outflow' and the 'aging society' by the Japanese Financial Services Agency. Let's have a look at the charts below and briefly get the point. The lines show the change in population on the left chart and in the working age population on the right side. The blue line, which is for the average of Japanese regional areas, has been dropping for years and is always under zero, while the red line, which is for the whole of Japan, is around 0.5%. The working age population is similar but actually much worse looking at the scale. In contrast, that of France is different, the total population change is positive and the working age population hasn't dropped much. These facts mean that the Japanese regional area population and workers' population are shrinking by far faster than those of the whole of Japan and France.

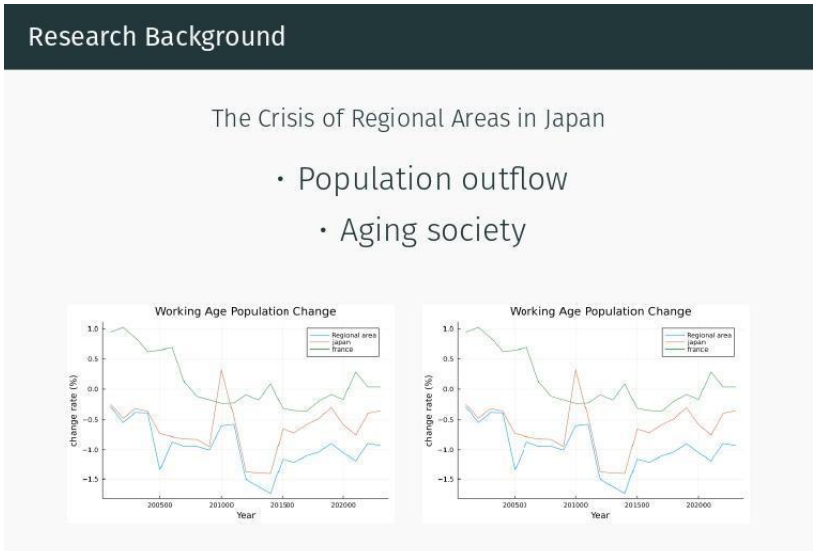


Fig. 1 *The demographic change line charts*

2. Features of Regional Banks and the Difference between Japan and France

In this study, I researched how the population change affects the outcome of regional banks' operation. The regional banks play a key role in regional industries and economies because their financing services use specific information for each enterprise there including small and medium ones. That's why their operational outcomes are worth analysing. In fact, the Japanese financial services agency (2018) reported the banks' performances were being worsened by the population change. Hence, my main focus in this research is to find out whether the population factors influence the banks' performance or not. Plus, if true, how much is the impact.

Before moving to the analytical part, I want to add an important point to note the difference between Japanese regional banks and French ones. In Japan, there are a lot of regional banks. There are two categories of regional banks and they add up to around 100 all together. However, in France, there are not so many. The main bank with regional support is *Crédit Agricole* (CA). Moreover, It is one of the biggest banks in both France and Europe. There are other similar banks such as *Banque Populaire* and *Banque De Savoie*, though, the core of the regional finance is CA, so are the first and the second regional banks in Japan. The biggest difference is the quantity and the scale. The figure below depicts the time-series data for the average revenue and the average cost of Japanese first regional banks, the second–regional banks, urban banks, and CA. We can figure out that the Japanese regional banks have a low scale and CA have by far the highest scale. To compare them in one standard gauge and interpret the score as efficiency, I will make the two performance indexes into one Cost per Revenue (CpR)

index. It is just cost divided by revenue for the same period and easy to understand. The lower the number is, the more efficient the bank's operation for the period. By plotting CpR as a line chart,

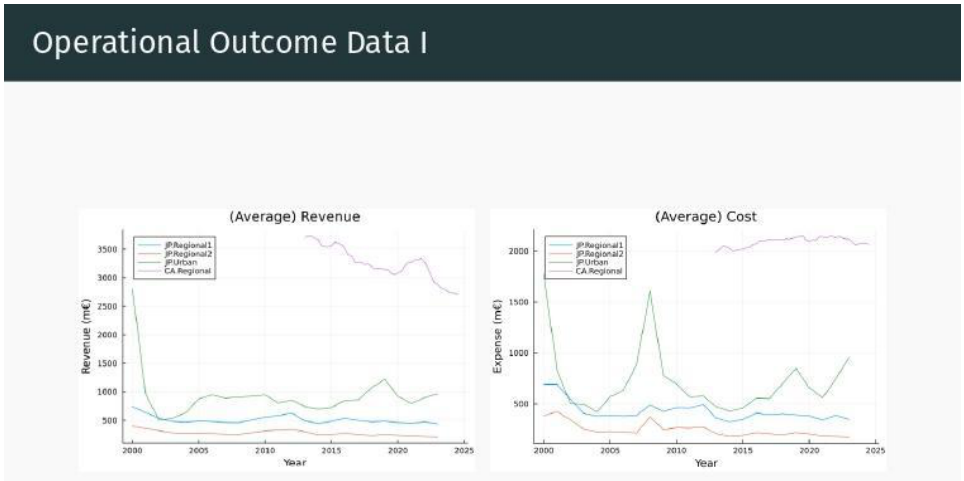


Fig. 2 *Revenue and cost line charts*

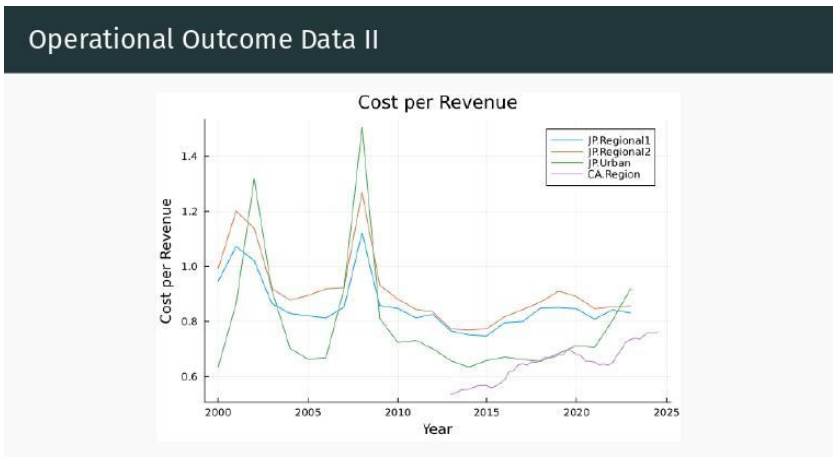


Fig. 3 *Cost per revenue line chart*

we can finally have a fair comparison between the banks. The CA performs the best among four groups, although the score has increased for the last 10 years. As for Japanese banks, the regional banks are basically the least efficient except for some outbreak year of extraordinary events, such as the Lehman Brothers shock in 2008 and the Coronavirus shock in 2020. The regional banks are more stable than urban banks but not well-performed. This can be explained with the concept of 'economies of scale.' Generally, the bigger an enterprise is, the more efficiently it can operate the business until some point. Next, our interest and target is in how much the population change affects the financial business.

It may have something to do with efficiency as the Financial Services Agency says, or it may not have any relevance.

3. OLS Regression

The data I used for Japanese regional banks' operation was supplied by 'Nikkei NEEDS FinancialQuest.' The obtained data comprises 49 regional banks' operational information from 2000 to 2023. The data for CA is directly obtained from their quarter fiscal reporting paper from the 1st quarter of 2013 to the 2nd quarter of 2024. The demographic data is obtained from each website of the governmental statistics institute: e-Stat for Japanese and INSEE for French. The dependent variables are Revenue and Cost, and the target explanatory variables are Population and Working *age rate* (NOT Working age population!). The demographic variables of Japan are for each prefecture, but the French data is only for the whole country. The control variables are Year, GDP, Consumer price index (CPI), Shadow rate (SR) or Interest rate of the central bank, Cost of risk (COR), Tax, Total capital, Common equity ratio (CER), Net income *per capital* (NpC, NOT capita!), and some dummy variables. The region dummy identifies 10 general regions, i.e. Chubu, Chugoku, Hokkaido, Hokuriku, Kanto, Kinki, Kyushu, Okinawa, Shikoku, and Tohoku. The rule of prefectures' parental region follows the normal

	Obs	Mean	Std. Dev.	Min	Max
Year	1,176	11.500	6.925	0.000	23.000
Population	1,176	2190.539	1807.676	537.000	7557.000
Working age population	1,176	1362.487	1186.084	294.000	5021.000
Working age rate	1,176	0.607	0.038	0.519	0.724
GDP	1,176	4.207e+06	4.779e+05	3.394e+06	5.387e+06
Consumer Price Index	1,176	0.974	0.027	0.945	1.056
Shadow rate (interest rate)	1,176	-1.799	1.410	-5.141	0.438
Revenue	1,176	428.995	326.737	43.935	2260.942
Cost	1,176	363.905	275.517	41.399	2707.719
Cost per revenue	1,176	0.875	0.173	0.522	2.753
Cost of risk (Weighted sum of risk assets)	1,176	546.574	508.492	59.301	5278.982
Tax	1,176	24.191	41.763	-295.756	262.379
Total capital	1,176	24603.409	20768.758	2171.934	1.467e+05
Common equity ratio	1,176	0.062	0.072	0.001	0.610
Net income per capital	1,176	0.002	0.005	-0.075	0.028
Lehman's collapse shock dummy (Year 2008)	1,176	-	-	0	1
Coronavirus shock dummy (Year 2020.5-2023.5)	1,176	-	-	0	1
Region dummy (A bank's main area in general 10 regions)	1,176	-	-	0	1
2nd dummy (whether 1st or 2nd RB)	1,176	-	-	0	1

Fig. 4 *Japanese regional banks basic statistics*

	Obs	Mean	Std. Dev.	Min	Max
Quarter	47	18.750	3.428	13.000	24.500
Population	47	67227.720	793.336	65682.000	68480.000
Working age population	47	33556.670	159.811	33364.000	33861.000
Woking age rate	47	0.499	0.008	0.489	0.515
GDP	47	5.184e+05	16784.275	4.855e+05	5.405e+05
CPI	47	1.054	0.066	0.990	1.203
Interest rate	47	0.289	1.427	-0.500	4.000
Revenue	47	3254.938	288.147	2711.515	3738.614
Cost	47	2089.715	45.166	1987.640	2151.513
Cost per revenue	47	0.648	0.065	0.536	0.762
Cost of risk	47	191.686	63.527	65.155	336.224
Tax	47	335.999	149.484	69.063	544.933
Total capital	47	1.053e+05	1.986e+05	40246.249	1.092e+06
Common equity ratio	47	0.112	0.010	0.090	0.126
Net income per capital	47	0.012	0.006	2.209e-04	0.023
Coronavirus shock dummy	47	-	-	0	1

Fig. 5 *CA basic statistics*

definition. I conducted a very simple and straightforward OLS regression, just regressing the revenue and cost to all certain dependent variables. The mathematical equation is as follows:

$$y_{m,t} = \beta X_{m,t} + \gamma C_{m,t} + \varepsilon_{m,t} \qquad \text{for all} \quad m, t;$$

where m, t stands for the specific bank and the operational year or quarter, respectively. β stands for the coefficient vector for target explanatory variables in the vector $X_{m,t}$, i.e. the population and the working age rate (of bank m for time period t). Similarly, γ stands for the coefficient vector for control variables in the vector $C_{m,t}$. $\varepsilon_{m,t}$ is the error term. Basically, both dependent variables and explanatory variables are converted with a log function to show the results as an elasticity form. However, some dependent variables such as shadow rate (interest rate), tax, and NpC can be negative as the above figures show. Thus, the conversion is applied only to the always positive indexes.

4. Results and Interpretation

There are 3 types of control variable selections: 1. only year or quarter (simple OLS), 2. year and log capital, and 3. all control prepared variables. There are two dependent variables, thus the result has 6 columns for both Japanese regional areas and CA respectively. The result tables are shown below. Before we start the analysis, one simple equation to calculate cost per revenue should be noted.

$$log\ C - log\ R = log\ (C/R) = log\ (CpR).$$

It means that if we want the value of log CpR, we just have to calculate the difference of log C and

log R.

As for Japanese regional banks, shown in Fig. 6, the simple OLS depicts that population has insignificant, similar, and small effects on both revenue and cost. Working age rate has positive, big, and significant effects at the 0.1 % level but similar effects as well. In contrast, if the log capital is added, the situation for the working age rate changes dramatically, though the population does not. They are neither 1 %-level significant nor big, but negative. If we control for capital, which is considered as the key factor of the business operation, the effect of the working age rate shrinks remarkably. This result is even strengthened if we add more control variables. Finally, the last estimation implies that 1 % increase of population raises 0.042 % in revenue and incurs a 0.025 % cost, thus decreasing around 0.017 % CpR; 1 % increase of working age rate brings a decrease of 0.983 % in revenue and 0.653 % in cost, thus in total it raises 0.330 % of CpR. The elasticity of the population to any values are negligibly small. The 95 % confidence interval for log CpR is $[-0.04, 0.003]$ according to Fig. 9, which is the resulting table of the regression of CpR to explanatory variables and corresponding types of control variables.

	Simple OLS of revenue	Simple OLS of cost	OLS of revenue with capital	OLS of cost with capital	OLS of revenue with all variables	OLS of cost with all variables
(Intercept)	8.169***	8.081***	-3.088***	-2.446***	-7.008***	-8.890***
	(0.691)	(0.660)	(0.159)	(0.212)	(0.782)	(0.979)
Log populton	0.064	0.052	0.032***	0.022	0.042***	0.025*
	(0.049)	(0.047)	(0.010)	(0.014)	(0.011)	(0.014)
Log working age rate	6.479***	6.194***	-0.312*	-0.156	-0.983***	-0.653***
	(0.869)	(0.830)	(0.185)	(0.247)	(0.201)	(0.252)
Year	0.033***	0.024***	-0.035***	-0.040***	0.019***	0.009
	(0.007)	(0.007)	(0.001)	(0.002)	(0.006)	(0.008)
Log capital			0.907***	0.849***	0.812***	0.722***
			(0.006)	(0.007)	(0.010)	(0.013)
Squared year					-0.003***	-0.002***
					(3.614e-04)	(4.525e-04)
Log GDP					0.247***	0.415***
					(0.051)	(0.064)
Log CPI					4.798***	4.836***
					(0.672)	(0.842)
SR					0.038***	0.044***
					(0.004)	(0.005)
Log COR					0.117***	0.196***
					(0.011)	(0.014)
Tax					6.034e-04***	-7.434e-04***
					(1.143e-04)	(1.431e-04)
Log CER					-0.024***	8.865e-04
					(0.008)	(0.010)
NPC					0.759	-4.223***
					(0.787)	(0.985)
N	1,176	1,176	1,176	1,176	1,176	1,176
R^2	0.145	0.161	0.963	0.930	0.976	0.959

Fig. 6 *Result table of JP regional banks*

	OLS of revenue with all variables	OLS of cost with all variables
Lehman's collapse shock	-0.021	0.223***
	(0.023)	(0.029)
Coronavirus shock	-0.039	-0.065**
	(0.026)	(0.032)
Chugoku region	-0.048**	-0.052*
	(0.024)	(0.030)
Hokkaido	-0.119***	-0.081*
	(0.037)	(0.046)
Hokuriku	-0.066***	-0.101***
	(0.020)	(0.025)
Kanto	-0.022	-0.034*
	(0.014)	(0.018)
Kinki	-0.038**	-0.036
	(0.018)	(0.023)
Kyusyu	0.004	0.013
	(0.017)	(0.021)
Okinawa	0.152***	0.109***
	(0.031)	(0.039)
Shikoku	-0.006	-0.033
	(0.018)	(0.023)
Tohoku	-0.121***	-0.119***
	(0.015)	(0.019)

Fig. 7 *Result of dummy variables*

The values of estimated coefficients naturally equal the difference of cost and revenue on other figures on Fig 6. The elasticity of the working age rate is not small, the 95 % confidence interval is $[-0.03, 0.69]$. It implies that it is very likely that the higher the rate is, the lower the performance of regional banks becomes, contradicting the hypothesis of the aging society's negative effect.

On the contrary, as for *Crédit Agricole*, the effect of each variable is significantly different and capital doesn't matter so much. Have a look at Fig 8.

	Simple OLS of revenue	Simple OLS of cost	OLS of revenue with capital	OLS of cost with capital	OLS of revenue with all variables	OLS of cost with all variables	OLS of cost without squared quarter
(Intercept)	-44.956	48.629**	-40.160	49.910***	4.512	90.418***	59.657***
	(69.892)	(19.197)	(62.485)	(17.294)	(20.680)	(19.006)	(13.937)
Log population	4.964	-3.986**	4.694	-4.058**	0.439	-7.316***	-4.942***
	(6.373)	(1.750)	(5.697)	(1.577)	(1.751)	(1.609)	(1.284)
Log working age rate	2.263	-4.914***	4.740**	-4.253***	8.439**	7.435**	0.840
	(2.107)	(0.579)	(2.016)	(0.558)	(3.627)	(3.333)	(1.668)
Quarter	-0.030	-0.005	-0.014	-5.449e-04	0.111	0.193**	0.030***
	(0.020)	(0.005)	(0.018)	(0.005)	(0.080)	(0.073)	(0.009)
Log capital			-0.034***	-0.009***	0.014*	0.002	-0.011**
			(0.010)	(0.003)	(0.008)	(0.007)	(0.004)
Squared quarter					-0.002	-0.003**	-
					(0.002)	(0.002)	-
Tax					3.596e-04***	-2.124e-05	6.332e-05
					(7.070e-05)	(6.497e-05)	(5.601e-05)
Log COR					0.051***	-0.006	-3.753e-05
					(0.007)	(0.007)	(0.007)
Log GDP					0.207	0.098	0.239**
					(0.127)	(0.117)	(0.104)
Log CER					0.135	-0.045	0.024
					(0.080)	(0.073)	(0.071)
Interest rate					-0.003	-0.004	-0.008**
					(0.004)	(0.004)	(0.003)
N	47	47	47	47	47	47	47
R^2	0.818	0.768	0.858	0.816	0.996	0.941	0.932

Fig. 8 *Result table of CA*

	Simple OLS of CpR of JP	OLS of CpR of JP with capital	OLS of CpR of JP with all variabes	Simple OLS of CpR of CA	OLS of CpR of CA with capital	OLS of CpR of CA with all variables	OLS of CpR of CA without squared quarter
(Intercept)	-0.088	0.642***	-1.881***	93.585	90.069	85.906***	69.611***
	(0.146)	(0.155)	(0.704)	(61.802)	(57.636)	(28.240)	(19.473)
Log population	-0.012	-0.010	-0.017*	-8.950	-8.752	-7.755***	-6.498***
	(0.010)	(0.010)	(0.010)	(5.635)	(5.255)	(2.391)	(1.794)
Log working age rate	-0.285	0.156	0.330*	-7.177***	-8.993***	-1.004	-4.498*
	(0.184)	(0.180)	(0.181)	(1.863)	(1.859)	(4.952)	(2.330)
Year / Quarter	-0.010***	-0.005***	-0.010*	0.025	0.014	0.082	-0.004
	(0.001)	(0.001)	(0.006)	(0.018)	(0.017)	(0.109)	(0.013)
Log capital		-0.059***	-0.090***		0.025***	-0.012	-0.019***
		(0.005)	(0.009)		(0.009)	(0.011)	(0.006)
Squared Year / Quarter			5.664e-04*			-0.002	
			(3.254e-04)			(0.002)	
N	1,176	1,176	1,176	47	47	47	47
R^2	0.117	0.197	0.551	0.890	0.907	0.994	0.994

Fig. 9 *The result table of all regression of CpR to each type of explanatory variables*

The population and the working age rate have almost identical and veryideal effects on the bank performance except OLS with all variables. With log capital, the 95 % confidence intervals of coefficients of population and working age rate for CpR (calculated with the t-distribution) are $[-19.32\ 1.82]$ and $[-12.73, -5.25]$. However, if all control variables are taken into consideration, the values change non-negligibly. What makes a difference is the existence of the squared quarter. The seventh column shows the result of regression of cost to all control variables without that term. The coefficients of target variables are similar to before or the increment is weakened. Which is suitable for the identification is a puzzle. The 95 % confidence intervals of 6th column are $[-12.56, -2.95]$ and $[-10.97, 8.96]$ respectively for population and working age, and that of 7th column are $[-10.11, -2.89]$ and $[-9.19, 0.19]$.

To interpret this result, as for Japanese regional banks, the population does not matter as much as expected. It is positive for performances at the 95 % confidence level, but it is just negligibly small. Even more, the working age rate has a negative effect with the same confidence level. I will discuss some faults of this study later, but this result is unexpected. This suggests that we should look for other factors which really make a difference. The hypothesis posed by the Japanese Financial Services is now doubtful judging from this result. As for CA, in contrast, both factors have a positive effect. The population has a plausibly significant effect on the performance. The working age rate shows a fluctuating result. If we stand on the without squared quarter side, the population can possibly be positive for performance, but it is not easy to make a conclusion. One possible reason that the working age population can have a negative effect is that elderly people are likely to deposit a greater amount of

money than young people, thus banks can fund money in areas with an older population more easily currently. This theory is a basic problem of demand and supply and applicable to any developed countries, but it needs careful and deeper research and reasoning.

5. Discussion and Conclusion

The fatal fault of this research is that it lacks some important data such as labour expenses and technological factors. The data set from Nikkei NEEDS FinancialQuest has a lot of missing information about those factors, so this possibly causes an omitted variable misidentification problem. In addition, this study does not stand on a strong basis of theories. Actually, the regional areas' population flow might have proceeded farther than usual overall, so the data for the same period might not reflect the true relation. Ogura (2007)'s existing theories or Olley and Pakes (1992)'s method to estimate the production function would be suitable, though the necessary data was not found. Moreover, this does not use any method of causal inference. Hence, an endogenous problem emerges. If more advanced and reliable research is required, some methods such as the Instrumental Variable method should be conducted. It was of great difficulty to find instrumental variables which correlate with the demographic factors and meet the exclusion condition for the operational data.

To conclude, this research has cast doubt on the implication from the Japanese Financial Services Agency that the demographic change in regional areas is a crisis for Japanese regional banks' operation. However, my research has a "fatal fault" as described above, and I cannot reach a confident and well-informed conclusion at this stage. We need further and deeper research to answer the puzzle.

References

金融庁. "地域金融の課題と競争のあり方." 金融仲介の改善に向けた検討会議 (報告書), 金融庁, 28p. (2018).

山村 延郎. "フランス・オランダの地域金融システム: 欧州における 「リレーションシップ・バンキング」 の実態と日本への示唆." (2003).

European Banking Federation. "Banking in Europe: EBF Facts & Figures 2022 -2021 banking statistics -." *European Banking Federation*, (2022).

木村昌史, and 冨田尚子. "地域銀行の次世代ビジネスモデル考: 期待される 「地域のプラットフォーマー」 の役割." 金融財政事情 71.1 (2020): 50-55.

Ogura, Yoshiaki. "Lending competition, relationship banking, and credit availability for entrepreneurs." (2007): 036.

Altunbas, Yener, et al. "Efficiency and risk in Japanese banking." Journal of Banking & Finance 24.10 (2000) 1605-1628.

Olley, Steven, and Ariel Pakes. "The dynamics of productivity in the telecommunications equipment industry." (1992).

報告要旨

本レポートは、日本の地方銀行（第一・第二ともに）とフランスのクレディ・アグリコールの業務データについて、人口と労働者人口割合との関係を分析し比較した。背景には、金融庁(2018)によるレポートで、それらが人口流出と少子高齢化として、銀行業務成績の悪化の原因として論じられていたことがある。パリ・シテ大学との交流会では、図表を用いた説明と回帰分析による結果の簡単な紹介にとどめたが、レポートには回帰分析の結果と解釈を詳しく書いた。クレディ・アグリコールは、規模の経済を生かして比較的効率的な運営を行っているが、地方銀行は、おおくの年で、効率的でない、さらには赤字になっている銀行もある。回帰分析の結論として、フランスでは人口は大きなファクターであるものの、日本では人口はあまり影響していないのではないかという解釈がなされ、また両方の国で、労働者割合はよい効果をもたないか、確たる結論は導けないということになった。しかし、このレポートには欠陥が多く、明確な診断は導けない。金融庁のレポートに、疑問を呈した、と取るのが正しいだろう。これよりも正確な結論のためには、十分なデータや洗練された手法が必要不可欠である。

パリ・シテ大学討論会報告

１．ディスカッションについて

Ｑ１．　普段はどの銀行を使っているか。（田口）

Ａ１．　三人それぞれが、Le Crédit Lyonnais、Crédit Agricole、Société Générale。（シテ大学生）

（プレゼンテーションから）

地方銀行とみなされたり、それに近い銀行は、CA の他に De Savoie, Mutuel, Courtois, Rhone-Alpes, BGCE グループ(Banque de Populaire と Caise d'Epargne をもつ)などがある。

EU は規制が厳しいが、特に今年から適用されることになるバーゼルIIIでの資本規制が、決定された 2017 時点で多くの銀行にとって厳しいものだった。

Ｑ２．　あなたはどの銀行の口座をもっているか。（シテ大学生）

Ａ２．　楽天銀行、三菱 UFJ 銀行、みずほ銀行等複数の口座を持っている。複数の口座を持つことは世界でも一般的だが、日本は就職先から指定されるなどの非自発的な機会によって、より数が多くなっている。（田口）

Ｑ３．　日本ではどの銀行が有名で、何が一番か。（シテ大学生）

Ａ３．　有名かつ巨大な銀行は、ゆうちょ銀行と３大メガバンク（三菱 UFJ、三井住友、みずほ、りそな）（田口）

Ｑ４．　フランスの地方銀行と日本の地方銀行の違いはなにか。（シテ大学生）

Ｑ５．　やはりクレディ・アグリコールという銀行の存在があることがことなる環境を生み出している。日本では、地方銀行はおよそ１００行もあり、それぞれが独立していて、なおかつ地方での銀行としてのシェアは、近年まで比重が大きく競争的であったが、規模が小さい。CA は規模が大きく、独占的だが規模の経済を生かしている。また、融資の対象も、近年までは CA は農業中心で、日本の地方銀行は、農林中金という農業分野への援助を行う銀行が別にあったため、それ以外の多様な分野への融資進出が進んで特化していない。なぜ日本でそれほ

ど多くの地方銀行が存在しているかというと、明治時代にまでさかのぼって、数百の銀行が開行したことに由来し、その意味で歴史も違う。　（田口）

Ｑ６．日本では、オンラインバンキングはどうだろうか。（シテ大学生）

Ａ６．楽天といった新興の銀行が、オンラインバンキングシステムを活用してネットワークを広げ、シェアを伸ばしている。また、メガバンクもオンライン業務に参入していることでサービス自体は普及しているが、高齢者や小売りの現場で現金の利用が多く、都会ではどちらも使えるが地方ではオンライン決済などが普及していないところもあり、転換点かという状況。

２．今後の課題

ディスカッションと結論の節でも書いたが、有意義な論に仕上げるには、データと理論・手法の不足が指摘を免れない。学部生として見ても、難点の多い出来と分かってしまうものであり、リサーチ不足が目立つ。今後は早期のリサーチと、専門家・研究者からのアドバイスに立脚したテーマの決定と方針の模索を心がけた学士論文の執筆へと、反省点を生かしたい。今回のゼミの早期には、フィンテックによる効率化が日本の銀行のビジネスをどのように効率化し、その結果競争状況はどうなっているのかというリサーチテーマを考えていたが、理論と知識の双方が不足しており断念した。よりよくかつ実行可能なリサーチテーマの決定をするためには、その分野の知識を十分に有していることが必要不可欠であると思い知らされた経験となった。しかし、パリシテ大学との交流会での発表は、比較的上手く行えたと感じる。内容の精査と要約、プレゼンテーションスライドの視覚的効果を考えた構成は功を奏したと考えている。よい面とわるい面の双方をふまえて、今後の研究へと生かしていきたい。

Japanese-German Comparison of Regional Cities

Harumi Tanikawa

Why are Germany's regional cities so active?
What are the differences with Japan?
Proposal of a compact city policy as a solution

1. Introduction

The decline of regional cities is a common problem in developed countries, including Japan and Europe. In Japan, urbanization progressed across the country during the post-war period of rapid development. Recently, the population has been concentrated in the big cities, and the decline of regional cities has become evident. However, in Germany, some regional cities are flourishing. Therefore, I'll suggest a way to activate regional cities in Japan while referring to the German example.

Firstly, I will give you three premises that my presentation is based on. Then, I will compare the current situation regarding regional cities in Japan and Germany. At the end, I will suggest a Japanese-style densification policy.

2. Three Premises

The first one concerns the differences stemming from the particular histories of the Japanese and German systems of local self-government. German regional cities are typically self-standing. This is because many cities have been granted self-government by the central government since the Middle Ages. In Japan on the other hand, a top-down system of central government and parliaments is in place. However, this system was installed about 200 years ago, and before that, regions had a certain degree of autonomy around their castles. You can find a common point here. In addition, the objective of this presentation is not to introduce the exact same policy, but rather an improved policy suited to Japan.

The second premise is the definition of urbanization. It is a quantitative process that occurs because of young people moving to find jobs. It means the development of modern industry and the spread of capitalism.

The last one is my definition of regional cities in this presentation. I define them as "cities with a population of around 100,000 in regions excluding the three largest metropolitan areas (Tokyo, Osaka, Nagoya)".

3. Japanese Regional Cities

Japanese regional cities are now reaching their limits. Specifically, they are limits of urbanization and industrialization, based on the expansion of population and economic activity promoted during the post-war development period. The centralization of population and power in Tokyo is currently still ongoing, and this is concurrent with diminishing communities in rural areas. Moreover, Japan's birthrate and aging society are further intensifying this trend. The decline of regional cities causes loss of uniqueness and identity of the respective areas. As a result, it leads to further population decline, financial difficulties and a decrease in the quality of provided services. There are three main challenges facing regional cities. They are the decline of city centers and suburbanization, as well as the decrease of population and financial difficulties.

4. Current Policies in Japan

To solve these challenges, some policies are being discussed in Japan. One of them is called "Overcoming Population Decline and Vitalizing the Local Economy in Japan". It includes promotion of rural migration, efforts to increase the appeal of local universities, creation of local industries, creation of connected minds and hometown tax. This policy was revised in 2020 due to the impact of COVID-19 and the further development of an information-intensive society. In line with the spread of remote work, people were encouraged to move and settle in local areas. However, the situation has not improved.

5. German Regional Cities

As I told you, local autonomy has taken root in Germany. Additionally, there were many small states, principalities and autonomous cities until the 19th century. A federal system is still in place today and each region has its own characteristics. Company headquarters can be found in regional cities.

Thus, the word "social" is important in Germany. This word means improvement of the standard of living and promoting equal solidarity of citizens. While in Japan, the word "welfare" is frequently used, this is regarded as action from above by the administration and is therefore more passive. Local politics are communalized and citizens actively participate in them. Now, let me refer to the city of Erlangen as an example of a local city. The city has a population of about 100,000 and is 443 km from the capital Berlin. It has three main features: "Understanding from a bird's eye view", "An axis and overall optimum" and "Value update".

The first is "Understanding from a bird's eye view". A wall surrounding the city objectively defines

its boundary. A common understanding emerges that the concept of 'citizens' means those inside the wall. In addition, it is also important that citizens have access to detailed city statistics and historical archives. Due to these factors, German citizens are more interested in their own regions than those of Japan. These statistics also encourage competition among cities.

The second is "Axis and overall optimum". The city center exists as the absolute axis of the Erlangen city and local authorities try to optimize the overall city on this basis. In detail, the city center is regarded as an axis that is a multifunctional space with many facilities, while transport infrastructure is developed to improve access to the axis.

The third is" Values update". The value of a city is created and judged by its citizens. There are many criteria including not only hard factors such as infrastructure, but also soft factors such as freedom, equality, solidarity and equity. Citizens organize associations and take action to update them. These associations are called "*verein*". They are not groups for the purpose of private gain and operate without fees in principle. Citizens are willing to donate their time and skills.

6. Industrial Clusters

Next, I'll talk about industrial clusters. Industrial clusters are strong concentrations of related industries in one location. They consist of companies, suppliers, service providers, educational and research institutions that support one another. As I mentioned, Germany maintains decentralization of power. Because of that, industrial clusters are developing in each city and their number is several hundred. In Erlangen, there is a cluster in the medical sector. Universities, companies and the government work together inside the city to increase the attractiveness of "Erlangen city". Industrial clusters also exist in Japan, but the number is only 19 and they cover large areas. They should be divided and focused to promote more concentration.

7. Conclusion

In conclusion, I suggest a compact city policy as a way to activate regional cities in Japan. More specifically, local government gathers infrastructure by using empty shops in the city center. It provides subsidies to real estate agents and agents rent out their property at a discount to ease the financial burden. In addition, it is important to encourage the making of groups similar to verein in Germany. Citizens become aware that they are members of the city by rebuilding communities lost to urbanization. This policy needs two elements. One is the mentality of citizens. Active action by residents is required. Another is the building of a local identity. The way to achieve it is to improve access to various kinds

of information such as statistics and historical archives and to participate in regional policies. Finally, there are two problems in this policy. The first one is the inequalities between people who live in the center and those who don't. This can be solved by giving benefits to suburban citizens. Second is the "support for local identity". One way is to continue transmitting the appeal of a locality to outsiders in order to boost its attractiveness. Another way is to bring in small businesses and various kinds of support for business start-ups.

References

1. 伊藤繁「都市人口と都市システム　戦前期の日本」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004、27－58 ページ
2. 稲雄次「日本のコンパクトシティ」『総合政策論集』第 8 巻第 1 号、2009 年、65－71 ページ
3. 小川長「地域活性化と地方創生」『尾道市立大学経済情報論集』16（2）、尾道市立大学経済情報学部、2016 年，17－37 ページ
4. 奥田道大「都市化と地域集団の問題　東京都―近郊都市における事例を通じて」『社会学概論』9 巻 3 号、1959 年、81－92 ページ
5. 海道清信『コンパクトシティの計画とデザイン』学芸出版社、2007 年
6. 加来祥男「第 1 次世界大戦期ドイツの救貧制度」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、183－218 ページ
7. 北住炯一『近代ドイツ官僚国家と自治：社会国家への道』成文堂、1990 年
8. ゲルハルト・ブリン著辻英史訳「ドイツの都市システムにおける首都ベルリン」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、59－84 ページ
9. ゲロルト・アンブロジウス著辻英史訳「ドイツの自治体企業　さまざまな方法論的アプローチにみるその発展理由」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、219－246 ページ
10. 芝村篤樹「関一の都市政策」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、85－120 ページ
11. 鈴木浩『日本版コンパクトシティ　地域循環型都市の構築』学陽書房、2007 年
12. 高松平藏『ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか：質を高めるメカニズム』学

芸出版社、2016
13. 中村良平、清水千弘「スプロール化と中心市街地の衰退　ー大規模店舗の立地規制と商業施設投資リスクー」『CSIS Discussion Paper』、2011 年
14. 野嶋慎二、松本清悟「まちづくり市民組織の発足と展開のプロセスに関する研究　―長浜市中心市街地の事例―」『都市計画論文集』、2001 年、7－12 ページ
15. 萩野寛雄「「日本型収益事業」の形成過程　～日本競馬事業史を通じて～」第二章「収益事業（広義）」の成立過程、2004 年、46－61 ページ
16. 箸本健二「地方都市における中心市街地空洞化と低利用不動産問題」『経済地理学年報』第 62 巻、2016 年、121－129 ページ
17. 馬場哲「第二帝政期ドイツの上級市長　F・アディケスの都市政策と政策思想」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、121－154 ページ
18. 福田敏浩「社会的市場経済の原像　―ドイツ経済政策の思想的源流―」『彦根論叢』第 320 号、1999，1－22 ページ
19. 武者忠彦「地方都市のまちづくりとガバナンス」『地理科学』62（3）、地理科学学会、2007 年、147－160 ページ
20. 持田信樹「都市材行政システムの受容と変容　特別市制問題の視角から」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、155－182 ページ
21. ユルゲン・ロイレッケ著辻英史訳「都市化から都市社会化へ　ドイツにおける近代「社会都市」の成立と発展」今井勝人・馬場哲編『都市化の比較史　日本とドイツ』日本経済評論社、2004 年、3－36 ページ
22. 横堀あき「ドイツ「地方自治」保障に関する一考察：国家権限画定のための「本旨」解釈に向けて」、2020 年
23. 和田重司『資本主義観の経済思想史』中央大学出版部、2010 年
24. Lance Freeman, The Effects of Sprawl on Neighborhood Social Ties: An Explanatory Analysis, *Journal of the American Planning Association volume 67,* 2001, https://doi.org/10.1080/01944360108976356
25. Liyin Shen, Chenyang Shuai, Liudan Jiao, Yongtao Tan, Xiangnan Song, A Global Perspective on the Sustainable Performance of Urbanization, *Urban Resilience and Urban Sustainability: From Research to Practice,* 2016, https://doi.org/10.3390/su8080783
26. Nadja Kabisch, Dagmar Haase and Annegret Haase, Evolving Reurbanisation? Spatio-temporal Dynamics as Exemplified by the East German City of Leipzig, *View all authors and affiliations*

Volume 47 Issue 5, April 2009, https://doi.org/10.1177/0042098009353072

27. Robert Knippschild, Constanze Zöllter, Urban Regeneration between Cultural Heritage Preservation and Revitalization: Experiences with a Decision Support Tool in Eastern Germany, May,2021, https://doi.org/10.3390/land10060547
28. Simon Elias Bibri, John Krogstie, Mattias Kärrholm, Compact city planning and development: Emerging practices and strategies for achieving the goals of sustainability, Developments, *Built Environment, Volume4*, 2020, Compact city planning and development: Emerging practices and strategies for achieving the goals of sustainability - ScienceDirect

報告要旨

今回の交流授業では、日独間での地方都市の比較を研究テーマとして設定した。また、異なる要素の抽出にとどまらず、得られた視点から改善策を提案することを最終的な目的とした。まず、比較対象としてドイツを選んだことについて触れる。日本国内では大都市への集中社会の形成と、それに付随する地方都市の後退が大きな課題となっている。人口と経済活動の拡大を背景とした都市の拡大と工業の推進をはかる高度成長経済期の戦略の限界を体現したものと言い換えられる。一方でドイツでは分散型の社会が形成されており、地方都市の活動力は現代でも保たれている。また技術的なレベルも先進国であり近いことから、ドイツを対象に選択した。さらに本論ではエアランゲン市という人口が約 10 万人程度の都市に焦点を当て、3 つの視点からドイツ地方都市の特徴を整理した。

そこで、両者をインフラストラクチャー等のハード的観点、そして土地に根付く精神性等のソフト的観点を含む複数の観点から比較することにより、前者には不足しており後者が保有している要素を抽出した。また、地方都市の活性化には産官学の連携が必須である。なぜならば、産業と学生を公的機関がつなぐことで、人的資源の流出を防ぐ事にも大きな効果を発揮するからである。そこで、ドイツ国内に数百存在する産業クラスターと日本の現状を比較し、どのような産業施設の集中が都市の活性化につながることを示した。

最後に結論として、日本に不足している要素を地方都市に移植することにおいて効果を発揮すると考えられる「地方都市の中心部における高密度化政策」を提案した。生活インフラを徒歩圏内に集中させ、そのエリアを軸として都市の活性化を図るというものだ。こうした政策の実現により、衰退が進む地方都市の現状を改善し、国力の増強につながるだろう。

パリ・シテ大学討論報告

討論会の雰囲気

交流授業では、フランスの学生とグループになってお互いにプレゼン発表を行った。私の発表のあとに質疑応答を挟み、フランスの学生から発表があった。後にテーマについて雑談を交えたディスカッションを行った。後半は懇親会を行い、グループメンバーではない人とも交流を行い、今後の進路やお互いの文化、興味のあること、おすすめの観光先など幅広い内容で交流を行った。日本のことについて、私も知らないようなコアな話題を聞かれることもあり、外国人が何に興味を抱いているのかを肌で感じることができ興味深かった。

質疑応答

- 日本における地方都市のインフラ整備の状況を教えて欲しい。

  → 土地にもよるが、電車等公共交通機関が少なく、自家用車での移動が必要な都市も多い。

  ⇒ フランスでは、路面電車や地下鉄の延線をすすめており、地方都市においても中心部へのアクセスが改善されている。

- 全ての地方都市がそのような状況なのか

  → 進度に違いはあるが、抱える課題は共通である。特に農業離れの深刻化により、農村地域では動きが顕著である。

プレゼンについて

こちらからのプレゼンは、一方的なものになってしまったように感じる。導入部分をよりなじみやすい話題・例から本論に入ったり、途中にクイズのような質問を挟んだりすることでよりアカデミックな話題をわかりやすく伝えられるのではないかと感じた。8 分間の英語プレゼンという制約の中で、情報を詰め込みすぎた事が大きいと感じる。ある程度内容を省略し、ディスカッションの時間を多くとれたほうが、フランスの学生がより興味を持ちやすく、かつこちらも多くの知見を得られたのではないかと感じた。

課題について

今回は「エアランゲン市」という一つの都市に焦点を当て、日本の地方都市と比較を行ったが、他の都市についても情報を集めることが必要であった。指摘の中に、分散的な都市形態であるため印象が都市によって異なるというものがあった。そうであれば、他の都市における現状も分析し、ドイツ地方都市に共通する要素を抽出し直すことで、より日本でも活用可能な結果が得られたと考える。

また、交流授業ではなく阿發氏の講演会で得られた知見であるが、フランスでは他国で評価される政策をそのまま導入することが多くあると知った。導入後に合わない部分を修正するというものだ。本論では日本式の改善が必要であると述べたが、改革を推進するには遅れを取るというリスクもあると考えられる。

Sakagura Tourism

Yuka Maehara

What attempts can Japan take in order to attract more tourists and increase consumption in sakagura tourism?
Let's compare alcohol tourism in France and Japan.

1. Introduction

Have you ever heard of "sakagura" tourism in Japan, or wine tourism in France? These types of tourism consist of visiting *sake* breweries and wineries to enjoy sightseeing, alcohol tasting, and enjoying the culture.

In Japan, sakagura tourism has been recognized as effective in increasing consumption as part of the foreign travelers recovery strategy in the "Plan for the Promotion of a Tourism Nation" by the Japanese Tourism Agency.

In my presentation, I will discuss how sakagura tourism will be able to attract more tourists. First, as an introduction, I will talk about the current situation of sakagura tourism in Japan. Next, in the analysis part, I will compare Japan and France in four points by referring to prior research and comparing the differences between the sakagura tourism in Japan and the wine tourism in France, which attracts more tourists.

I will give a brief overview of the current state of Japanese *sake*, Japanese liquor and the sakagura tourism in Japan. *Sake* has been getting more attention with its exports going up in recent years since Japanese food, or *washoku*, has been classified as a UNESCO Intangible Cultural Heritage, and also due to the increasing number of foreign travelers to Japan. On the other hand, the term "sakagura tourism" was coined in 2012 and is still in its developing stage, not being fully recognized in the world or in Japan. In 2016, the "Japan Sakagura Tourism Promotion Council" was established and has been conducting various projects to promote sakagura tourism.

Next, in the discussion part, I would like to find out the problems Japan has via a comparison with France's winery regions, focusing on the ability to attract tourists, and think about how to increase the number of tourists. We will look at brewery density, tourism competitions, vineyards, and museums.

2. Brewery Density

According to one previous study, regions where many sakaguras are concentrated are more likely to develop as tourist destinations. Are there differences between Japan and France?

First, as basic knowledge, comparing the number of breweries, there is a significant difference. In Japan, there are about 1000-1500 sakaguras, compared to the 25,000-27,000 wineries or even more in France.

The study calculated how many sakaguras there were in each region and classified them into a "concentrated location type" and a "dispersed location type". It pointed out that most Japanese sakagura regions were the "dispersed location type", which makes it difficult for tourists to look around many places at the same time.

I have applied the calculation method the paper used to classify regions, to other brewery regions in France, with a few additions of Japanese regions. The results (Fig. 1) for the French winery regions' density seemed to be somewhere between the "concentrated location type" and the "dispersed location type". In fact, the average figure of Japan's result (number colored in red) was 5.95, and France's was 5.97, which are quite similar. Therefore, I concluded that density is not necessarily the biggest problem Japan has to solve.

	Fushimi	Nada	Saijo			
Concentrat-ed region	20 in 1.53 ㎢ →13	25 in 5.4 ㎢ →4.6	7 in 0.2 ㎢ →35			
	Niigata	Nagaoka	Harima	Kashima	Kashima + Ureshino	Kanagawa
Dispersed region	14 in 388 ㎢ →0.03	17 in 265 ㎢ →0.06	28 in 868 ㎢ →0.03	5 in 9.30 ㎢ →0.53	8 in 34.14 ㎢ →0.23	13 in 225 ㎢ →0.05
	Champagne	Bourgogne	Bordeaux			
France	370 in 342 ㎢ →1.08	3504 in 308 ㎢ →11.38	6000 in 1100 ㎢ →5.45			

Fig. 1 *Calculated results of the number of sakagura or wineries per area*

3. Tourist Competitions

In "dispersed location type" regions, it is better to cooperate and conduct tourism as a whole region.

Thus, organizations to bring all sakaguras together will be needed. In this part, I will introduce a measure of what those organizations should do, referring to another paper referring to the French wine tourism organization in its earlier stage. In the paper, it was stated that the lack of evaluation of wine tourism seemed to lie in the failure of public sector organizations or wine professions to recognize the existence and importance of wine tourism.

Therefore I looked for wine tourism competitions, and found some such as ”Le Trophée de l’Œnotourisme”, ”Wine Travel Awards”, and “The Best of Wine Tourism Awards”. However, in Japan, although there is a ranking of sakaguras based on the results of several *sake* contests, it only evaluates the *sake* itself, not the tourism.

Holding a contest would be useful to raise awareness of the importance of sakagura tourism among public organizations and people in the *sake* industry, and to motivate sakaguras as well. It has been pointed out that only about half of all *sake* breweries in Japan currently offer tours, so holding a contest in Japan would have a significant impact on the ability to attract visitors, as it could serve as a catalyst for such breweries to begin a tourism campaign.

4. Vineyards, Rice Fields

When we think of winery tours, the sight of vast vineyards surrounding a winery comes to mind, but do *sake* breweries offer tours of rice fields?

In France, the concept of “terroir,” is used to describe wine, and each region has its own unique flavor. Also, it is common for wineries to have their own vineyards in the surrounding area. These vineyards have become an important tourism resource for wine tourism as it plays an important role in determining the quality of wine and helps understand the background of wines. The fact that some vineyards have been registered as World Heritage Sites by UNESCO also spurred this trend.

However, few sakaguras in Japan grow their own rice, the raw material of *sake* which corresponds to grapes for wine, and most breweries purchase rice grown by other farmers, which is not necessarily grown in neighboring regions.

This is due to the enactment of the Food Control Law (1942) during the postwar period when rice was in short supply. Until the law was repealed in 1995, *sake* breweries were not allowed to grow rice on their own, which is why only a few breweries grow their own rice.

In recent years, however, the number of *sake* breweries contracting directly with farmers in close areas or growing their own rice is increasing. As a conclusion, since wineries in France have become a major tourist attraction, it would be a good way for Japan to start considering rice fields as viable tourist

destinations, as it will help people understand and enjoy the story of *sake* brewing. We should provide support for sakaguras to continue the trend for them to grow rice by themselves, and we can expect an increase in tourists by making sakaguras aware of the importance of such rice fields as a tourism resource.

5. Sake Museums

Lastly, I would like to suggest an idea which might attract attention to *sake* and tourism, namely establishing more *sake* museums. Although information of the techniques and history of each individual brewery or winery is often done at the brewery itself, museums can convey the comprehensive history and environment of an entire region or country.

In France, there are museums such as La Cité du Vin in Bordeaux, Museé du Vin in Paris, and Cité Internationale de la Gastronomie et du Vin in Bourgogne, while in Japan, there are the *Sake* Information Center in Tokyo, and the *Sake* Museum in Hyogo. Looking at the photos of museums in France and in Japan, we can see that the scale is quite different, and judging from the fact that museums in France offer tasting of wines from all over the world and display videos using cutting-edge technologies, Japanese museums seem to be inferior.

In conclusion, by creating a museum with such attractive contents that even those who are not interested in *sake* would want to visit, and introducing the story of this beverage's making, I believe that the number of tourists could be boosted through an increased awareness and knowledge about sake brewing.

6. Summary

As a summary, for Japanese sakagura tourism to attract more tourists, although it is possible to attract tourists even in a remote region, it is important for the region to work as a whole by creating an organization, and for the sakaguras and related organizations to be motivated, tourism contests would be effective. Also, using rice fields as a tourism resource will attract more tourists as it helps understand and feel the background of the *sake* making process. Lastly, establishing a *sake* museum with cutting edge technologies or tasting areas will be a good way to convey brewing stories, and for more people to get interested in sakagura tourism.

References

加古敏之「日本における食糧管理制度の展開と米流通」i-DCR 国際食糧問題研究所，2006 年 http://worldfood.apionet.or.jp/kako.pdf

観光庁「観光立国推進基本計画」，2023 年 https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/810001005.pdf

公益社団法人　日本観光復興協会「協議会案内」 https://www.nihon-kankou.or.jp/home/sakagura/about_council/

公益社団法人　白鹿記念酒造博物館「酒ミュージアムについて」https://sake-museum.jp/about/

五嶋俊彦「酒蔵ツーリズムの成功事例—播磨型酒蔵ツーリズムを全国へ広げるには—」『大阪観光大学紀要』20 号、p.28-40，2020 年 5 月 https://tourism.repo.nii.ac.jp/record/309/files/No20gototoshihiko.pdf

澤村明「日本におけるワインツーリズムの研究の展望と課題および酒ツーリズムについて」『新潟大学　経済論集』第 106 号、p.51-57、2018 年 https://niigata-u.repo.nii.ac.jp/record/33463/files/106_51-58.pdf

財務省貿易統計「最近の日本産酒類輸出動向について」，2023 年 https://www.nta.go.jp/taxes/sake/yushutsu/yushutsu_tokei/pdf/0021010-203.pdf

ジェイアール東日本企画「令和 2 年度「酒蔵ツーリズム推進に係るモデル事例構築のための調査業務」報告書」，2021 年 https://www.nta.go.jp/taxes/sake/boshujoho/pdf/0021005-079_01.pdf

JNTO「年別訪日外客数の推移」日本の観光統計データ，2025 年 https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--transition

Bordeaux，“シテ・デュ・ヴァン” https://jp.bordeaux-tourisme.com/miyushiamu/shiteteyuuan

Jetske Van Westering &Emmanuelle Niel，“The Organization of Wine Tourism in France—The Involvement of the French Public Sector—”．Journal of Travel & Tourism Marketing，p.35－47，2003．https://www-tandfonline-com.hit-u.idm.oclc.org/doi/abs/10.1300/J073v14n03_02

Luis Vicente Elías Pastor，“Vineyard Landscapes and Wine Museums as Wine Tourism Resources”. *SUSTAINABLE AND INNOVATIVE WINE TOURISM Success models from all around the world* Chapter4，cajamar CAJA RURAL, 2021. https://www.rku.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/3a16116f6c4785da2ca819a8ddf0ac36.pdf

報告要旨

近年注目を集めている観光分野として酒蔵ツーリズムがあり、本レポートではフランスのワインツーリズムとの比較を通して今後の日本の課題についての考察を行った。比較観点の一つ目が土地あたりの酒蔵の数＝密度、二つ目がコンテスト、三つ目がブドウ畑、四つ目が博物館である。結論として日本では今後、日本酒関係者や酒蔵および観光客からの注目を集めるため酒蔵ツーリズムを開催し、ワインツーリズムで人気のブドウ畑と同じく田んぼをツアーの一部とすること、そして歴史的背景や技術を示し興味を持つきっかけとなりうる博物館の建設を提案した。

パリ・シテ大学討論会報告

1. ディスカッションについて

- なぜこのトピックを選んだのか。
  - 元々観光に興味があり、テーマにふさわしい分野を探していたところ、政府の文書等でも度々酒蔵ツーリズムが紹介されており，注目を集めているトピックであり興味深い調査ができるであろうと判断したため。

- 日本酒あるいはワインをよく飲むか。
  - ワインはあまり飲まないが、このプレゼンを作成する間に興味を持ったこともあり、日本酒は飲む。

- 酒蔵に行ったことはあるか。
  - ある。（写真を見せる）

- フランスの和食についてどう思うか。
  - 和食レストランには入っていないが、スーパーでみた寿司に関して言うと、見た目はそこまで変わらないもののネタがサーモン、あとは巻き寿司ばかりであったように思う。そして高い。

2. 今後の課題

終了後質問があまり出てこなかったので、興味を持ってもらえなかった可能性が高い。反応を見ながらプレゼンするべきであった。テーマとしては興味を引くものだと思っていたので、議論が活発でなかった原因を考えてみた。

原因: 普段なじみのない話題である上、基本情報が少なく、前提知識がなかったため関心を持ってもらうことができなかった。よく知らない話題に関する、学術的な内容では理解が進まなかった。議論に使うことのできる時間が少なく質問を考える雰囲気でなかった。控えめな性格をもっていた、あるいは私たちに合わせて控えめにしていたことなどが考えられる。

改善点：プレゼンはわかりやすいようストーリー性のあるものにできるとよい。さらに自ら議論を活発にするべく、想定される質問を考えておき、質問が出なかった場合にこういうことは気にならないのか、と尋ねてみても良いし、自分が聞きたいことについて、いくつか質問を用意していくべきである。また、事前に同じような形態（詳しくない数人にパソコン画面見せながら）で発表する機会を設けるとイメージが湧いて良い。

ただ、あくまで一年間かけて自分が作り上げたものを発表する機会としての交流授業であったので、その点では問題ない。また、折り紙で作ったくす玉をプレゼントして趣味の話題でひとしきり盛り上がり良い交流になった。自分がどういう人物であるか端的に示せるプレゼントを用意することは交流を深めるために役立つかもしれない。

The Importance of Changing the Japan-US SOFA

Ken Yatsuhashi

My presentation discussed the issues surrounding the Japan-US Status of Forces Agreement, by comparing it to that between Nato and Germany and focusing on differences in criminal jurisdiction and transparency.

1. Introduction

My presentation is about the importance of re-constructing the Status of Forces Agreement between Japan and the US, which is called "SOFA" for short and which I will compare with the North Atlantic Treaty Organization, or the so-called NATO, which includes Germany. Comparing these two SOFAs can be beneficial in rethinking the Japan-U.S. SOFA because Japan and Germany were both Axis nations, which lost WWII.

By the way, as you know there are some exceptions in which police powers can be limited in a particular country, especially when it comes to foreign ambassadors, national congressmen and so on. But did you know that foreign military forces also receive similar privileges?

2. What is a SOFA?

A SOFA is a treaty between or among nations, divided between countries that send an army to another country and countries that accept such foreign armies. A SOFA will determine the way of sending a country's military facilities and to what districts, including military bases in the accepting country, and will decide the legal status of stationed troops, civilians in the military, and their families. Therefore, a SOFA will be made when one country needs to move to and stay in another country. The content of a SOFA will be different according to the political situation.

3. Concise History of Okinawa after WWII

Before comparing the SOFA between Japan and the US and that between NATO and Germany (whose correct name is "The Supplemental Status of NATO Forces in Germany"), I'd like to tell you more about the background of Japan after WWII.

On September 2, 1945, Japan signed a surrender document. By 1951, Japan had recovered its sovereignty on the main islands including Hokkaido, Honshu, Shikoku and Kyushu, by signing the San

Francisco peace treaty. However, Okinawa was still under the command of the US until 1972. Even after its return to Japan, 25,000 American troops are still present, and 75% of America's facilities and districts in Japan are in Okinawa. Why? One reason is Okinawa's strategic strength as a military base. Look at this map and the circle showing the missile range. As you know, Okinawa can target lots of important cities including Beijing, Pyongyang, and Tokyo. But the main reason is the compensation for reducing the number of bases on the mainland.

4. Comparing the Two SOFAs' Criminal Jurisdictions

So, let's move on to comparing the two SOFAs. Looking at the Japan-America SOFA in terms of criminal jurisdiction, which means how people related to military forces will be treated when they commit a crime, the text is the same as NATO's SOFA. Both parties, the sending and the receiving state, can execute criminal jurisdiction, except in two cases where the receiving state has the primary right, which I will explain later.

5. Disturbed Operation

However, the procedure decided in the SOFA has been disturbed by a secret agreement run by the Japan-U.S. Joint Committee, established in Article 25 of the Japan-U.S. SOFA.

For example, in Article 17, Paragraph 10 of the SOFA, it is written that "Outside the aforementioned facilities and areas, the said military police shall be used only in coordination with the authorities of Japan." However, in the settlement document of the Joint Committee, it's written that the "Authorities of Japan shall not exercise the right to investigate, seize, or inspect the property of the United States Armed Forces, regardless of the location", and that "U.S. military police may enter residences outside of facilities and areas (including the residences of Japanese citizens) without a warrant when necessary to pursue and arrest U.S. military personnel, etc., caught in the act of committing a serious crime." What is written in the settlement document is totally different from what is decided in the SOFA.

This "disturbed operation" revealed itself when America's helicopter crashed into an Okinawan private university in 2004. Soon after the plane crashed, the US military personnel kept everyone out of the crash site, though it is obviously located "outside the aforementioned facilities and areas." The Japanese police and fire authorities were completely prohibited from entering the keep-out line, which contradicts Article 17, paragraph 10, (b).

6. The Reality of Criminal Jurisdiction Provisions

What we can learn from this fact is that at least in criminal jurisdiction, the text in Japan-U.S. SOFA is the same as that in NATO, but how it works is inferior to NATO because of the decision of the Joint Committee. Generally, Japan does not use criminal jurisdiction except in special cases, and if Japan asks, the U.S. will pay only "favorable consideration".

7. Supplemental Dtatus of NATO Forces in Germany (SSNFG)

So, let's move on to the Supplemental Status of NATO Forces in Germany, which I'll call SSNFG. Criminal jurisdiction in SSNFG is inferior to that in NATO's SOFA. Specifically, Germany totally gives up criminal jurisdiction. But she also has a right to withdraw her resignation in some cases of special importance. In this case, the German government can decide whether to withdraw or not.

8. Comparing the Two SOFAs

Comparing criminal jurisdiction in both SOFAs, we can notice that when it comes to the implementation itself, they have almost the same system. America can publish certificates of official duty under which a person can escape from the criminal jurisdiction of a receiving state. However, both Japan and Germany have the right to challenge its credibility. Therefore, from a criminal jurisdiction's point of view, Japan is not much worse off than Germany.

9. What is Problematic about the Japan-U.S. SOFA?

So, what is the problem? The agreement done in the Joint Committee hasn't passed through a democratic process, and because the Joint Committee's decisions don't require disclosure to citizens, they can be interpreted very broadly. What is more, the rate of abandoning executing criminal jurisdiction in Japan is far higher than that in other accepting nations. Therefore, not only the system itself, but also its operation contain room for further improvement.

We've seen how the Japan-U.S. SOFA is problematic, and I hope you agree that this SOFA should be modified. However, this ongoing SOFA hasn't been changed for eighty years. Why? I'll consider this question from the next slide.

10. Why Hasn't it Been Modified for 80 years?

The reason is, in short, because of the asymmetricity of the Japan-U.S. SOFA and the Treaty of Mutual Cooperation and Security between the United States and Japan. Even though in 2014, Shinzo

Abe, Prime Minister at the time, changed the interpretation of Article 9 of the Japanese Constitution which enabled Japan to exercise the right of collective self-defense, Japan does not have a duty imposed on it to participate in U.S. contingencies. Therefore, it's not foreseen that Japanese self-defense forces may be stationed in the U.S. In contrast, the relationship between Germany and the U.S. is symmetric, because in NATO's SOFA, a possible scenario where Germany's armed forces are stationed in America is obviously anticipated. Therefore, America became reluctant to give the U.S. army privileged rights that can also be utilized by the German military forces. However, the U.S. doesn't have a motive to restrict their privilege when it comes to the relationship between Japan and America. Moreover, there is another reason. Japan has another SOFA, in which it is Japan which is in a strong position regarding her army. Look at this table. This is the SOFA between Japan and Djibouti. Whether or not a member of the Japanese Self-Defense Forces is under the operation, they are completely exempted from liability.

11. How to Solve This Problem?

So, let's move on to the conclusion. In order to solve the problems surrounding the Japan-U.S. SOFA, there will be two solutions. The first one is to abandon the Treaty of Mutual Cooperation and Security between the United States and Japan, and the second one is to change the Japanese Constitution to make the relationship symmetric. This is also my proposed discussion theme.

For my individual opinion, the Treaty of Mutual Cooperation and Security between the United States and Japan should be maintained when considering national security. According to a major Japanese newspaper, even residents in Okinawa approve of the partnership between Japan and the U.S. although it is passive approval. If so, the solution is to modify the Japanese Constitution, and Articles 9 and 76 specifically, to create a symmetric relationship. I think we should change Article 9 and make the existence of a self-defense army and the execution of collective self-defense clearly legal. Furthermore, by changing Article 76, admitting the possibility of court-martial, Japan can make it possible that Japanese military forces be stationed in the U.S. Also, making it mandatory for Japan to participate in U.S. contingencies will also help solve the asymmetricity between the two countries. Therefore, modifying the Japanese Constitution will enable Japan to ask for the re-consideration of the Japan-U.S. SOFA.

References

1:信夫隆司、“ドイツ駐留NATO軍地位補足協定と刑事裁判権”、『政経研究』、56巻3号、2019年9月、153~193ページ

2:本間浩、“ドイツ駐留 NATO 軍地位補足協定に関する若干の考察-在日米軍地位協定をめぐる諸問題を考えるための手がかりとして”、『外国の立法：立法情報・翻訳・解説』、221号、2004年8月、1-20ページ

3:三宅孝之、“日米地位協定における刑事裁判権・管轄権-隷属的地位の日本と二重の矛盾集中の沖縄-”、『島大法學』、62巻3・4号、2019年2月、103-133ページ

4:日本弁護士連合会、“日米地位協定の改定を求めて-日弁連からの提言（新版）-”、『日本弁護士連合会』、2024年3月

5:吉次公介、『日米安保体制史』、岩波書店、岩波新書、2018年

6:岩本誠吾、“海外駐留の自衛隊に関する地位協定覚書-刑事裁判管轄権を中心に-”、『産大法学』、43巻3・4号、2010年2月、1140-1115ページ

7:信夫隆司、“NATO 軍地位協定の民事請求権-日米地位協定のルーツを訪ねて-”、『岩手県立大学総合政策学会 Working Papers Series』、159号、2022年8月、1-54ページ

8:麻生多聞、“在韓米軍地位協定の改定経緯-日本より有利な改定が実現された要因の分析”、『プライム』、43巻、2020年3月、37-51ページ

9:山本健太郎、“日米地位協定の刑事裁判権規定：米国人等の被疑者の身柄引渡しを中心に”、『調査と情報』、931号、2016年12月、巻頭1ページ、1-11ページ

10:信夫隆司、“在日米軍の刑事裁判権放棄に係る日米密約の原型”、『法学紀要』、57 巻、2015年、133-182ページ

11:信夫隆司、『米兵はなぜ裁かれないのか』、みすず書房、みすず書房、2021年

12:秋葉久、“地位協定に関する一考察:各種地位協定の比較から見た特徴”、『研究コラム』、2022年

13:日本弁護士連合会人権擁護委員会基地問題に関する調査研究特別部会、“ドイツ、イタリアの NATO 軍（米軍）基地調査報告書”、2018年10月

14:沖縄県、“他国地位協定調査報告書（欧州編）”、2019年4月

15:松浦一夫、“ドイツにおける外国軍隊の駐留に関する法制—1993年 NATO 軍地位協定・補足協定改定とその適用の国内法との関係を中心にして”、『防衛大学校紀要.社会科学分冊』、86巻、2003年3月、1-71ページ

16:Emre Saraoglu、“冷戦時代のドイツ及びその領域に於ける外国駐留軍の国際法上の地位の変遷—ドイツに於ける NATO 軍地位協定補足協定の改定を巡る政治的・法的要因の分析

への序論”、『社会システム研究』、7 号、2004 年 2 月、83-96 ページ
17:吉田敏浩、“密約：日米地位協定と米兵犯罪”、毎日新聞社、2010 年
18:“日本のサンクチュアリ（569）日米地位協定：終わりなき米国の「疑似占領」”、『選択』、48 巻 2 号、2022 年 2 月、110-113 ページ
19:森啓輔、“環境政策と地位協定-ドイツ連邦における米軍駐留と新たな水域環境汚染リスク-”、『国際安全保障』、47 巻 3 号、2022 年 3 月、76-91 ページ
20:島袋夏子、“PFAS と日米地位協定”、『ヒューマンライツ』、410 号、2022 年 5 月、15-18 ページ
21:松竹伸幸、『〈全条項分析〉日米地位協定の真実』、集英社新書、集英社、2021 年
22:伊勢崎賢治、布施祐仁、『主権なき平和国家：地位協定の国際比較からみる日本の姿』、集英社文庫（文庫増補版）、集英社、2021 年
23:McConnel, Ian Roberts,“A Re-Examination of the United States-Japan Status of Forces Agreement, *Boston College International and Comparative Law Review*, 29(1), 2006, pp. 165-174.
24:Rouse, Joseph H,“The exercise of Criminal Jurisdiction under the NATO Status of Forces Agreement”, *American Journal of International Law,* 51(1), 1957, pp. 29-62.
25:Dieter,“Are Foreign Military Personnel Exempt from International Criminal Jurisdiction under Status of Forces Agreements?”, *Journal of International Criminal Justice*, no. 1, 2003, pp. 651-670.
26:Flynn, Jonathan T, “No Need to Maximize: Reforming Foreign Criminal Jurisdiction Practice under the U.S.-Japan Status of Forces Agreement”, *Military Law Review,* vol. 212, 2012, pp. 1-69.
27:Pagano, Daniel L,“Criminal Jurisdiction of United States Forces in Europe”, *Pace Yearbook of International Law*, vol. 4, 1992, pp. 189-218.

報告要旨

本レポートでは、日米安全保障条約の下部条約として、日本に駐留する米軍及びその軍属の法的地位や在日米軍基地の取り扱い方について定めた日米地位協定について、ドイツと北大西洋条約機構間での地位協定と、主に刑事裁判権について比較しながらその問題点を指摘し改善の必要性を提起した。ドイツを選んだ理由は共に先の大戦での敗戦国であり、国内に米軍基地を複数抱える点で政治的状況が似通っていると考えたためである。

日米地位協定は NATO 軍地位協定の文章を引用しており、文言上日本における米軍の地位と NATO 加盟国における米軍の地位は概ね同一であるはずが、実際には日米地位協定に基づ

いて設立された日米合同委員会によって運用のあり方が大きく変化してしまっている。ドイツにおいてはドイツ駐留 NATO 軍地位補足協定によって NATO 軍地位協定と比べてドイツ側の権利が制限された内容になっている。実際の運用形態について比較すると日独での米軍に対する刑事裁判権の運用は類似していることが、沖縄の私立大学における米軍ヘリ墜落事件から判明した。文言と異なる運用形態にも関わらず地位協定の改正がなされない理由として日米関係の非対称性を挙げた。地位協定に関する問題を解決するためには、日米同盟の破棄又は日本国憲法 9 条及び 76 条の改正といった手段が考えられる。どちらも劇的な手段であり大きな副作用を伴う可能性が大きいため、それ以外の方法を模索することも必要である。

パリ・シテ大学討論会報告

ディスカッションについて

私は日米地位協定という堅いテーマを扱ったが、「日本が憲法 9 条を改正したらどう思うか」といった質問に対して忌憚ない意見を伺うことができた。フランスの大学生からすると軍備拡張への警戒感が強いのはドイツに対してであって、日本が 9 条を改正して正式に軍隊を保有するようになったとしても地理的遠さからそれほど警戒感を抱くことはない。また日本が置かれている地政学的状況からもある程度の軍拡はやむを得ないという意見を頂いた。フランスと日本は地理的に程遠く離れており、先の大戦でも日仏はそれぞれアメリカ、ドイツとの戦いほど、本土での交戦に至るような戦闘を行なっていないため、フランスは日本に対してトラウマを持たずに、むしろ無関心なのではないかと考えた。もっとも現在の欧州ではロシアが関心の的であることが間違いなく、そのため日本の動向に気を配る余裕がないのかもしれない。

今後の課題

今回のプレゼンでは日本とドイツの地位協定における刑事裁判権の扱いに関して扱ったが、日本側は沖縄大学ヘリ墜落事件という実例を挙げたのに対してドイツ側については制度の紹介にとどまり、制度紹介についても前提知識がない生徒に理解してもらえるものにできたか疑わしいところがあった。今後同じような機会があった際にはドイツ側も実際の判例を通じて実際の運用のあり方について詳細に研究し、また表現についてもプレゼンを受ける相手が初学者であることを十分に想定して作成したい。

B. Presenting with Students from the University of Duisburg-Essen and the Ruhr University Bochum

A Consideration of Migration in Japan

Koki Shibata, Ken Yatuhashi, Sora Takahashi,
Yuka Maehara, Seoyeon Kim, Harumi Tanikawa

Current situation in cultural aspects

What is migration from multiple perspectives?

---

1. Introduction

We are here to learn about Germany's immigrant culture and to compare it with Japan's. As many of you may have noticed, elections saw significant gains for Germany's conservative parties, including the CDU and AfD. This recent political shift highlights the heightened interest and concern around immigration issues in our society. Today, we'll explore these issues further by examining the narratives and policies shaping the immigrant experience in Japan and Germany. We look forward to our discussion.

Our presentation will cover several main topics: the myth of a single nation state in both countries, the educational policies designed to eliminate these myths, initiatives in education, efforts by local governments, issues of discrimination, and finally, integration along with future challenges. This overview sets the stage for a deeper exploration of how historical narratives and modern policies are shaping immigrant experiences.

2. The Myth of a Single Nation State in Japan

We examine the deeply rooted myth of a single nation state in Japan. This myth posits that the Japanese state is formed exclusively by ethnic Japanese who share a common language and culture. It even claims that the entire archipelago has historically been inhabited solely by a 'pure' Japanese bloodline. This perspective, which blends different recognitions, has long influenced how the nation views its own identity.

3. How It Spread and How It Worked

We explore how this myth was propagated. Since the Meiji Restoration, a strong sense of nationalism and pedigreeism bolstered the idea of a homogeneous Japanese ethnic group. This led to practices of excluding those who didn't fit the myth and, at times, even forcing different ethnic groups into assimilation. Additionally, during the post-war period of rapid economic growth, the inherent challenges of a merit-based system were often masked, allowing these exclusionary ideas to persist.

4. Educational Policies to Eliminate the Myths

This section highlights the shifts in educational policy that aimed to break away from the myth of long-standing ethnic homogeneity. Following Japan's period of economic growth in the late 1980s—and in the context of an aging society and low birthrate—labor shortages became critical. In response, Japan began to welcome low-wage workers, including many Nikkei immigrants from Brazil and other South American countries. Legal reforms in 1990, such as granting permanent resident visas to Nikkei, enabled these groups to integrate more fully. Educational reforms, exemplified by the 'Policies for the Formation of a Coexisting Society' in 2006, focused on strengthening Japanese language education for foreign children and establishing policies based on multicultural harmony. These efforts aim to provide flexible, individualized support that considers each child's background.

5. Initiatives in Education

In Japan, foreign children are accepted free of charge and are offered the same educational opportunities as Japanese students. Although there is no unique, systematic institution solely for immigrant education, local communities actively promote Japanese language education for foreigners. The underlying assumption is that these children will remain a permanent part of Japan's future society. However, challenges remain. For example, because education is treated as a 'benefit' rather than an 'obligation', there is a risk that some children might not attend school regularly. Additionally, while the focus is on integration, native languages and cultural backgrounds often receive little targeted support.

6. Initiatives of the Local Government

Local governments in Japan have also been proactive. They recognize the potential of migrants—not only as laborers but also as catalysts for community revitalization. For instance, Mimasaka City in Okayama Prefecture has implemented several initiatives: accepting technical intern trainees from Vietnam, signing mutual cooperation agreements with Vietnamese universities, and even establishing

graduate programs in partnership with the private sector. These steps are aimed at developing high-level human resources and are essential in addressing population decline, falling birthrates, and the challenges of an aging society.

7. Discrimination

Despite these positive initiatives, discrimination remains a significant hurdle. As Japan has increasingly opened its doors to immigrants to alleviate labor shortages—bolstered by systems such as technical intern trainees and skilled visas—social prejudices persist. Immigrants, although vital to the economy, often face stereotypes, such as the persistent notion that 'immigrants' equal 'crime', as portrayed in some media outlets. In workplaces, approximately 40% of migrant workers are undocumented and often endure low-wage jobs accompanied by harassment and unfair treatment. In the housing market, high rates of refusal for foreign residents persist, fueled by fears of 'trouble.' Moreover, in educational settings, language and cultural differences can lead to social isolation, further complicating their integration into society.

8. Integration and Future Challenges

In the final section, we turn our attention to integration and the future challenges ahead. Various cities in Japan provide insightful case studies. For example, the 'Oizumi Carnival' in Gunma Prefecture celebrates Brazilian culture and highlights immigrant contributions, although the economic benefits do not always circulate within Japanese-run businesses. Similarly, 'Newroz' in Saitama, a Kurdish festival, shows that while cultural events foster a community spirit, discrimination can still trigger disruptive actions. In Tsurumi, Yokohama City, we see a fusion of South American and Okinawan cuisines, symbolizing cultural coexistence. Yet, in Yokohama Chinatown, the assimilation of younger generations has led to a decline in native Chinese language use. These examples underscore the fact that while integration has advanced in some areas, ongoing challenges—such as discrimination and cultural erosion—remain critical issues to address in order to achieve a truly inclusive future.

References

1. 江原裕美「日本における外国人受け入れと子どもの教育-ブラジル人の場合を中心に」『帝京大学外国語外国文学論集』14、2008
2. 大重史郎「多文化共生時代における在留外国人向け教育行政のあり方に関する考察」

『関係性の教育学』第 19 巻, 第 1 号, pp.107-122、2020
3. 小熊英二『単一民族神話の起源：「日本人」の自画像の系譜』新曜社、1995
4. 園山大祐「欧州諸国の移民への教育支援から何を学ぶか」『都市とガバナンス/日本都市センター編』 35、37-49、2021
5. 徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子編「中山間地域における外国人技能実習生の受け入れ政策―岡山県美作市の事例から－」『地方初　外国人住民との地域づくり－多文化共生の現場から－』35－51、晃洋書房、2019
6. 新妻蘭「ドイツの移民児童生徒に対する教育について: シューレスヴィッヒ・ホルシュタイン州の事例から」『在外教育施設における指導実践記録 』39、 240-243、2016
7. 福山文子 「「移動する子どもたち」と日本語教育の推進に関する法律 －多文化教育政策の視点から見た可能性と課題－」 専修大学人文科学研究所、 人文科学年報 53、271-293 頁、2023
8. 丸山菜穂「日本人住民から見た外国人街の観光地化」『日本観光研究学会機関誌』第 26 巻, 第 2 号, pp.107-115、2015
9. 箕曲在弘「新大久保地区における在留外国人住民の多国籍化」『東洋大学社会学部紀要』第 53 巻, 第 2 号, pp.49-65、2018
10. 山下清海「日本における地域活性化におけるエスニック資源の活用要件」『地理空間』第 13 巻, 第 3 号, pp.253-269、2020
11. 文部科学省総合教育政策局 国際教育課　外国人児童生徒等教育の現状と課題、2021

報告要旨

文化的側面から見た移民について、我々のグループはまず日本における単一民族国家神話について紹介した。単一民族国家神話とは、現在存在するある国家の国民は人種的に均質であり、また歴史的にも一つの民族によって当該国家が形成されたと考える認識である。我々は日独双方に単一民族国家神話が根付いているのではないかと考えた。続いて日独においてその認識を改善するために行われている取り組みについて発表した。ドイツは労働力不足を背景に、国家として単一民族という認識を破棄し、移民との社会的統合を図っていった。日本は 1990 年の入国管理法改正や文部科学省が発出する施策を通じて文化的相互理解を推進した。そして日本において、社会的統合を達成するために行っている教育及び地方自治体の取り組みについて紹介した。例えば岡山県の美作市ではベトナムから技能実習生を積極的に受け入れており、これによって、地方都市で深刻な問題となりつつある過疎化の問題に取り組

んでいる。最後に、依然として続く移民への差別といった今後の課題について、群馬県大泉市で行われているサンバカーニバルのような、行事による社会統合を図っている例を挙げながら検討した。

プレゼンテーションに関して

今回の交流授業に参加したドイツの大学生の中には、実際に移民に興味を持っている人や、日本について学んでいる人が多かった。そのため、日本の大学生である自分たちとドイツの大学生が、お互いに学術論文などの数値や資料だけでは伝わりにくい実際の現状や雰囲気について質問したり、説明を聞いたりできたのは、とても有意義な時間だった。

特に、移民や難民に対する意識など、その国に住んでいる人でないと聞くことのできない話を自由にできたのは、とても満足だった。移民の比率が高いデュイスブルク大学に通う学生から、実際の都市の現状や移民に対する意識、犯罪発生率などの情報を直接聞けたのは、非常に貴重な経験だった。

授業は、大勢の人が同じ教室で意見を交換する形式で進められた。そのため、知識が深い人が回答し、多くの情報を得ることができた。ただ、一部の人が発言する機会が多くなる傾向があり、また教室が広く人数も多かったため、声が聞こえにくい場面もあった。次回、同じような交流授業を行う場合は、少人数グループで話し合う方式を試してみるのも良いかもしれない。

また、授業以外にも、学食での時間や授業前のアイスブレイキングタイムなどを利用して、それぞれの興味がある分野について情報交換をする機会も多く、とても満足だった。実際にドイツの大学生と、同じ大学生として多様な話題について意見交換ができたことは、大きな収穫になった。

役割分担を事前に行っておいたことで、準備期間は短かったものの資料・発表ともにまとまったものになり、グループプレゼンとして一貫性のあるわかりやすいものになったように感じる。今回参加していた現地の学生（ボーフム大学・デュイスブルク大学）は移民に関して学んでいる学生であったこともあり、頷く等のリアクションを取りつつ我々の発表に興味を示してくれたように思われた。加えて、各自の調べた事を短くまとめる必要があったために専門的な内容が伝わるかが懸念であったが、そういった点も特に問題なく進行出来たように感じた。一方で、プレゼン資料・発表ともに情報の提示を中心としたものであり、我々の考察が不足していたと考える。我々の主張を明確にした上で、議論する点を明示する事で、より後の質疑応答時間における議論が発展したのではないだろうか。

The Macroeconomic Effects of Migration to Japan

Into Kosuke, Taguhi Soichiro,
Sakata Ayaka, Ishida Shuji, Sakakibara Masaki

The number of migrants to Japan is still not as huge as that of other countries, but it is increasing more and more nowadays. We briefly introduce the migration environment and related recent phenomena for later discussion.

1. Education for Second- or Third-Generation Immigrants in Germany

Let's take a look at the history of language education for migrants. In the 1950s to 1970s, many migrants had come to Germany for labor power affected by German economic growth. Around the 1980s and 1990s, the notion had become common that migrants should be integrated in terms of both language and culture, and the government aimed to teach both German and the migrants' mother tongue. CEFR was introduced during that period to motivate people to learn multiple languages and to ensure the proficiency of a candidate's language when they are hired. However, it was not easy for migrants to learn both German and their mother tongue. After the 2000s, it became required for migrants to be able to speak German at a certain level. In some local governments, preschool German education is held and children can learn German before entering elementary school.

Although this policy seems helpful for children with an immigration background in choosing their career, the results contradict the expectations. Migrant children are less likely to get academic jobs than ones without an immigration background. According to Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung (DIW), the proportion of children with a Turkish background who go to a Gymnasium, where students aim to go to university, is about 11%, while the proportion of children without an immigration background is 34%. By interviewing second generation immigrants who succeeded in their careers, they found out some social factors which lead them to success. These included "understanding from their family for higher education", "an existence of a good mentor like a teacher", or "contacts to different environments by changes of school or movements." The existence of persons who support children and children's experience to know different environments seems important for their success.

2. Labor Market

Next, we take a broad look at problems in the immigrant labor markets in Japan and Germany, and briefly compare them.

To begin with, look at these two charts. The upper one shows the birth-rate line charts of Japan and Germany. They both show a downward trend. Particularly, the decrement of Japan's line is greatly accelerating. It implies that in the future it will be extremely difficult to maintain the labor market and the economy. The lower chart shows the rate of workers with a migration background versus other workers in 2023. In Germany, more than 25% of workers have a migration background. In contrast, in Japan there are only a few percent of such workers. These are the current environments through the different geographical, political and historical paths. We have to analyse the result and the additional effects caused by the migrant workforce carefully to make an accurate judgement, but many papers say it never gives any negative effects to the market on average. As the first graph suggests, the labor shortage is a big issue and we have to manage it, thus the immigrant workforce is one of the key points. To continue, we will introduce you to the major contrasts of challenges for immigrants to enter the labor market. There are three key factors: integration, employment stability, and social perception. In Japan, cultural and linguistic problems are serious barriers to integration. In Germany, language is also a big barrier. Plus, credentials recognition is a problem. When it comes to employment stability, the Japanese government made a skill training program which focuses on short-term job training. It is criticized for hindering immigrants from connecting to long-term employment and forcing them to live in a poor environment. As for Germany, access to more stable employment is said to be necessary. Finally, regarding social perception, immigrants in Japan suffer from limited recognition, bias and discrimination. This is also the case in Germany, as far as we know, and the discrimination and exclusion are increasing.

As we have said, the immigrant workforce is essential for the future. Thus, our countries have some points to tackle. In Japan, the integration support is immature and not enough, and pathways for long-term residency and workforth retention are required. Moreover, a safer workplace environment is needed as soon as possible. In Germany, people have gone through decades of tolerant immigration policy. Thus, the problem is whether they will continue the policy or not, on the political level. Plus, again as far as we know, discrimination and social integration have to be adapted to the new environment of a new era.

3. Immigration Systems in Japan and Germany

First, we will briefly address the history of the Immigration Control and Refugee Recognition Act. After World War II, this law was enforced.

Foreigners who do not have a status of residence based on some position or qualification could not have done simple labor work. But the new status of residence of "Specified Technical Skills" was added in 2019, and more and more foreigners who seek jobs in Jatan were accepted.

The 2021 amendment to the Immigration Control and Refugee Recognition Act was problematic from a human rights perspective because it could force illegal aliens to return. If foreigners have gone through the refugee process more than three times, they can be deported even during the refugee status process and those who refused deportation can be criminally punished.

However, in 2023, deportation will be suspended for those who have applied for refugee status three or more times, provided they submit documentation of probable cause.

As far as the German Immigration system. In order to achieve "integration," the Immigration Act came into effect in 2005, and the Residency Act replaced the previous Aliens Act. This simplified the rules for foreigners to stay and work in Germany, while at the same time clarifying the policy focus on integrating immigrants into German society.

A Blue Card was first introduced by the European Council in 2009. It gives non-European citizens the right to live and work in the European Union. But the number of Blue Card recipients has not increased as much as expected in Germany.

4. Immigrant Workers as Chefs in Japan

Immigration policies and foreign chefs have played a significant role in shaping the diverse culinary landscape of Japan.

In Japan, foreign chefs can obtain a work visa under the Immigration Control Act if they possess specialized culinary skills. In particular, "Indian cuisine" and "Chinese cuisine" are more likely to be recognized as requiring special skills. This recognition makes it relatively easier for chefs specializing in these cuisines to acquire a chef's visa.

Over the years, Japan has seen different waves of immigrant chefs, each introducing their own culinary traditions.

In the 1940s: Chinese and Korean immigrants were prominent, bringing ramen and dumplings to Japan. *From the 1980s to the 1990s*: Indians and Nepalese became more prevalent, contributing to the rise of curry culture in Japan. *Since the 1990s*: Turkish immigrants introduced kebab stands, which are

now a popular street food option.

The presence of immigrant chefs in Japan has significantly diversified the country's food culture. Foreign cuisines have not only been embraced by Japanese people but have also been adapted to local tastes, creating unique fusion dishes. As immigration continues, Japan's culinary scene will likely continue to evolve.

5. Are Immigrants Taking "Our" Jobs?

The acceptance of immigrant workers in Germany helps reduce labor shortages in certain jobs and regions, boosting economic activity. Immigrants from the EU have increased employment and lowered unemployment. Indeed, in Germany, the proportion of immigrants is relatively high in labor-intensive industries, such as food services and manufacturing (Isa, 2017). Although some fear that more immigrant workers could hurt unskilled workers by lowering wages or increasing unemployment, these effects may be temporary, and there is a study that suggests a positive long-term impact on GDP and government finances (Romp et al., 2025). Therefore, in a country like Japan, where the population is aging and the sustainability of the welfare system is in question, accepting immigrants can have a positive impact. Still, there is little clear evidence that local workers are losing jobs. Instead, immigrants may help fill labor shortages and support economic growth. Indeed, in industries with severe labor shortages, foreign workers are essential.

Overall, while immigrant workers may increase job competition at first, they likely benefit the economy in the long run. The effects vary by country, so continued research is important.

References

伊佐 紫「ドイツで増大する移民と経済への影響」『住友商事グローバルリサーチ』/ https://www.scgr.co.jp/report/survey/2017112829422/, 2017 年.

厚生労働省「令和 2 年版厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える－」 https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/index.html, 2020

独立行政法人　労働政策研究・研修機構　「移民２世の「成功」要因を詳細分析－社会統合をめざし、DIW が調査報告」国別労働トピック 2012 年 5 月 https://www.https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongokyoiku/138/0/138_43/_pdf/-char/jajil.go.jp/foreign/jihou/2012_5/german_01.html　(Accessed on 17 Deember 2024).

平高史也　「ドイツにおける移民の受け入れと言語教育－ドイツ語教育を中心として－」

『日本語教育　138 号　【特集】　多文化共生社会と日本語教育』2008 年 https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongokyoiku/138/0/138_43/_pdf/-char/ja (Accessed on 17 December, 2024).

Constant, Amelie F., and Ulf Rinne. "Labour market information for migrants and employers: the case of Germany." *Institute for the Study of Labor: Research Report 50* (2013): 1-30. Statistisches Bundesamt, https://www.destatis.de/EN/Themes/Society-Environment/Population/Births/Tables/birth-deaths.html

Romp, Ward, Roel Beetsma, Matthias Busse, and Martin Larch. "Some Intergenerational Arithmetic to Control Public Debt in the EU." *CESifo Working Paper* (No. 11669), 2025. https://www.cesifo.org/en/wp (Accessed on March 3, 2025).

報告要旨

1.　ドイツにおける移民２世３世の教育制度

1950 年代から 1970 年代にかけては、ドイツの高度経済成長により、多くの移民が労働力としてドイツに流入した。1980 年代から 1990 年代にかけて、移民がドイツ語と移民の母国語の両方を学べるようにするべきだという見方が浸透し、複言語主義を推進する施策として、CEFR(Common Europian Framework for Language, ヨーロッパ言語共通参照枠) が導入され、複数言語を学ぶことが奨励された。しかし、移民にとって両方の言語を学ぶことは容易ではなく、2000 年代になると、ドイツ内で複言語主義は弱まり、仕事に就くための一定のドイツ語レベルの基準が求められるようになった。ある自治体では、小学校に入る前に、移住の背景を持つ児童にドイツ語の教育を行う取り組みが行われている。

この政策は移住を背景に持つ子供にとって、将来のキャリアを築いていくうえで有効であるように思われるが、実際のところは期待に反する結果となっている。ドイツ経済研究所によると、大学進学を前提とした「ギムナジウム」で学ぶトルコ系の子どもは 11%強しかいないのに対して、移民の背景を持たない子どものその割合は 34%を占めていた。教育や職業の上で成功した移民二世にインタビューを行った結果、移民の子どもたちの成功につながる社会的要因がいくつか存在していることが明らかになった。例えば、「家族の高等教育の価値に対する理解」、「教師などのメンター（相談者）の存在」、「転校や転居による異なる環境との接触」などである。子供たちに理解を示し支援する人の存在や、異なる環境を知るという子供たちの経験が重要であると考えられる。

2.　労働市場

この章では、日本とドイツにおける移民労働市場の問題を比較した。まず、両国の出生率が低下していることをグラフによって示したが、どちらの国でも減少傾向である。特に日本の出生率の減少が急速で、これにより、将来的に労働市場と経済の維持が非常に困難になると考えられる。また、ドイツでは移民背景を持つ労働者が 25%以上を占める一方で、日本ではその割合が非常に少ないことが差である。移民労働者が市場に与える影響については多くの研究があるが、一般的には市場に対して悪影響を与えないとされている。

次に、移民労働者が労働市場に参加するための主な課題として、統合、雇用の安定性、社会的認識を挙げた。日本では文化的・言語的な問題が統合の障壁となっており、ドイツでも言語と資格認定が大きな問題である。雇用の安定性については、日本では短期的な技能実習制度という職業訓練が主に行われており、長期的な雇用への移行を妨げているという批判がある。また、ドイツでも安定した雇用へのアクセスが必要。社会的認識の面では、日本でもドイツでも移民に対する偏見や差別が存在し、その問題が深刻化している。

結論として、移民労働者は今後の労働市場にとって重要であり、日本とドイツの両国にはそれぞれ解決すべき課題がある。日本では統合支援が不十分であり、長期的な定住や職業の維持のための道筋が必要である。また、安全な労働環境の整備も急務。ドイツでは、長年の寛容な移民政策が続いてきたものの、今後その方針を継続するかどうかが政治的な課題となっており、また差別や排斥は増している点が問題となっている。

3.　日本とドイツの移民制度

まず、出入国管理及び難民認定法の歴史についてお話しします。第二次世界大戦後、この法律は施行された。

身分や地位に基づく在留資格を持たない外国人は、単純労働をすることができませんでした。しかし、2019 年に「特定技能」という新しい在留資格が追加され、日本で仕事を求める外国人の受け入れが増えた。

2021 年の出入国管理及び難民認定法の改正は、不法滞在の外国人を強制的に帰国させる可能性があり、人権の観点から問題があった。難民手続きを 3 回以上経た外国人は、難民認定中であっても強制送還が可能であり、強制送還を拒否した者は刑事罰を受けることができる。

しかし、2023 年には、難民認定を 3 回以上申請した者は、正当な理由があることを証明する書類を提出すれば、強制送還が停止されることになった。

次に、ドイツの移民制度について簡単に説明する。「統合」を実現するため、2005 年に移

民法が施行され、それまでの外国人法に代わって在留法が制定された。これにより、外国人がドイツに滞在し就労するための規則が簡素化され、同時に移民をドイツ社会に統合するという政策の重点が明確化された。

ブルーカードは 2009 年の欧州理事会で初めて導入された。ブルーカードは、欧州連合（EU）域内に居住し就労する権利を欧州市民以外に与えるものである。しかし、ブルーカードを取得する人の数は増えていない。

4.　移民がつくる食文化

この章では、日本における移民が食文化において、どのような影響をおよぼしてきたのかについてまとめました。日本の出入国管理法では、専門的な技術を持つ外国人シェフが就労ビザを取得しやすくなっています。特に、インド料理や中華料理は「特別な技術を要する料理」と認識されやすく、シェフビザの取得が比較的容易になっています。

そして日本では、時代ごとに、さまざまな移民が日本の食文化を形成してきました。1940 年代には中国人・韓国人がラーメンや餃子を広め、1980～1990 年代には、インド人・ネパール人によるカレーの普及があり、1990 年代以降、トルコ人によるケバブスタンドが登場しました。こうした移民の影響により、日本の食文化は多様化し、現地の味と融合しています。今後も移民の増加とともに、日本の食文化は進化し続けると考えられます。

デュースブルク・エッセン大学討論会報告

ディスカッションについて

・日本の現行法では、移民に対する教育カリキュラムは整備が不十分である。ドイツでは制度化が進み教育体制が整備されていると聞くが、現実にはどうか。（一橋学生）

1. ドイツでも 1970 年代には教育制度は整っておらず、移民の子は苦労していた。（ドイツ学生）
2. 一例だが、過去に小学校で働いていた時に、ドイツ語リテラシーが全くないトルコ移民の子が小学校に入学したことがあった。第二外国語としてのドイツ語教育が全くない状況での学校生活はとても大変で孤独そうであったと記憶している。（ドイツ教授）
3. 日本でも留学生を受け入れる制度に関しては充実しており、外国人学生を積極的に受け入れようという努力はなされているのではないか。（ドイツ学生）

・ドイツ国内での生活水準は、どのように言語に依存しているか。（一橋学生）

1. CEFR 基準で言うと、およそ C１で大学以上の教育機会を得られ、B２で職を得られ、B１ならば永久ビザ獲得が可能である。（ドイツ学生）

・島国であるという地理的要因により、日本はドイツと比較して移民の受け入れ制度が整っていない。日本で移民の存在を意識する瞬間はいつか。（ドイツ学生）

1. コンビニなどチェーン店労働者の多くがアジア系の外国人であることが最も意識される。（一橋学生）
2. 特に TV マスメディアによるニュースにおいて、移民が犯罪を犯したときなど、ネガティブな内容において「〇〇国の移民」という見出しで報道される機会が増えてきたと感じる。（一橋学生）
3. それ（上）はドイツにおいても同じような状況で、メディアがバイアスのかかった報道をしていると感じる。（ドイツ学生）

・日本では、永住権の獲得にはどのような障壁があるか。（ドイツ学生）

1. 日本で永住権を獲得するためには、日本に１０年以上居住していること、日本で就労資格を有してから５年以上経ていることの条件を満たしたうえで申請が可能とな

り、さらに審査基準には、素行が善良なこと、独立の生計を営むに足りる資産または技術を有すること、そのものの永住が日本国の利益に合すると認められること、身元保証人がいること、と細かく条件が定められている。移民や難民にとってこれらの条件を満たすことは難しく、期限を超えての違法滞在に代表される違法移民が増加する原因となっていると考えられる。（一橋学生）

今後の課題

・プレゼンを行った際のテーブルや席配置のままディスカッションを始めてしまったが、参加者全員の顔が見えるような形にすると、皆が参加しやすくなるだろう。

・移民問題について持っている知識が一橋学生の中でも偏りができてしまい、質問への回答をおおよそ同じ人が担当し負荷が大きくなってしまっていたため、事前にある程度知識の共有ができると良い。

・我々もドイツの学生も関心が高い事柄に関しては、積極的な議論が行われた。一方で、一つのトピックが長引くと時間内に話したいことをすべて話せるとは限らないので、どうしても気になる事柄については事前にまとめる、あるいは議論の初めの段階でまとめておくと段取りよく進めることができるだろう。

Chapter 3

our eleven days

～～～～～～旅程表～～～～～～

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	スケジュール
1	2月18日 （火）	東京（羽田）発 パリ着	０８：２５ １４：５５	ＪＬ０４５ 専用車 （ガイド付）	空路、直行便でパリへ 空港到着後、専用車でホテルへ移動 ＜パリ泊＞
2	2月19日 （水）	パリ	終日		①09:00～12:00　パリシテ大学交流会 ②16:00～17:30　野村フランス 自由行動　＜パリ泊＞
3	2月20日 （木）	パリ	終日		③10:00～11:30　Station F ④13:00～14:30　パリ日本文化会館 ⑤15:30～17:30　在フランス日本国大使館 自由行動　＜パリ泊＞
4	2月21日 （金）	パリ	終日		⑥10:00～11:00　V illage by CA ⑦14:00～16:00　児童福祉専門家　安發明子 氏セミナー 自由行動　＜パリ泊＞
5	2月22日 （土）	パリ	終日		終日自由行動 ヴェルサイユ宮殿 ＜パリ泊＞
6	2月23日 （日）	パリ北駅発 （途中乗継） デュイスブルグ着	午前 午後	専用車 （ガイド付） 高速列車	専用車でパリ北駅に移動 09:55パリ→15:45デュイスブルグ 移動（ケルン中央駅乗継） 2等車　ケルン大聖堂見学 自由行動 ＜デュイスブルグ泊＞
7	2月24日 （月）	デュイスブルグ	終日		⑧デュイスブルグ市市役所 小学校視察 移民街視察 ボーフム大学生との交流会など 自由行動　＜デュイスブルグ泊＞
8	2月25日 （火）	デュイスブルグ発 ﾌﾗﾝｸﾌﾙﾄ中央駅着	午後 午後	鉄道	12:07デュイスブルグ→13:48フランクフルト移動 2等車 自由行動　＜フランクフルト泊＞

9	2月26日 （水）	フランクフルト	終日		⑨マブチモーター企業視察　1400～ 自由行動　＜フランクフルト泊＞
10	2月27日 （木）	フランクフルト発	２０：０５	ＪＬ４０８	⑩09:30～11:30　Honda R&A Europe 11:30～12:30　食堂にて昼食 自由行動 集合時間：17：00 空路、東京へ　＜ 機中 泊＞
11	2月28日 （金）	東京（成田着）	１７：０５		到着後、解散

2/18(火)

羽田空港からシャルル・ド・ゴール空港へ

1 パリ紹介

⑴ 概要

フランスの首都パリは、様々な文化、芸術、豊かな歴史を持つ世界で最も名高い都市の一つである。人口約 210 万人、面積約 105 ㎢で、20 の地区から構成されている。比較的小規模な都市でありながら、エッフェル塔、ルーブル美術館、ノートルダム大聖堂、シャンゼリゼ通りなど、世界的に有名な観光スポットが数多くあり、世界で最も観光客が訪れる都市である。また、料理、ファッション、ライフスタイルに関しても流行の最先端を走っており、大きな魅力を抱えた都市といえるだろう。皆さんも一度はパリでの生活を夢見たことがあるのではないだろうか。

⑵ パリの都市計画

現地学生に伝えると否定されたが、街並みも人々も、果たして魅力的であった。問題は、おしゃれを追求しすぎるあまり、表示が見つからないことであった。空港に着いてトイレを探すと風景に溶け込むように示されているし、地下駅表示もなかなか見つからなかったりする。そんな洗練された印象のパリであったが、凱旋門の上から見る、放射状に伸びた道には特に目を見張った。名高いシャンゼリゼ通り(全長約 2km、幅 70m！) をはじめとして、計 12 本の広く、長い道路が放射状に伸びている。

この都市計画について少し調べてみた。「パリ改造」、これは、不衛生および人口過密により疫病が蔓延していた 19 世紀のパリで、ナポレオン三世時代のセーヌ県知事ジョルジュ・オスマンが行ったものである。彼が都市景観へのこだわりを持っていたことがパリの“おしゃれ”さにつながっていると言えよう。例えば、パリには有名な広場や公園、建築物が多くあり、地図を見ると度々それらが一本の道路でつながっていることが発見される。実際、有名な観光地から一直線上に歩いていくと耳慣れた広場や行園にたどり着き、その明快さや統一性に驚く、といったことが往々にして起こるのである。また、都市改造の際、道路だけでなくその沿道の土地も収用したことで建物の高さや材質、色を統一したことも街の美しい景観を生み出した要因となっている。パリで過

ごした五日間は美しい記憶として今後の人生でも思い出すことになるだろう。異国の都市で過ごす日々を楽しみに、海外での活躍を夢見ていこうと思う。

（前原優風）

凱旋門の上からの眺め

＊参考文献

一般社団法人　大都市政策研究機構「オスマンのパリ大改造」『「大都市政策の系譜」シリーズ 第１回』

https://imp.or.jp/wp-content/uploads/2021/10/special-1.pdf

~~~~コラム~~~~

歴史を感じさせる駅名たち

フランスの地下鉄駅名を眺めていると、日本とは異なり世界史に名を残す人物や出来事を冠したものが多く、歴史を身近に感じられます。たとえば写真にある“Franklin D. Roosevelt”は第二次世界大戦期のアメリカ大統領に由来し、“Voltaire”は18世紀フランスの啓蒙思想家にちなんで名付けられました。また“Robespierre”はフランス革命期の指導者ロベスピエールを指し、“Richelieu-Drouot”の“Richelieu”は三銃士でも知られる宰相リシュリュー枢機卿を想起させます。こうした人物名が駅に残されてい

るのは、都市の歴史や文化を顕彰するフランスらしい特徴といえます。日本でも駅名に由来がある例は多いですが、神社仏閣や地形由来のものが主流で、世界史レベルで有名な政治家や思想家の名はあまり見かけません。そのため、フランスを訪れると駅名ひとつとっても「これはどんな人だったのだろう」と興味が広がり、歴史への理解が深まります。地下鉄に乗りながら教科書で学んだ革命家や文豪の足跡を追体験できるのは、パリならではの魅力といえるでしょう。こうした駅名を入口に調べてみると、新たな歴史の発見や旅の楽しさがさらに増すに違いありません。　　（八ッ橋 賢）

～～～～コラム～～～～

サント・シャペルの個人的な見所

パリの観光名所といえば、エッフェル塔やルーヴル美術館、ノートルダム大聖堂などがまず思い浮かびますが、ぜひ「サント・シャペル」にも足を運んでほしいです。ノートルダム大聖堂のすぐ近く、シテ島に位置するこの小さな教会は、外観こそ控えめですが、内部に入ると一気に別世界へ引き込まれます。何より圧巻なのは、ステンドグラスの美しさ。高さ15mにも及ぶ巨大な窓一面に施されたステンドグラスは、まるで万華鏡のように色とりどりの光を放ち、教会内部を幻想的な空間へと変えています。私は午後に訪れたのですが、西日が差し込む時間帯だったため、青や赤、紫の光が床や壁に映り込み、本当に美しい光景が広がっていました。光の変化とともに雰囲気も変わるので、時間帯によって異なる表情を楽しめるのも魅力の一つです。また、この教会はルイ9世によって建てられたのですが、その目的が「キリストの茨の冠」を安置するためだったという点も興味深いです。美しい建築だけでなく、歴史的・宗教的な背景も持つ場所なので、歴史好きな人にとっても見ごたえがあります。サント・シャペルは、ルーヴル美術館やノートルダム大聖堂ほどの知名度はないかもしれませんが、その美しさは間違いなくパリ屈指です。個人的には、パリの教会の中でも「最も美しい空間」だと感じました！シテ島周辺を訪れた際には、ぜひ立ち寄ってみてください。特に午後の時間帯がおすすめです！　　（柴田 光輝）

2 交流授業（パリ・シテ大学）

パリ・シテ大学は、パリ・デカルト大学（パリ第５大学）とパリ・ディドロ大学（パリ第７大学）の２つの大学及びパリ地球物理研究所を統合して2019年に設立された国立大学で、それぞれの強みを活かして合併しました。パリ・シテ大学の特色として、フランスでは数が限られている東アジア研究の分野を総合大学として学士から博士課程まで設置しているというものがあります。加えて、パリ・シテ大学は医学やコンピュータサイエンスと連携した AI による診断システムなど、学際的なプロジェクトを奨励しています。さらに、フランス語コースやフランス文化の授業など、交換留学生に優しいプログラムも用意されています。また、異なるバックグラウンドを持つ学生との交流も盛んです。

パリ・シテ大学の日本語学科の学生たちとの交流は、パリ・シテ大学側の代表者による日本語での開会の挨拶より始まりました。そして一橋の学生一人に対してパリ側の学生が５人ほどつく小グループに分かれ、プレゼンの前にまずアイスブレイクを行いました。見えないボールをイメージし、爆弾ゲームのように相手の名前を呼びながら次々と渡していくゲームでした。このゲームを通して同じグループの人々の名前を自然と覚えられ、名前を呼ぶ事自体が躊躇なくできるようになりました。その後 30 分ほどのプレゼンと質疑応答を２回行いました。一橋の学生が発表するだけではなく、パリ側の学生たちもプレゼンテーマに即した日本語での調査発表を行ってくださいました。日本語の習熟度についてはかなりムラがあるようで、こなれた日本語を話す人もいれば初学者のように見受けられる人も混じっていました。その後懇親会に移り、パリ・シテ大学の学生から様々な演目を披露していただきました。フランスの文化に関するクイズやバレエに関する発表が日本語にて行われたほか、剣道から派生

したスポーツチャンバラの紹介、バイオリンやギター演奏などもしていただけました。最後に我々一橋の学生より、日本の世界的名曲である坂本九の「上を向いて歩こう」を合唱し、締めの言葉を述べてパリ・シテ大学との交流授業は終わりました。しかし、パリ・シテ大学の学生たちのご厚意によって大学学食に連れていってくださることとなり、大学の中庭のようなところで日本語英語を織り交ぜたランチをとることができました。

（八ッ橋 賢）

徒歩で向かう

道中のセーヌ川

キャンパスはこの先

交流授業の様子

3　野村フランス　視察

視察では、まず金利市場戦略担当(Rates Strategist)であるマゼ氏(Ms. Marine Mazet)による欧州の金融市場の状況についてのプレゼンが行われた。プレゼンでは、欧州経済の地位低下についてアメリカとの差異を示しつつ解説が行われ、欧州市場の現状や課題についての理解を深めることができた。その後、フランス拠点長である金澤啓樹氏に、野村フランスの業務内容や御自身の仕事内容について詳しく説明していただいた。彼の話の中で特に印象的だったのは、野村フランスのオフィスがもともとリーマン・ブラザーズのものであったという点だ。実際、現在の野村フランスの建物は、パリ市内の非常に恵まれた立地にある。エッフェル塔とセーヌ川の間近に位置し、オフィスの窓からは美しい景色を一望できる。金融業界のグローバル企業が集まるエリアに位置しており、駅の出口からも徒歩数秒。このように、交通の利便性も高く、国内外のクライアントとの円滑なビジネス展開において優れた環境が整っていることが伺えた。こうした立地の良さは、ビジネスの展開において重要な要素の一つであり、野村フランスが欧州市場でプレゼンスを維持し続けるうえでの強みとも言えるだろう。また、彼の主な業務は規制に違反していないかのチェックであり、特にフランスの金融当局や欧州連合の規制基準を遵守するための体制を整えることに重点を置いている。金融業界では規制環境の変化が激しく、新しいルールが頻繁に導入されるため、コンプライアンス部門の役割は極めて重要であると説明していた。また、企業の取引や投資戦略がこれらの規制の枠内で適切に行われているかを監視することで、企業の信頼性やリスク管理の強化に貢献しているという。こうした業務を通じて、欧州市場における厳格な金融規制の重要性を改めて実感することができた。お二方のプレゼンの後にそれぞれ行われた質疑応答では、ウクライナ情勢などの時事問題を踏まえ、欧州市場への影響について質問が寄せられた。特に、リスクが市場に与える影響や、それに対する各国の戦略について解説があり、欧州市場の不確実性に対する認識を深める機会となった。

野村フランスのビル前にて

今回の視察では、現地の社員の方々から直接話を聞くことで、野村フランスの業務内容や欧州市場の動向について多くの学びを得ることができた。特に、日本企業が欧州市場に進出する際の課題や成功のポイントについて、野村フランスの実際の事例を交えながら学ぶことができた点は非常に有意義であった。

（榊原将輝）

~~~~コラム~~~~

ルーブル美術館

元々フランスに行きたかった理由の一つとして中世ヨーロッパの美術が好きだったことがある。日本でも中世ヨーロッパにまつわる企画展があるとよく足を運んでいる。

余談ではあるが、私は美術館に行くと全てを回るのに時間がかかってしまう。友人と行っても置いて行かれてしまうことが多い。何をそんなに見ているのかと聞かれても正直わからない。隣の説明を読んだり、額縁が素敵だなと思ったり、絵画の登場人物に思いを馳せたりしてぼーっとしていると時間が過ぎてしまうのだ。これはおそらく私が美術を「わからない」ものだと認識しているからだと思う。小さい頃からどちらかといえば音楽の方が身近で、高校の時の芸術選択では音楽を選択してきた。そのため、美術に関しては大学生になるまでそこまでの興味すら持ってこなかった。それを埋めるために美術館では時間をかけてしまうのかもしれない。

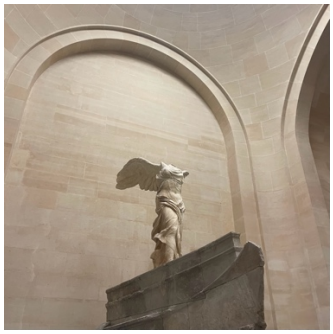
本題に戻って、ルーブル美術館といえば、美術館好きでなくとも一度は行ってみたいと思うであろう、世界で最も有名な美術館だ。巷ではちゃんと回るのに丸三日間必要だと言われているが、流石にそこまでの時間を捻出できなかったため、野村ホールディングスの視察が終わった後の 18:30 から閉館の 21:45 までの 3 時間 で回ることになった。

視察が終わったその足でルーブル美術館に向かったはいいものの、列が複数あって入り口がわからず、入場がかなり遅れてしまった。とりあえず有名どころは回ろう

という試みで事前に棟や部屋番号をメモしてから臨んだ。最初に向かったのはリシュリュー翼。ここにほとんどの有名な作品が飾られている。教科書で幾度となく見た「民衆を導く自由の女神」、「皇帝ナポレオン一世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠式」、「サモトラケのニケ」、「モナリザ」、「ミロのヴィーナス」などの神々しさに圧倒されながら歩を進めた。棟を移動する前にミュージアムショップにも寄り、大きめのポストカード一枚で 8.90 ユーロ（日本円だと約 1500 円）することに驚きながら次の棟に向かった。過密スケジュールの中で順調だと思っていたが、ハンムラビ法典とナポレオン三世の居室を見るだけだ！と思ったところでざわざわと人が帰り出したのだ。どうやらちゃんと閉館時間に閉めるために 30 分前から人を追い出していたらしい。トラブルだらけで自分の計画性の足りなさ感じたが、これでまたパリに戻ってこないといけなくなった、とポジティブに捉えようと思う。次回行く際はスケジュールに余裕を持って、計画を立ててから臨みたい。

「民衆を導く自由の女神」

「ミロのヴィーナス」



「サモトラケのニケ」

4　STATION F 視察

STATION F は、フランスの首都パリにある世界最大のスタートアップキャンパスである。フランスの大手通信会社創業者であるグザヴィエ・ニールによって設立され、駅舎を改修して作られたことから「STATION」F と名付けられたそうだ。

建物内には 3 つのゾーンがある。CREATE, SHARE, CHILL だ。CREATE はスタートアップ企業とそれを支援する大企業のほとんどが入居する場所だ。SHARE はイベントが開催されるホールが多数ある。CHILL は世界各国の料理が楽しめるレストランが並び、一般公開もされているため、スタートアップ企業と地域コミュニティのつながりを測る場所にもなっている。

SHARE ZONE のモニュメントにて

STATION F では建物内を見学した後、Aitenders というスタートアップ企業のプレゼンテーションを聞いた。見学中に私が特に気になった点は各部屋がオープンであることだ。各オフィス間には壁がなく、会議室はすべてガラス張りだった。これはコミュニケーションを容易にして助け合うためだという。さらに、中央にはクライアントとスタートアップ企業がカジュアルなミーティングを行えるようなスペースがあり、全体的に企業間のコミュニケーションが重視されている印象を受けた。

Aitenders は、企業内で用いる書類の整合性や信頼性を確かなものにするサービスを提供する会社である。創業者に起業する上で難しいことを聞いてみたところ、新型コロナウイルスやロシアウクライナ戦争など、情勢によって、かなり影響を受けてしまうことを挙げていた。また、創業当初は専門性がなく、コストがかかってしまうことが懸念点だったという。前職の中で Aitenders で提供されているようなサービスの必要性を感じて起業するに至ったというお話をも伺って、ないならば作ってしまえばいいと言う行動力にも感銘を受けた。

STATION F には名だたる大企業が参入しており、プログラムに参加して審査をクリアするとオフィスを獲得できる。このようなスタートアップ・キャンパスが日本でも有効に使われてほしい。　（高橋 空）

6　パリ日本文化会館 視察

パリ日本文化会館は日本の文化をフランスの人々に発信し、日本に親近感をもってもらうことで、日仏関係をより良好なものにすることを目的に設立されました。1982 年のフランソワ・ミッテラン大統領と鈴木善幸首相の間でパリ日本文化会館の設立が構想されました。年間来場者数は 15 万人を超えており（2023 年度は 17 万人）、多くの方々がこの会館に訪れています。この施設を運営しているのは国際交流基金で、国際交流基金は元々外務省所管の特殊法人として設立され、のちに独立行政法人となりました。国内外に拠点を持っていて、海外 25 か国に支部を設けています。その中でもパリに位置する本会館は大きな拠点のひとつです。

パリ日本文化会館の主な活動として、文化芸術交流、海外における日本語教育および日本研究・国際対話の３つが挙げられます。こうした目的をふまえて、パリ日本文化会館では、日本の文化を発信するために展示や舞台公演、映画や日本研究者を中心とした講演会、茶道、書道やいけばななどの日本の伝統文化の体験、日本語講座などを実施しています。特に日本人でもあまり馴染みのない能楽や日本映画の上映などはとても人気があるようです。

パリでは開架式の図書館が少ないそうですが、パリ日本文化会館には開架式の図書館があり、その図書館は学生だけでなく、日本に関心のあるすべての人がアクセスできる貴重な図書館のひとつです。図書館には日本語の本が約 15,000 冊、英語とフランス語の本が約 10,000 冊あります。

会館についてのお話を伺ったあと、会館を見学しましたが、大ホールはあらゆる日本文化の公演に対応しており、座席の配置が簡単に変形できることにとても驚きました。図書館を見学した際は、図書館司書の方から徐々に改革を進めていったが、新しいことを進めていく過程で多くの困難に直面したことを伺いました。最後に元 NHK 記者の鈴木仁館長からお話を伺いました。海外に出て、世界を知り、視野を広げ、外側から日本という内側を見ることの重要性を改めて感じました。　（坂田綾香）

~~~~コラム~~~~

パリで見た日本文化の存在感：マンガが支える日本関連店

パリにある日本関連の店を巡ってみると、どこでも目にするのは圧倒的なマンガの存在感だった。ブックオフ、ジュンク堂書店、漫画喫茶――それぞれ特色は違うが、日本では書店の一角に収まるマンガが、ここでは主役のような扱いを受けていた。

まずジュンク堂書店は二階建てで、日本語の書籍が揃っているが、半分以上がマンガやライトノベル。日本では小説やビジネス書のほうが広いスペースを占めることが多いのに対し、ここではマンガの圧倒的な存在感が際立っていた。フランス人の来店客も多く、日本語の原書を手に取っている人もいた。

ブックオフはフランス語の本も扱っているが、二階には日本の中古本も 3 分の 1 ほどあり、二階にはやはりマンガやライトノベルがずらりと並ぶ。ポケモンカードやフィギュアといった日本のグッズも多く、現地人の客もたくさんいて、立ち読みをしている姿が目立った。

そして、漫画喫茶はパリ市内の大学から徒歩 3 分ほどの場所にあり、交流授業のときに現地の学生から教えてもらった。パリに漫画喫茶があること自体驚きだったが、実際に行ってみると、定番の作品だけでなく、日本でもあまり見かけないようなマイナーなマンガやグッズまで揃っていた。実際に入店し、見知った漫画のフランス語版を読んでみたが、文字は読めないのに何と書いてあるかは分かるという、なんとも奇妙な体験をした。

このように、異国の地でこれほどまでに日本のコンテンツが親しまれているのを見るのは不思議でもあり、広く受け入れられていることを実感した。　（榊原将輝）

7　在フランス日本国大使館　視察

在フランス日本国大使館の歴史は、日本が近代化を目指した明治時代にさかのぼります。1858 年に日仏修好通商条約が締結された後、1871 年に代理公使館として発足したのが始まりです。その後、1906 年に大使館へと昇格しました。大使館の主な役割は、日本政府を代表してフランス政府やヨーロッパ各国の政府と交渉すること、フランスで活動する、またはフランスで活動したいと思っている日本企業を支援すること、そしてフランスに住む日本人を保護することです。各地の治安状況について発信を行っています。しかし、日本国大使館が果たすもう一つの重要な役割は、フランスにおける日本文化の普及と日仏間の市民レベルの交流を促進することです。そのため、日本の伝統芸能を紹介するイベントや展覧会を在仏の民間団体と協力しながら行っています。さらに、日本国大使館はビジネスミーティングの場を設けることで、企業が相手国の企業とのネットワークを構築することにも貢献しています。在フランス日本国大使館は、日本とフランスの持続可能な関係構築のために、様々な面で重要な役割を果たしています。

大使館では広報文化外交を担当されている公使の山谷裕幸さんより、日本の政策をフランスでより正確に理解してもらうために現地の記者によるインタビューに応じたり、フランスのインフルエンサーを日本に招聘し、日本に関する好意的な感想を発信してもらうことで対日感情向上を図ったりしていることなどを伺いました。加えて SNS 全盛のフェイクニュースが容易に作成、拡散されるようになっている時代において偽情報の拡散と定着を防止するために時に反論投稿、寄稿なども行うことを学びました。情報を発信する際に大使館としてフランスのどのような層に当該情報を届けたいかという部分についてはコンサル等外部の力も借りながら分析を続けているというところが視察の中で特に印象的なところでした。例えばフランスの場合最大手の新聞「ルモンド」で

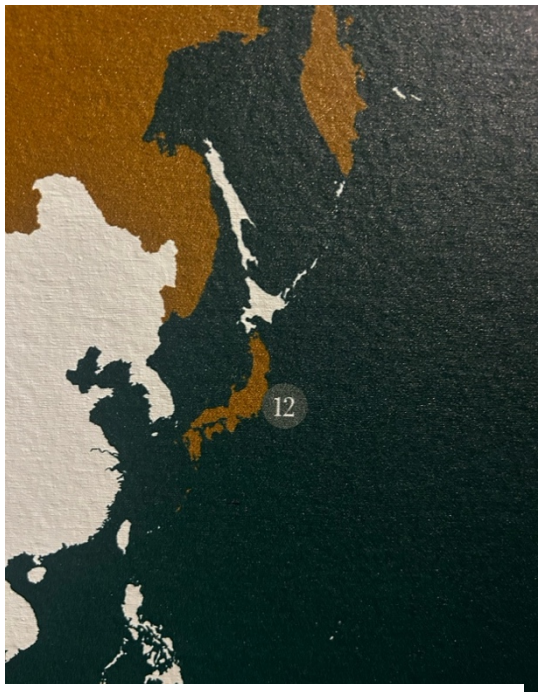
も発行部数は 50 万部で、これは朝日新聞の 350 万部と比較すれば相当に規模が小さいように思えます。しかし主要購読者層について考えると、ルモンドの場合には政治家や企業エリート、インテリ層といった一般的に社会において意思決定権を有している人たちが読んでいることが多いため、例えば日本の重要な政策を理解してもらいたい場合には新聞に寄稿することが効果的になり得ます。大使館において日本の国益のために政策発信や文化広報をしていることは知っていましたが、届ける対象を明確に定めそのために最適な伝達媒体を選択するほど洗練された体系が整っていることは初めて学ぶことができました。

（八ッ橋 賢）

~~~~コラム~~~~

フランスのオペラ座と北方領土

北方領土は日本政府の公式見解では日本国固有の領土となっています。また、対馬、北海道、石垣島はもちろん日本の領土です。しかしその常識はフランスでは通じないかもしれません。研修中、パリの観光名所として知られるオペラ座(オペラ・ガルニエ)に行きました。オペラ座の中にはオペラ座の歴史に関する博物館があり、その中にはこれまで公演を行った国を示す地図がありました。オペラの一団は日本にも巡業しにきたことがあるようで、日本も色が塗られていました。ただ、残念なことに北方領土は塗られていませんでした。政治的な配慮でしょう。ただ、さらに残念なことに北海道や対馬も石垣島も塗られていませんでした。ロシアは塗られていたので、北海道や北方領土はロシアのものでも日本のものでもないようです。そこは政治的空白地帯ではないはずなのですが、、、　（石田宗嗣）



オペラ座の資料展示室にて
巡業した国を示した地図

8　Le Village by CA Paris 視察

1. クレディ・アグリコルと Le Village by CA Paris について

クレディ・アグリコル(Crédit Agricole, CA)は、英国を除いたヨーロッパの中では、BNP Paribas に僅差で次いで二番目に資産額(およそ 2.6 兆€)の大きな銀行です。1894 年に設立され、農業分野への融資から発展したため「緑の銀行」とも呼ばれます。しかし、現在では預金やローンから、投資や保険まで多種のサービスを提供する巨大な企業へと成長しました。一方で、フランスの地方銀行運営では、その歴史もあり支店数や資金規模の点で第一の地位を占めています。

クレディ・アグリコルは協同組合に基づいた銀行であるため、一般の人々も銀行の運営において、発言権を持ちます。これは、人々及びある地域の組合リーダーが参加する活動が定期的に設けられていることによります。この形態によってフランス社会と密接に関連し、地域コミュニティをスタートアップ・イノベーション・持続可能な取り組みへの援助によって強力に支援することが可能になっています。

今回私たちが訪問した‘Le Village by CA in Paris’は、まさにそうしたスタートアップへの援助を主に行うインキュベーターでした。インキュベーターとは「孵化器」という意味で、スタートアップを援助する金融機関の一般的な名詞となっています。20 日に訪れた STATION F にも同様のインキュベーターがありますが、HEC の方はより「キャンパス」としての性格が強く厳しい選抜があるのに対し、Le Village はスタートアップ間もない企業に対しても門戸を広く開けたインキュベーターです。

Le Village には仲介をして頂いた日仏経済交流委員会の富永典子様、そして在フランス日本国大使館から広報文化担当公使の山谷様、商務担当参事官の川端様同伴で向かいました。ドアを入ると、右側に一面が植物に覆われた大きな壁が屹立し、その前は小さなカフェのような洒落たスペースになっていました。後で聞いた話によると、その緑の壁庭はおよそ 7m × 8m ほどで、室内にある壁庭としては、フランスで最大のものらしいです。

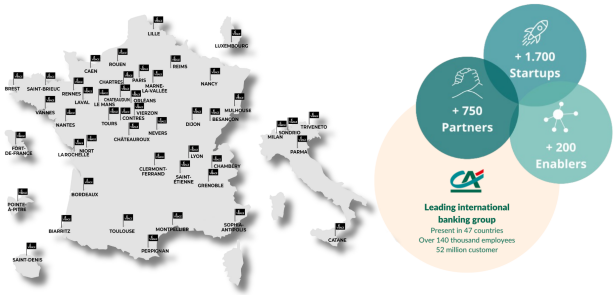
壁の一部の前での集合写真、左に大きな壁庭がある

訪問では、筆頭マネージャー(Lead manager)のジュディ氏(Mr. Pierre-Emmanuel JEUDY)に、カジュアルな応接室兼談話室のような部屋へ案内していただき、そこで Le Village by CA の業務についてプレゼンしていただきました。以下、その内容を要約・補足して記します。

2. プレゼン要約

CA は 19 世紀から存在する、古い銀行です。しかし、株式市場に上場したのは 2001 年からで、これは CA にとって一つの新たな出発となりました。そのころは、（フランスの）スタートアップにとっては困難な時代でした。CA もまだスタートアップへの支援を集中的に展開はしていませんでした。しかし時代が進むにつれて、新たな起業家とフランス経済にとって、強力で効果のある支援プログラムが求められていることが分かりました。

Le Village が設立されたのは 2014 年で、このパリが最初の拠点でした。Le Village はインキュベーターという、初期から中期のスタートアップを支援し、彼らの計画と事業を“加速’させ、成功を助ける場を提供するネットワークとしてのビジネスの拠点です。同じインキュベーターである‘STATION F’が設立されたのは 2017 年なので、それよりも早く展開しています。Le Village は、現在までにおよそ 40 の拠点がフランス中と一部のヨーロッパ諸国に展開し、各地域のスタートアップのインキュベーションに取り組んでいます。



各 Village は特色のある支援を展開しています。農業が産業の中心である地域、例えば Toulouse では農業関係のスタートアップが多く、またイタリアでは主にレストランなどのサービス業が多くなっているので、そうした分野への特化があります。ここパリはフランスの中心であり、最近ではフィンテックや AI 企業が多いですが、他地域よりも多様なスタートアップ企業がインキュベートのために訪れます。

フランス全体では 15,000 から 20,000 のスタートアップがありますが、その 90%がインキュベーションを必要としています。スタートアップ事業が加速し軌道に乗るために特に必要なものは、資金、場所、そして出資者かつアドバイザーとしてのよい企業へのコネクションです。Le Village は、その全てを提供する場として機能しています。これはインキュベートされるスタートアップと我々の間の、B2B での Win-Win なビジネスであり、またそのような状況の継続と強化を目指しています。我々は、まだ若く、多くの支援を必要とする早期の段階のスタートアップも視野に入れた支援策を戦略として提供しています。400 以上のプロジェクトを組織し、50 社以上の大企業からのサポートがあり、350 名以上の Intrapreneurship メンター、つまりスタートアップから進んだより大きな事業のマネジメントを行い、継続させるために働くメンターがアドバイザーとして所属しています。また、我々は 2013 年から開始した、フランス政府のスタートアップ支援策である‘French Tech’や、特に郊外や地方をターゲットにした‘French Tech Tremplin’とも提携しています。我々は毎年およそ 200 社のスタートアップをインキュベートしています。

具体的なスタートアップの「加速」の方法について。大まかには、スタートアップはまずラボに入って計画を立て、そして実行し、持続させるという過程を進むプログラムに参加します。これは、‘Define → Enable → Scale’という三つのフェーズで構成されています。Define ではスタートアップの事

業の特色を鑑みて、イノベーションにつながるビジネスプロジェクトを立てます。次に Enable では、そのプロジェクトを実行に移し、イノベーションの引き金を引くことを目指します。最後に Scale では、そのプロジェクトを軌道にのせ、イノベーションを持続させるように努めます。その間、ＣＡはここをそのための場として、オフィスやミーティングルーム、そしてコネクションを提供します。さらに、成功のためには‘Visibility’も重要です。つまり TV への露出などにより知名度をあげることです。これについても、援助をしています。このようなプロセスは一般的であり、STATION F も同様です。日本では農林中金の取り組みが近いと聞いています。

この Le Village のインキュベーションによって成功した企業として、現在は 60 万€から 1 億 300 万€までの資金調達を達成した企業があります。その中で最も大きい企業価値を達成している企業は Diabeloop という AI を活用した糖尿病患者への血中糖度対策サービス提供をしています。

この後は、以上の内容のまとめによって、プレゼンは締めくくられました。以下では、プレゼン後の質疑応答についても要約して記します。

3. 質疑応答

Ｑ１． USA のシリコンバレーやロンドンなどの巨大なテック起業・スタートアップが集まる地域に対して競争力を維持するためにどのようにしているか。

Ａ１． 確かにシリコンバレーと同じ規模で競争することは難しい。しかし、実際には、自国や自身の地域で起業をしたいという人が多くいる。Le Village はそのような需要を取り込むビジネスであり、その需要に対して集中的に投資を行うということが我々の戦略である。また、ロンドンは現在 EU に加盟していないため、市場や市場の規制・制度が異なる。従って、ビジネスの需要は代替的ではないと考えている。

Ｑ２．インキュベートされる企業の中で、AI 系テック企業の割合はどの程度か。

Ａ２．現在はおよそ 30％。しかし、今の時期は転換点であると考えている。すでに、スタートアップだけでなくすでに軌道に乗っている起業も AI テクノロジーを使い始めている。Le Village 内では、AI を用いたベータ版のテストや、ラボ内での AI テック企業と他の企業の共同プロジェクト支援などの新たなインキュベーションプロセスを始めている。

Ｑ３．スタートアップ企業が持続可能な事業展開を行うために必要なことは何か。

Ａ３．まずは、事業がイノベーティブで魅力的であること。例えば、ヘルスケアや AI テクノロジーでは、興味深い事業を考えている企業が多い。もしそうならば、次は規模の経済を発揮すること。事業を拡大し、国際的な拠点を広げられると、可能性が高まる。EU 圏内では、それはとてもやりやすくよい市場であるといえる。また、よいパートナーシップの構築も重要、コネクションを強化し、相手との相互作用によって価値を高めることができる。最後には、アイデアを持った起業家がよく働くことが大事。これらの点を踏まえて、我々もより多くのユニコーン起業が成長するように支援する。

Ｑ４．EU では規制が厳しいが、これはスタートアップにおいてどのように影響しているか。

Ａ４．EU の規制は、特に FinTech 企業に関係する金融において、とても厳しい。規制は企業を殺すこともあるが、しかし同時に起業をトリガーすることもできると考えている。もし規制が何もなければ、市場は混沌となってしまう。そのため、規制と上手くやっていくことが、スタートアップにとってもよい影響を及ぼすことを意識するべき。だが、真に優れたイノベーションというものは、いつもクレイジーで、規制をひっくり返すものであることも事実。最後には安定性が事業継続と成長に重要なので、規制をリードしていくような存在になるのが理想である。

Ｑ５．　スタートアップ企業の申し込みの審査の方法や間隔、このインキュベーションの期間は、どの程度か。

Ａ５．　審査は 2 か月ごとに行われている。方法は、第一次書類審査と第二次プレゼンで行う。インキュベーションは、ラボのプロセスで 2 か月の Define 期間と、6 か月の次の二つのプロセスで、合計 8 か月ほど。

Ｑ６．　成功する優れた起業家になるために必要なことは何か。

Ａ６．　今までみてきた優秀な起業家は、書類でも組織でも、常にオーガナイズのスピードが速い。大企業と違って、スタートアップは素早く事業の方向性を変えることができ、それが利点である。1,2 か月で新規事業計画をまとめ、実行するというスピードで企業をまとめ運営することができれば、よい結果を残すことができるだろう。

4. 質疑応答後のレクリエーション

質疑応答ののち、そのまま見晴らしのいいベランダへ案内していただき、そこから見えるフランスの街並みやこの建物について教えてもらいました。余談ですが、この Le Village by CA Paris の建物はかつて、第 23 代フランス大統領サルコジの邸宅であったそうで、サルコジが手放した後に購入したとのことです。

屋上ベランダでの集合写真、天気が良く見晴らしのよい日

5. 訪問総括

この訪問では、フランスでのスタートアップやその支援の状況を詳しく知ることができました。前日のSTATION Fと併せて、インキュベーションの現場（の一部）と理念の双方、観察者の視点から学ぶことができたと感じます。このＣＡによるインキュベーション自体はビジネスであるものの、フランスやひいては欧州の将来にとっても重要な政策として、大企業やフランス政府と提携して、大きなネットワークを構築して望むことの重要性が理解できました。スタートアップにとって最初に必要なことは、独創的かつターゲットとする市場の消費者（あるいは中間需要者）にとって魅力的なアイデアを持っていることは前提として、その知名度を広めていくことだと繰り返し提示されました。そのために、コネクションを利用して、消費者へとリーチし、規模の経済を生かすことが、スタートアップをユニコーン企業へとインキュベーションするこのビジネスの理念であるということです。このターゲットとする市場の特性を見極めて、その後の事業方向を素早く定めることも、起業家にとって必須の能力です。インキュベーションセンターは、そうしたときに有用な知識の集積点でもありました。資本と知識の集中こそが育成にとって肝要であり、そうした努力がさらに起業家へのその経済地域への魅力を高め、イノベーションというランダムな事象の起こる確率を高めるということが示唆されます。これはインキュベーションセンターの本質であり、日本市場にも同様のことがいえるはずです。

以上が、我々がLe Village by CA Parisへの訪問で学んだことになります。

＊参考文献

Le Village by CA ホームページ https://levillagebyca.it/en/
（最終閲覧 2025/03/05）

French Tech ホームページ https://lafrenchtech.gouv.fr/en/
（最終閲覧 2025/03/05）

（田口蒼一郎）

8 安發氏講演会報告「国民性は政治がつくる」

安發（あわ）明子氏はパリに在住する研究者であり、主に子どもの福祉、家族政策、子どもの権利、教育、社会的養護、親支援、周産期ケアなどの分野で活躍している。また日本の省庁・県・研究者のフランス視察や調査のコーディネート・通訳としても活動されている。日本学術振興会特別研究員として研究を進めるとともに、パリのソーシャルワーカー養成校 AFRIS の顧問や早稲田大学社会的養育研究所の「こども家庭ソーシャルワーカーの養成のあり方に関する研究調査委員会」委員などの役職も務めている。経歴としては、2005 年に一橋大学社会学部を卒業した後、2017 年にフランス国立社会科学高等研究院（EHESS）の健康・社会政策学科の修士課程を修了し、翌 2018 年には同研究院の社会学科修士課程も修了されている。著書に『親なき子』や翻訳した作品に『ターラの夢見た家族生活』などがある。また専門誌への寄稿等やシンポジウムへの参加を通じて、国際的な視点から日仏の子ども支援・福祉政策の理解と交流に大きく寄与されている。

今回の研修では、21 日の 14 時から 2 時間の講義を受けた。講義の中で日本の福祉システムがいかに低水準かを知り、不便なく暮らしていると感じていた私は衝撃をうけた。まず福祉に対する認識の差が大きいと感じた。児童福祉に関して言えば、子どもの格差是正は重要なことだという共通認識があるが、日本でそういった話をすると格差があるなら努力すればいいと考えられるそうだ。安發氏はこの点において日本人は無責任であると指摘していた。フランスの教育においては、自分で情報を集めて判断できることが重要視されるそうだ。一方で日本人は与えられた環境に無条件に従順であり、それではより良い社会にはならないと仰っており、まさにその通りであると感じた。また、犯罪率が高いのはバックグラウンドに様々な問題を抱えていた人が多いと分かっているのであれば、ケアを拡大すれば安心できる社会により近づく。日本人の無責任さは課題であると感じた。

講義に社会の捉え方が異なるというお話があった。日本では「社会」という枠組みがあらかじめ設定されており、その枠組みに入れない人を排除する。一方でフランスでは人と人のつながりそのものが社会であるため、だれも排除されない、というものだ。フランス人の認識において、福祉は受け身ではなく

自分たちが作るものであり、それを連帯により達成するために動いているのではないだろうか。この連帯という文化は日本が失ってしまったものであり、しかしより良い社会の形成には取り戻さなければならない感覚だとも感じた。さらに、こういった積極的な国民性には、国家の成立背景にも見いだすことが出来ると感じた。日本は島国であり、天皇家というただひとつの皇族による国家形成がなされ、現代では象徴としての存在であるものの、それが絶えたことはない。一方でフランスは社会契約により国家を定義し、形成された国家と国民である。つまり、彼らはフランス国民であり、自分たちが社会を作るという自覚が強いのではないかと考えた。現代社会は皇族による統治でもなければ、グローバル化の拡大や技術の発展により島国という閉鎖環境ともいえない。日本人は自分たちが社会を変える存在であるという認識を改めて持つ必要があると感じた。

ただし、フランスの福祉にも課題はある。まずは難民問題である。以前に比べてヨーロッパの経済状況は悪化の一途をたどっている。アメリカや中国の飛躍的な成長に加え、資源大国であるロシアがヨーロッパと対立していることも大きい。こういった現状の中で、難民の受け入れに否定的な右派の市民が増えているそうだ。税をおさめる市民の生活が苦しい環境の中で難民に税金を使う政府に批判的になるというのは納得できる。問題がさらに拡大する前に、妥協点を決めなければならないと感じた。もう一つは給与問題だ。フランスではストライキが労働者の運動として一般的であり、多くの業種でストライキを通し賃上げが達成されてきた。しかし福祉分野においては、ストライキをしても弱者が頼る先を失い、富裕層においては影響を受けづらいという結果になりかねない。その結果賃上げが進まないことが、フランスの福祉が抱える大きな課題であると感じた（谷川　陽海）

講演会後、安發氏を囲んで。

~~~~コラム~~~~

ヴェルサイユ宮殿の個人的な見所

ヴェルサイユ宮殿と言えば「鏡の間」や「ナポレオンの肖像画」といった超有名な見所ポイントが注目されますが、是非「The Gallery of Great Battles(戦闘の回廊)」という間にも足を運んでいただきたいです。名前の通り中世までに起きた数多くの戦いが年代順に飾ってあるのですが、世界史を選択した私にとって鏡の間よりも面白い空間でした！なんといってもフランスですから、カール大帝に始まり、シャルル 8 世のイタリア戦争や百年戦争の時代を超え、ナポレオンの活躍までが描かれています。個人的な意見ではありますが、中世ヨーロッパは世界史の中で黄金時代と思っていまして、テンションがすごく上がりました！ヴェルサイユ宮殿の中だけでも結構な広さがあります。戦闘の回廊は鏡の間よりも奥にある上に、その先にはナポレオン特集ゾーンが待ち受けているので、なんとなく眺めて一周もせずにぬけてしまう人が多かったように感じました。もったいないので、せめて一周はしてみてください、特に世界史選択の人はテンション上がること間違いなしです！！（谷川 陽海）

（左）ブルボン朝の初代アンリ 4 世

（右）アウステルリッツの戦い

～～～～コラム～～～～

シテ大学の学生と観光

19日の交流会で仲良くなったパリ・シテ大学の学生と、自由行動日である22日の午後に一緒にパリを観光しました。彼女は日本語がとても上手で、日本語を勉強してからたった2年しか経っているようにはまったく見えませんでした。

午前中にみんなでヴェルサイユ宮殿に行ったあと、サント・シャペルで彼女と待ち合わせをして一緒に行きました。サント・シャペル前のおしゃれなカフェで昼食をとったあと、ラファイエットでのショッピングに付き合ってもらいました。両親のお土産をそのデパートで買ったのですが、私がお店の紙袋を手に持った状態で出ようとしたら、スリに狙われる可能性があるからと言われ、お店の人にカモフラージュ用の白い紙袋を頼んでくれました。このとき、日本とパリの安全に対する意識の違いを感じました。

欧州短期海外調査に参加している別の学生もシテ大学の学生と夜ご飯を一緒に食べに行くなど、シテ大学との交流会を通して、学生との仲を深めたようでした。私は今年の9月からイギリスに留学に行くので、留学している最中に今回観光しきれなかったパリの美術館やレストランに行きたいなと考えています。パリを訪れた際はまた彼女との再会を果たしたいです。

（坂田 綾香）

2/23（日）

パリ北駅から高速鉄道に乗る。ケルン経由で、デュースブルクへ。

~~~~コラム~~~~

3 回登ったこと

私は、欧州海外研修中に、パリのモンマルトルの丘、ケルン大聖堂、デュイスブルグのランドシャフトパークと、３回高い所に登った。１０日ほど滞在していたので、３回という数字が、私が特に多くのぼったことを意味するわけではないのだが、登って降りるというのがそれなりに体力を消耗することだと分かっていながら、それでもなお人が登りたくなるのはなぜかというのは気になるところである。

その理由が全く分からないわけではない。個人的には、高いところから見る見晴らしの良い景色が、たとえ絶景でなかったとしても好きだということもあるし、登ることに対してハードルをあまり感じないということもある。今回でいえばケルン大聖堂を気軽に登ろうとしたわりに実際に登るのはしんどく、少し舐めていたと言えるかもしれない。ほかにも、私にとってはとりあえず登って疲労感を感じておけば何となく観光に来たという実感がわくからという理由も少しはあり、他の人にもそれぞれ違った理由が思いつくかもしれない。

ここで、この登りたくなる理由に関して、私が共通項を見出したほかの欲求がある。それは大盛りラーメン、俗にいう二郎(系)ラーメンである。脂肪、糖、塩分。これらの短時間での過剰摂取が中毒性の元となっている食べ物である。私も時々食べたいと思うのだが、食べた直後は少々お腹も苦しくなってもういいやと思うのに、空きっ腹を抱えるとまた食べたくなる。皆さんが察する通り、登るという行いと何が似ているのかというと、このアップダウンである。ラーメンでいえば血糖値の乱高下、登ることでいえば疲労と達成感の感情のアップダウン、また物理的な視点のアップダウンである。人間はこのような変化を快となすようである。

私が今回の研修先で誰かに言われずとも高い場所に引き寄せられたのは、自分に刺激を求める意思の一端が表れているように思われて嬉しい。人生の山谷を恐れず楽しむ気持ちを持ち続けたいと思う。　（印藤 康介）
~~~~

9　デュースブルクの紹介

デュースブルクは移民を多く受け入れている街として知られています。他の有名な都市と比べると、あまり観光地は多くありませんが、私たちが自由時間で訪れた景観公園について紹介します。

かつての高炉から撮った写真

デュースブルクにあるこの公園は廃工場を景観公園に作り替えたもので、Landschaftspark Duisburg-Nord と呼ばれる公園です。1901 年に設立され、1985 年に閉鎖された旧ティッセン製鉄所の跡地で、ここではかつて鉄鉱石から銅を精製していました。鉄鋼・炭鉱産業の衰退に伴い、閉鎖に追い込まれた。閉鎖することで都市のイメージが悪化することが恐れられていましたが、1994 年に自由にアクセスできる景観公園に統合され、工場周辺の地域は活発になりました。現在は庭園・牧草地・水域に囲まれ、展望台・ロッククライミング・ダイビング・ウォーキングなどを楽しめるレジャー施設となっています。

実際に訪れると想像していたよりもはるかに大きく、今では高炉が展望台となっていたので登ってみたところ、そこからの眺望は素晴らしかったです。

（坂田 綾香）

~~~~コラム~~~~

全人類のテンションが上がるもの

人間がきらきらしたものを美しいと思う理由は、生命にとって欠かせない水、その表面がきらきらしているからだという説がある。なぜだか無性に心惹かれるものたちは、こうして本能に結びついているのではないだろうか。今回の研修で心躍った瞬間を簡単に分類して列挙してみる。1.飛行機からの絶景、2.パリの夜景＋エッフェル塔キラキラ ver、3.かわいいポストカード and 美しい絵画、4.全長 300mの旧駅舎リノベ施設 and ケルン大聖堂 and 巨大な廃工場、5.本で読んだシェイクスピア書店とその近くの路上 jazz 演奏、6.ドイツ料理レストラン and ジェラート。今回のコラムでは 4 について考えてみた。いずれも過去の巨大な建築物である。自分が生まれるはるか昔に建てられたものには好奇心をかき立てられ、長く存在するものには強さを感じる。また巨大なものに対して人間は圧倒され、それもやはり強さを感じるからか。強さは人間の繁栄に不可欠であるため憧れを抱く、そして強いものの近くにいれば安全と思える。こうして本能と結びついているのか。そんなこんな考えてみても、なぜなのかわからないものにこそ惹かれてしまうというのもまた人間の常なのかも知れない。（前原優風）

~~~~

10　交流授業

（デュースブルク・エッセン大学、ルール大学ボーフム）

1．基本情報

私たちが訪問したデュースブルク・エッセン大学は、2003 年にデュースブルク大学とエッセン大学を統合して設立された国立大学である。ルール地方に位置しており、約 4 万人の学生が 12 の学部で学んでいる。得意とする分野は自然科学、工学、物理学、人文科学である。そして、交流授業に参加したもう一つの大学、ルール大学ボーフムは、1962 年にドイツで最初に設立された大学である。デュースブルク・エッセン大学と同じくルール地方にあり、幅広い学問分野をカバーする同大学では約 40,000 人の学生が 21 の学部で学んでいる。なお、東アジア学部も設置されており、日本に関する研究活動も盛んである。ちなみに、デュースブルク、ボーフム、ドルトムントの 3 大学は、アライアンス・メトロポリス・ルール大学同盟を締結しており、若手科学者の育成と支援のためのプログラムが共同で実施している。

交流授業を行った校舎

学食はビュッフェ形式

２．交流授業の概要

デュースブルク・エッセン大学の東アジア研究所の皆さんに場をセッティングしていただき、当大学ならびにルール大学ボーフムでアジア圏の経済や社会問題などを専攻する学生たちと、交流授業を行った。簡単な自己紹介の後、我々一橋大学の学生が移民に関する二つのプレゼンをし、さらにその後ディスカッションが行われた。プレゼンに関する内容に限らず日独それぞれの法規制や日常生活における雰囲気に至るまで、様々な話題について議論が行われた。お互いが情報を共有し合うことによって比較し合うことができ、現状の理解につながったと考えている（プレゼンや、ディスカッションの内容については別項をご参照ください）。やはり移民の多いドイツに住む学生の、移民問題に対する関心は高いと感じられ、日本の現状について様々な方面から質問された。ディスカッションのあとにはドイツと日本のお菓子を摘みながら、自由に交流する時間が設けられた。さらに校内の学食にて昼食も共にし、楽しい時間を過ごした。（前原優風）

11 デュースブルク市移民統合事務局　視察

1.訪問先の紹介

デュースブルク市移民統合事務局（正式名称：Amt für Integration und Einwanderungsservice）は、移民の統合を促進し、必要不可欠な移民サービスを提供することで、多様な住民のサポートに尽力している。この事務局はデュースブルク市の経済・統合・治安・秩序部門の下で運営されており、地域社会への社会的・文化的統合を支援する役割を担っている。

事務局内には、いくつかの主要部門が存在する。

- 市統合センター（Kommunales Integrationszentrum）：移民の地域社会への統合を促進するためのプログラム開発・実施を担当する。
- 移民サービス（Einwanderungsservice）：在留許可やその他の法的手続きを提供する。
- 入国管理法に基づく中央業務（Zentrale ausländerrechtliche Aufgaben）：移民法の適用やガイダンスを提供する。

デュースブルク市は文化的多様性に富んでおり、移民統合事務局は、移民が社会・経済・文化の面で適切に溶け込めるようにリソースを提供し、包括的な環境を育む役割を果たしている。

2.訪問記録と考察

デュースブルク市は、ドイツ国内でも移民の割合が特に高い都市の一つであり、実際に市内を歩くと多様な文化背景を持つ人々が共存していることが実感できた。特にトルコ系住民の割合が高く、街中ではトルコ語の看板やレストランを多く見かけることができた。これは、デュースブルクが長年にわたり労働移民を受け入れてきた歴史の表れであると思われる。他にルーマニアやスロバキアなど、東欧系の移民も多くいる。

私たちは移民統合事務局を訪問し、部門の一つである市統合センターの責任者テアヂッチ氏(Mr.Terzic)のお話を伺うことができた。移民がドイツ社会に適応しやすくするための支援プログラムが充実しており、特に言語教育や雇用支援に力を入れていることが印象的だった。また、ビザの種類によって異なる統合プログラムが提供されており、滞在許や市民権を取得するための支援も行われている。このように、デュースブルク市は単なる「受け入れ」ではなく、「社会の一員としての定着」を目指した政策を展開している。

特に印象的だったのは、移民や難民に対する「受け入れの雰囲気」の重要性についての説明だった。「移民や難民を単なる受け入れ対象ではなく、社会の一員としてどのように機能させるか」に焦点を当て、彼らに仕事の機会を提供し、積極的に社会参加を促すことが統合の鍵であると語られた。この考え方は、受け入れる側にとっても経済的な利益という移民・難民に対する認識改善につながり、移民側にとっても社会の一員として受け入れられるという意識を醸成する重要な要素だと思われる。

今回の訪問を通じて、私は未来の社会において、難民や移民が社会の一員として役割を果たし、共に協力しながら生きていく姿が実現可能であると確信するようになった。ドイツは私が数日間滞在しただけでも、多様な人種が共存し、協力し合いながら働く社会であることを強く感じた。特に企業訪問の際、ドイツが移民・難民の受け入れを積極的に行っていることで、アジア人に対する差別が少なく、欧州諸国の中でも多様な文化背景を持つ人々が自然に共存しているという話が印象に残った。

ドイツ、特にデュースブルクのような都市は、移民政策の過渡期を経験しながらも、新たな社会のあり方を模索しているように感じられた。移民統合事務局への訪問中、特に印象に残った言葉がある。それは、「現在、移民や難

民が多い地域では治安の悪化や犯罪のリスクが懸念されているかもしれない。しかし、移民・難民の二世に対する教育を積み重ねることで、彼らが成長し、社会の一員として活躍する未来には、より良い社会が築かれる」という考え方だった。

韓国や日本も、労働力不足や社会の多様化に対応するために、将来的には移民の受け入れをより積極的に行う必要があると考えられる。初めは理想論に思えたが、今回の視察を通じて、移民・難民を受け入れることによって社会がどのように変化し得るのか、その現実的な側面を実感することができた。私たちの世代では完全な成功を収めることは難しいかもしれないが、適切な教育と支援を通じて、次の世代がより多様性を受容する社会を築くことができるのではないかと考える。社会統合の実現には時間がかかるかもしれないが、将来的な観点から持続的な努力を重ねることで、いつか理想的な共生社会が実現する日が来るだろう。

（KIM　SEOYEON）

12 ホッホフェルダー・マルクト小学校　視察

1. はじめに

2025年2月24日、私たちはドイツ・デュースブルクのホッホフェルダー・マルクト（市場）小学校（Grundschule Hochfelder Markt）を視察し、校長のポシェン氏 （Ms. Poschen）からお話を伺う機会を得た。デュースブルクはドイツ国内でも移民が多い都市の一つであり、ホーホフェルト地区は特に移民人口の割合が高い。そのため、同小学校では、ドイツ語を話せない児童や、家庭に十分な経済的・社会的基盤がない児童が多く通っている。

今回の視察を通じて、私はこの学校が直面している厳しい現実と、そこで懸命に支援を続ける教師たちの姿勢に強い衝撃を受けた。単なる「学校」ではなく、教育と福祉が一体となった「ファミリーセンター」としての役割を果たすホッホフェルダー・マルクト小学校の取り組みについて、現状と課題、日本との比較、そして今後の展望について考察していく。

2. ホッホフェルダー・マルクト小学校の現状と課題

ホッホフェルダー・マルクト小学校には現在、38の国籍を持つ484人の児童が在籍しており、そのうち98%が移民のバックグラウンドを持つ。また、10%の児童は身体的・精神的な障害を抱えている。しかし、学校は慢性的な資源不足に悩まされており、教室の数、教師の人数、そして予算のすべてが不足している。

この学校の特徴的な点は、単なる教育機関にとどまらず、家庭や地域社会の支援拠点としても機能していることだ。学校は「ファミリーセンター」と呼ばれ、経済的に困窮する家庭の子どもたちに対して、食事や宿泊場所を提供することもある。事実、学校は児童に毎朝8時30分から朝食を提供し、そこから「昨日はどんな日だった？」といった会話を交わす時間を設けている。このような取り組みは、単なる学力向上ではなく、子どもたちの「心のケア」に重点を置いていることを示している。

しかし、この学校が直面する問題は、教育環境の厳しさだけではない。多くの子どもたちは、家庭環境が極めて困難である。中には親を亡くしたり、刑務所にいるために家族と暮らせない児童もいる。さらに、地域にはドラッグや

犯罪といった社会問題が深く根付いており、一部の子どもたちは「将来ドラッグディーラーや売春婦になりたい」と話すこともある。このような環境の中で、彼らの「自己肯定感」を育み、教育の重要性を伝えることは並大抵のことではない。

また、言語の壁も大きな問題となっている。多くの児童はドイツ語を話すことができず、さらにその親もドイツ語を理解していない。結果として、学校の教師たちは、児童に対してドイツ語を一から教える必要がある。しかし、教師の数が不足しているため、「4年生が1年生を教える」という助け合いの仕組みを取り入れている。

3. 日本との比較

この視察を通じて、私はいくつかの点で強い衝撃を受けた。

まず、学校が「教育の場」であると同時に、「生活の場」となっていることだ。日本では、学校は基本的に「学ぶ場所」として認識されており、生活基盤の支援は家庭や福祉機関が担う。しかし、ホッホフェルダー・マルクト小学校では「学校に行かなければ、食事も住む場所もない」児童がいる。これは、日本では考えにくい状況であり、改めて教育と福祉が密接に結びついていることを実感した。

また、日本と比較して、移民児童の支援に対する制度的な整備が十分でないことにも驚いた。例えば、日本でも外国にルーツを持つ子どもたちが増えているが、公立学校には日本語指導のサポートがあり、特別支援学級などの制度も整っている。一方、ホッホフェルダー・マルクト小学校では、ドイツ語教育のための専門教師すら十分に配置されておらず、ドイツ語を学んだ児童が新たに来た移民の子どもに教えるという状況になっている。

さらに、「ドイツ人としてのアイデンティティ」についての考え方の違いも印象的だった。ドイツ社会には「When in Germany, behave like German（ドイツにいるならドイツ人のように振る舞え）」という考え方が根強い。しかし、移民の子どもたちは、単に「ドイツ人らしく振る舞う」ことが求められるだけでなく、アイデンティティそのものに葛藤を抱えている。そこで学校では、ポルトガル語やトルコ語などの「母国語クラス」を設け、「言語を学びながら、成長した後に自分のアイデンティティを決める」というアプローチを取

っている。これは、日本における外国人児童教育とは大きく異なる視点であり、興味深い点だった。

4．今後の展望と考察

今回の視察を通じて、私は「教育とは何か」という根本的な問いを突きつけられた。日本の教育は、比較的均質な環境のもとで成り立っているが、ホッホフェルダー・マルクト小学校のような状況では、単なる「学力向上」ではなく、「生きる力を育む」ことが最優先されている。

また、日本も今後、移民児童の増加に伴い、言語教育や多文化共生の課題に直面することは間違いない。その際、ホッホフェルダー・マルクト小学校のように、単にドイツ語（日本語）を押し付けるのではなく、児童の文化的背景を尊重しながら「アイデンティティの確立を支援する」という視点が重要になるだろう。

さらに、教育の現場だけでなく、行政や社会全体のサポートの在り方も問われる。ホッホフェルダー・マルクト小学校では、支援を得るための書類作成が煩雑で、資金不足が常態化しているが、これは単なる学校の努力だけでは解決できない問題だ。日本においても、移民や経済的困難を抱える家庭への支援をより円滑にし、教育と福祉を統合的に提供できる仕組みが求められるのではないか。

今回の視察は、教育のあり方について深く考えさせられる機会となった。ホッホフェルダー・マルクト小学校の取り組みを今後も注視しながら、日本の教育制度についても改めて考えていきたい。

（柴田　光輝）

13 フランクフルト紹介

1. フランクフルト

短期欧州研修の 8-10 日目にはフランクフルトに訪問しました。フランクフルトはデュースブルクから高速鉄道で 30 分ほどの距離にあり、ドイツの首都ベルリンからは 4 時間ほどかかります。 フランクフルトは、ドイツのヘッセン州にある都市で、長い歴史を持つドイツ屈指の都市の一つです。 フランクフルトの歴史は 8 世紀頃にさかのぼり、カール大帝がこの地を重要な拠点としたことから発展しました。1356 年には神聖ローマ帝国の「金印勅書」により、フランクフルトは皇帝選挙が行われる都市として公式に定められました。その後、1562 年からは皇帝の戴冠式もフランクフルト大聖堂で行われるようになり、政治的にも重要な地位を占めることになります。 19 世紀に入ると、フランクフルトはドイツ統一運動の中心地となり、1848 年にはドイツ初の議会（フランクフルト国民議会）が開催されました。しかし、普墺戦争（1866 年）の結果、フランクフルトはプロイセン王国に併合され、自治都市としての独立を失いました。その後、19 世紀後半には産業革命の影響を受け、鉄道や商業の発展が進みました。

かつて欧州中央銀行があった跡地に存在するユーロのマーク。

現在、欧州中央銀行本店はフランクフルト市の東に移転している。

第二次世界大戦中、フランクフルトは連合国による激しい空襲を受け、旧市街を含む多くの歴史的建造物が破壊されました。戦後は急速に復興が進み、1950 年代以降は経済の中心地として再び成長を遂げました。

そして、現在フランクフルトはドイツおよびヨーロッパ経済の中心地の一つとして機能しています。フランクフルトは欧州中央銀行(ECB)、

ドイツ連邦銀行(Bundesbank)、フランクフルト証券取引所などが所在する国際金融都市です。フランクフルト証券取引所は、ロンドン証券取引所と並ぶヨーロッパ最大級の証券取引所であり、世界の金融市場にも大きな影響を与えています。

また、フランクフルト国際空港はヨーロッパで最も重要なハブ空港の一つであり、貨物輸送や国際的なビジネスの拠点となっています。また、ドイツ鉄道(Deutsche Bahn)の主要なターミナル駅もあり、欧州各国へのアクセスも優れています。

さらに、フランクフルトは自動車産業、IT、化学、製薬などの産業が盛んな都市でもあります。また、世界最大級の書籍見本市「フランクフルト・ブックフェア」をはじめ、様々な国際見本市が開催される場所としても知られています。

一方で、フランクフルト中央駅の周りや一部の通りはかなり危険で、密売人が多く暮らしているという一面も持ち合わせています。フランクフルトの有名な観光地としては、レーマー広場やフランクフルト大聖堂、鉄の橋があり、いずれも多くの観光客であふれていました。フランクフルト中心部の観光は 1−2 時間で済む程度ですので、可能であれば少し遠出をして近くの街に出向くのもいいかもしれません。フランクフルトから日帰りでいくなら、ハイデルベルクやマインツがおすすめです。どちらも昔のドイツの街並みが残っており、異国情緒を楽しむことができます。フランクフルトの食でいうと、フランクフルトで作られているビールやソーセージが有名です。どちらも大変美味しいので訪れた際にはぜひ食べてみてください。（石田宗嗣）

フランクフルトのホットドック

~~~~**コラム**~~~~

フランクフルト中央駅周辺の治安：旅行者への注意点

私たちは 25 日の夕方から、ドイツのフランクフルト中央駅近くにあるインターシティホテルに宿泊した。フランクフルトは日本や韓国、中国からの直行便が多く、乗
~~~~

り継ぎに頻繁に利用される都市であると知っていたため、非常に大きな駅を想像していた。実際に訪れてみると、フランクフルト中央駅は想像通りの大規模な駅だった。しかし、それ以上に印象的だったのは、駅周辺の治安状況だった。

私たち 12 人の誰も知らなかったのだが、フランクフルト中央駅周辺はヨーロッパでも特に治安の悪い地域の一つとされている。特に、中央駅北東のカイザー通り(Kaiserstraße)周辺には麻薬中毒者が多く、麻薬取引も行われていると言われている。実際、私たちの中には麻薬使用者を目撃したり、大麻と思われる臭いを感じたりした者もいた。麻薬に馴染みのない国から来た私たちにとって、これはかなり衝撃的な経験だった。そのため、夜 8 時以降はホテルの外に出るのを避け、どうしても外出する必要がある場合は、フランクフルト中央駅内のコンビニやフードコートを利用するようにした（ちなみに、駅周辺に有名なジャズバーがあると聞いて行こうとしたが、安全面を考慮して断念した）。

こうしたフランクフルト中央駅周辺の治安の悪さの背景には、市や政府の政策が関与しているという話を耳にした。一説によると、犯罪者を一箇所に集め、その地域から出るとすぐに取り締まることで管理しやすくするという意図的な施策があるとのことだった。こうした都市管理政策が本当に有効なのか、その効率性について検討する価値があると感じた。また、ヨーロッパの他の都市でも採用されているのか気になるところだ。都市の治安対策は国によって異なり、日本とドイツではそのアプローチに大きな違いがあるだろう。今後、各国の政策や取り組みを比較し、より効果的な治安維持の方法を模索することが重要だと考える。

フランクフルト中央駅は、ドイツで最も利用者が多い駅の一つであり、その規模と重要性から多くの旅行者が訪れる。しかし、その一方で駅周辺の治安問題は深刻であり、訪問者は十分な注意が必要だ。もしフランクフルトに滞在する予定があるなら、中央駅北東側のエリアは避け、できるだけ駅周辺での滞在を控えることをおすすめしたい。

（KIM　SEOYEON）

14. Mabuchi Motor (Europe) GmbH 視察

⑴ マブチモーター株式会社について

マブチモーター株式会社は、1954 年に設立された小型直流モーターのメーカーであり、世界中の自動車、家庭用電化製品、産業機器向けに製品を供給しています。同社の強みは、標準化戦略による大量生産と高品質な製品の提供にあります。現在、資本金は約 207 億円で、2024 年の年間売上高は約 1,962 億円に達しています。本社は日本の千葉県松戸市にあり、グループ全体の従業員数は約 18,000 人です。連結子会社は 24 で、15 の海外工場で生産を行っています。また、研究開発にも力を入れており、製品の多様化や品質向上に注力しています。

⑵ 欧州の展開について

一橋大学の OB で、ヨーロッパ三拠点の総代表をつとめていらっしゃる阿部一博さんに、まずはマブチモーターの欧州での展開についてご説明いただきました。マブチモーターは欧州市場に以下の 3 つの拠点を展開し、販売、研究開発、生産を行っています。

1. **Mabuchi Motor (Europe) GmbH**（ドイツ・フランクフルト）：欧州市場向けの販売と研究開発を担当。
2. **Mabuchi Motor Poland sp. z o.o.**（ポーランド）：欧州向けの生産拠点。
3. **Mabuchi Motor Electromag SA**（スイス）：主に医療機器向けモーターの開発と製造。

ドイツの欧州本社は 1968 年に代表事務所として開設され、1993 年に法人化されました。ポーランド工場は、欧州向けの主要な生産拠点となっています。スイス拠点では、高精度な医療機器向けモーターの研究開発が行われています。

⑶ 事業戦略について

次に欧州での事業戦略について紹介していただきました。マブチモーターは、コスト削減と市場拡大を目指し、標準化戦略を採用しています。特に、欧州では「３つのＭ領域（医療、モビリティ、機械）」に注力し、**e-MOTO コンセプト**を活用して競争力を高めているとのことです。

e-MOTO コンセプトでは、電動モビリティ（EV、AGV/AMR）、産業機械、医療機器向けの新技術を開発し、モーター製品のラインナップを強化しており、最近では、精密医療機器向けのブラシレスモーターの開発にも注力しているとのことでした。ただ、ブラシレスモーターは今までブラシ付きモーターを極めてきたマブチモーターにとって新規参入の分野でもあるため、挑戦の一面もあるというお話をお聞きしました。

⑷ 欧州の展開について

現在、欧州の自動車業界は EV 市場の低迷や供給チェーンの課題により厳しい状況にあります。特に主要メーカー（VW、BMW、ルノーなど）は売上減少や工場閉鎖の可能性に直面しており、このような状況の変化は、マブチモーターの欧州事業にも影響を与える可能性があるとのことでした。特に自動車関連製品の需要に注意を払う必要があり、同時にエネルギー価格の変動や原材料コストの上昇も事業運営に影響を及ぼす要因となりうるという話を伺うことができました。

⑸ 研究開発について

マブチモーターの欧州における研究開発拠点である欧州 R&D センターは 2017 年に設立され、欧州の顧客向けに新製品の開発や品質保証を行っています。この R&D センターは技術開発だけでなく、品質管理や顧客対応の強化にも取り組み、欧州市場での信頼向上を図っているとのことでした。そして、研修の途中では、ラボを見学させていただきました。ラボでは、毎日のように動作不良となったモーターを対象に原因の究明を行い、なぜ故障してしまったのか、その原因が製造元であるマブチモーターにあるのか(本当にめったに無い

そうです)、使っているカスタマーの側にあるのかを分析してレポートを作成して信頼向上につとめているとのことでした。

まとめ

マブチモーターは、欧州市場で標準化戦略と研究開発を基盤に成長を続けています。しかし、EV 市場の変動や EU の政策変更、欧州自動車メーカーの業績悪化が今後の事業に影響を及ぼす可能性があるため、今後の課題として、市場の変化に柔軟に対応し、新たな成長分野を開拓することを挙げられていました。特に、医療機器や産業機器向けのモーター技術を強化し、EV 市場以外での競争力を高めることが重要という観点から M&A などを通じた事業拡大を行なっているそうです。また、標準化の技術と新技術の導入を進めることで、より高性能かつ環境に優しいモーターの開発を進め、グローバル市場での競争力を維持するビジョンについても学びました。

研修を終えての感想

今回、マブチモーターのヨーロッパの 3 拠点をまとめる欧州総代表の方が一橋卒の OB であるというつながりで貴重なお話を伺わせていただきました。マブチモーターさんの欧州での取り組みや今後の成長戦略についてはかなり興味深く聞かせていただきました。特に、今まではマブチモーターの顧客にあたる企業がもつ領域については進出してこなかったところを、M&A を使いつつ、モーター分野の標準化と M&A の両軸で今後は事業を拡大していくという展望を伺うことできました。また、これまでのマブチモーターさんのお話のなかで、「これまでも標準化する分野を探し続けてきた、今後も続けていく」という話はかなり面白く、標準化が得意な企業だからこそ、標準化をすることで上手いこといく顧客の獲得や新規分野の開拓をし続けていくという強い意志を感じ取ることができました。また、今は医療分野など自動車用モーター以外の部分についても広げていこうとしており、最近ではスイスの医療用モーターの製造会社を買収したと聞きました。小ロットながら高価な医療用モーターは一見すると標準化で安価かつ高品質なモーターを作り続けてきマブチモーターの企業戦略とは合わないように感じられますが、マブチモーターさんの成長戦略において転換期を迎えていることが伝わってきました。

さらに、プレゼンテーションの途中には、オフィスツアーでは研究ラボも見させていただき、クレームが入った際にその原因をどう調査して新製品の開発や既存製品の改善に活かすのかという話もあり、多角的にマブチモーターさんの取り組みについて知ることができました。この度は快く視察を受け入れてくださりありがとうございました。心より感謝申し上げます。　（石田宗嗣）

視察の様子

15. Honda R&D Europe GmbH 視察

1.企業概要

Honda R&D Europeはドイツ、イギリス、イタリアに拠点を置いている。イギリスではデータ、ソフトウエア領域、イタリアでは2輪自動車の研究開発を行っているが、今回視察に訪れたドイツのオフィスでは、4 輪、2 輪、そしてパワープロダクトと総称される農耕機械や発電機、エネルギー、材料、生産技術といった領域の研究開発が幅広く行われている。

Honda R&D Europe GmbHはフランクフルトの東隣にあるオッフェンバッハに位置し、ヨーロッパ内周辺地域からのアクセスが容易であり、取引先との連携が取りやすくなるとともに、ヨーロッパで開かれる学会や製品展覧会にも参加しやすくなる。さらに、フランクフルトには有名な競合他社のオフィスが少ないため、優秀な人材を比較的確保しやすいといったメリットもある。

ヨーロッパは規制を世界に先駆けて制定する事例が多くあり、自動車産業、再生可能エネルギーに関連する新たな規制やそれに対応するための技術策がいち早く生まれる環境が備わっている。ホンダはヨーロッパに開発拠点を持つことで、現地で得たノウハウを世界にフィードバックし、社会に貢献することを目標としている。

急速充電設備の見学

2.視察記録

ドイツオフィスに勤めていらっしゃる荻原さん(Honda R&D Europe (Deutschland) GmbH, Vice president)から、新領域を含めたHodan R&D Europeの業内容やヨーロッパに拠点を置く意味をご説明いただいた。

まず事業内容については、ホンダは従来のメイン事業であったモビリティ事業を軸に、自動車や二輪車などの動力となるエネルギーを供給するインフラ分野、将来に向けた再生可能エネルギーの開発、効率的にエネルギー供給がで

きるよう自動的にマネジメントを行うソフトウェアの開発といった新規事業に必要な技術開発に力を入れているとのことだった。ドイツオフィスの内外では、実際にエネルギーマネジメントの装置や水素燃料の供給設備、急速充電設備が取り付けられており、私たちにお見せしていただいた。

またヨーロッパに拠点を置くのは、先述の通り、ヨーロッパで生まれた規制やそれに対応して作られた製品の情報をいち早く取得し、生産拠点を持っているアメリカ、日本、中国で製品モデルを設計する際に参照するためである。このドイツのラボでは、車外温度を-20℃から60℃まで調整できる部屋の中で、自社製品、他社製品ともに性能を計測している様子を見せていただいた。日本と異なる走行環境にスペックを適合させるためや、ヨーロッパの顧客からのクレームに応えるためであるという。ほかにもヨーロッパの拠点はいくつかあるが、ドイツは欧州で地理的に中心に位置することからネットワーク形成を進める上での強みがある。一方で、イギリス拠点はデータ、ソフトウェア領域の開発を主軸にし、ベルギー拠点は欧州の統一的な規制制定のモニタリングを行い、イタリア拠点では2輪の開発をメインに行うといった機能があるとのことだ。

3.視察を終えての感想

ヨーロッパは市場規模や技術革新という意味では中国、アメリカ、アジア諸国に比べると成熟しきっていると言えるものの、新たな規制に対する社会実装が進む動きが活発であるという点で日本企業が今後も連携を深めなくてはならない地域であると感じた。また、日本では安全性や実現可能性をある程度保証できるまでは社会実装が難しいという体制がある一方で、ヨーロッパでは規制ができることによってむしろ規制遵守を実現できるような技術革新を政府が後押しする雰囲気があるという荻原さんのお言葉が自分にとって印象的だった。自動運転の開発、新薬の開発、個人住居の温室効果ガス排出ゼロの制限など、こういった領域は日本では実行までの意思決定に時間がかかりすぎている。政策が段階的な社会実装の試行が行いやすい環境を作らなければ自動車分野に限らずすべての業界で発展が遅れてしまうのが日本の課題だろう。

（印藤　康介）

~~~~コラム~~~~

デビットカード

海外旅行に持っていくカードについてです。日本で使っているカードを持っていく人も多いと思います。しかし、そういったカードは基本的に両替手数料として 2-3%ほどカード会社に手数料を払うことになります。そこでおすすめなのが Wise カードや Revolut カードなどの旅行用デビットカードです。発行手数料はかかるものの、数万円以上かかってしまう旅行では余裕で元が取れると思います。発行には時間がかかりますので、早めに発行するのがおすすめです。基本的に現金が必要になる場面はありませんでした。どんな場所でもカードで払えます。タッチ決済も多いです。こうしたデビットカードには現地の ATM にて無料で引き出せる機能がついていたりするので、あまり両替してもってかなきゃと焦る必要もないかもしれません。一枚もっておくだけでかなり楽になりました。（石田宗嗣）

オペラ・ガルニエとエッフェル塔

~~~~**コラム**~~~~

研修に持参して助かったもの紹介

我々のヨーロッパ研修は１０泊１１日と長く、そして多くの移動時間を伴うものでした。その中で、これは必須だ！助かる！と思ったものや、これを持ってこればよかった……、あるいは持ってくるべきではなかった……、と落胆したものがいくつもありました。そのため、次の派遣生などに向けて、このコラムではその「（西）ヨーロッパへの持参すべきもの」、あるいは「持参せずともよかったもの」を紹介し、星の数（０～５、０は持っていかなくてよかったもの）によって独断で評価し、かつなぜかを説明することで現地での研修の模様についても情報を書いていこうと思います。

０．スーツケースと衣類（について）

最初に、必須であるスーツケースと衣類について、その要求性能や数量などについて書いておきます。

まずスーツケースについて。自分はすでに実家にあった１００Ｌほどの大きい長期滞在用スーツケースを持っていきましたが、持参する服を制限しさらに圧縮袋を使ったことで、大きな余裕がありました。他の参加者の中はおおよそ同規模の大きめのスーツケースで来ていましたが１、２人はどうみても小さいであろう６０Ｌ程度のものを持ってきていました。初日から頼まれていたのですが、おみやげ（特に酒類）は他の人に預けることになっていました。やはり**余裕をもちたいのなら９０Ｌはあったほうがよい**でしょう。（おみやげを他の人に預けること自体は合意があれば全然いいとは思います！）また、あたりまえですが確認しておくべきは**ローラーのコロコロ具合**、そして**鍵がかかるかどうか**です。スーツケースを持って移動するのは空港⇔駅⇔ホテルで限られますが、後半になるとお土産等も入って重くなったり注意が必要になります。十分滑らかに動くかどうか確認し、そうでない場合は最優先で修理しましょう。鍵は当然ついたものを持っていきましょう。ですが、**２重も３重もつけることは必要ない**と思います。用心は大切ですが、鍵よりも、外にいるときに目を離さないことが何より大事です（これはスマホやパスポートにも言えます。公衆の面前でスマホをいじることは絶対に避けるべきです）。逆に、そうしていれば盗まれることはないです。つけても二重のベルトまでですね。

次に衣類（下着除く）について。自分は、オフィスカジュアルなジャケットスーツ一式に加え、上下２セットと防寒上着を一着持っていきました。一着と上着は着てい
~~~~

くので、**スーツケースの中に入れるのは、実質２着**ですね。圧縮袋を使えばかなり小さくなるので、プラス一着だとしても余裕はあったと思いますが、早めに試しておくべきです。服の数は、計３着でそこまで不自由はありませんでしたが、もう一着もっていってもよかったかもしれません。１１日のうちジャケットスーツを着たのは３日で、他８日を２着で過ごしました。人によっては不快感が勝るかもしれませんが、自分は消臭剤で乗り切りました。雨の日にびしょぬれになることさえなければ、洗濯なしで計３着でなんとか乗り切れるといったところです。

防寒の度合いですが、それは年に依ると思います。２０２４年度は、暖かい日に研修することができ、日中は１０℃を下らない日が多かったです。そのため、大抵汗をかいて上着を脱ぐことが多くなりました。また、おそらく湿度や気流の面では、日本よりもヨーロッパは体感温度は高いと思います。とはいえ、予報を見て防寒対策をし、またある程度の柔軟性をもたせるのがいいと思います。ヒートテックの極暖などは、かえって厄介かと思います。

パリに行くとはいえ、衣類は普段使いまたは少しおしゃれめのものくらいで、旅行するのには問題ないです。パリは旅行者には優しく、ドイツでは服装はあまり気にされないので、過度に派手なものでなければよいでしょう。パリは「モード」を作るということでおしゃれな人はたくさんいましたが（パリ・シテ大学生も）、いろいろな人がいます。あまり服装については話題にしない方がよいでしょう。

次から、評価ありの紹介を始めます。

１．下着類【★★★★★】

下着類は当然持っていくものですが、ここでは「かなり多めに持って行った方がいい」という意味で星５です。自分は前々日から用意していましたが、前日に再配置していたときに誤って下着類を３着に削減してしまい、痛い目を見ました。大部分の理由が、**コインランドリーがない/使えないため、「洗濯ができない**」というものです。ホテルにランドリーはありません。パリではホテル周辺にあるにはありましたが、遠いです。さらに、営業時間が７時から１９時までと、研修と観光の前後に行くには少し渋いです。また、クレジットカードが使えず現金のみの場所や、壊れている機械、あるいは周辺が暗く心配になる立地のところが多いです。自分は現地のユニクロで少し買い足して、パリのホテルのシャワールームで一度洗濯しましたが、ユニクロでも**高いし**（アンダーパンツ一着２０€）、洗濯は**石鹸を持って行ってなかったし疲れる**

し乾きにくいしで散々でした。さらに、持っていった服は**気温に対処しづらく**、かつ研修中は**かなり歩きます**。そのため、冬用のあたたかいものをもっていったら、毎日汗をかくとおもいますし、偶然気温が上がった日に当たったりしたら大変なことに**なりました**（特に靴下とヒートテック系アンダーシャツ）。さらに雨の日もあります。雨は寒気とともに来れば３～５日は続きます。なので、同じ下着類を何日も着るというのには相当忍耐が必要です。余裕があれば、１０セット持って行ってしまうのもいいでしょう。

２.薄めのウエストポーチ【★★★★★】

これは、パスポート、あるいはスマホ、あるいは財布、あるいはその全てを肌身離さず携帯するためのポーチです。**絶対に持っていくべき**です。これがあるだけでスリに対する防犯は２割ＯＫです。あとの８割は周囲を警戒することですが。入れておけば、強盗以外では普通盗まれません。また、貴重品を確実に携帯しているかすぐに確認し、気づくことができます。その機能性のために、**あまりにも細かいものは入れておくべきではない**でしょう。後にも書きますが、スマホ等をポケットに入れている時が最も危険です。そのため、常にこのウエストポーチに入れることを忘れないようにしましょう。

３.花粉症対策品【★★★★】

ヨーロッパにも、花粉症はあります。花粉症の人は、薬とティッシュを持って行ってください（一敗）。マスクは公共の場ではあまりしない方がよいでしょう。

４.その他医薬品類【★★★】

また、飛行機でＰＣ作業をしていたら酔った人がいました。心配なら**酔い止め**を持っていきましょう。移動のメインは鉄道で、バスに乗ったのはド・ゴール空港からホテルに向かうときと、パリ・シテ大学との交流授業後に学生と遊びに行くときの２度ほどだったので、**車酔いについては心配する必要性は大きくない**と思います。

また、**胃腸薬等**は、心配なら持っていくべきです。自分たちの中ではいませんでしたが、食事や水の変化で体調を崩す人はいるので、**元々弱いと分かっているならば**必ず持っていくべきです。

さらに、これも我々のなかにはいませんでしたが、風邪になったとき用の**解熱剤等**も、家に残りがあればもっていくべきでしょう。ヨーロッパでは、冬には度々風邪や

コロナウイルス、インフルエンザが流行っていて、かつみながマスクをしないので。あるいはお祈りの方が重要かもしれないです。

5.歯磨セット【★★】

自分は歯磨セットを持参しなかったのですが、基本的にはホテルのロビーに申し付ければどこでももらえます。しかし、その内容はまちまちで、特に**フランスのものは日本のものと異なっていました**。環境に配慮した木材でできたブラシと、謎に容量の少ない3日で終わった歯磨粉でした（また行くのが面倒でもらいに行きませんでした）。ドイツでもらったものは日本のものと似ていてかなりマシでした。が、やはりトラベル用品でも日本製のものを持参するべきでした。

6.アイマスク【★★★★】

飛行機内とホテルの両方で大活躍します。ホテルは駅のすぐ傍に立地していたため、窓からは夜でも常に明かりがついているような場所でした。朝起きるときに日光を浴びたいということでカーテンを閉めないとき、そして特にこれが一番ですが、**同室者よりも先に眠りたい**ときに重宝します。入眠がよければ睡眠の質も向上します。毎日一日中歩いてかなり疲れると思うので。買うときには、安いものではなく多少値が張っても（１１００～１５００円程度のもの）**立体型**のものを選ぶべきでしょう。また、アイマスクは起きて脱いだ後ベッド脇に置いてありベッド下に転がり込んだりしがちなので、忘れ物に注意してください。（一敗）

7.消臭剤【★★】

個人的には、服を何日も着まわしていたので持って行ってよかったです。トラベル用の霧吹きなども売っているので、それを活用しました。

8.コンセント変換プラグ【★】

これについては、持っていくという前提の上で書きます。必要だと思われがちな変換プラグですが、実際には多くのホテルやマクドナルド・スターバックスのような電力無料供給店舗には**ＵＳＢｔｙｐｅ－Ａ**のコンセント（英：アウトレット）が用意されています。スマホやラップトップ充電器は先がＵＳＢになっているというものも多いようなので、ヨーロッパ旅行レベルでは必ずしも必須というわけではないです。日本式のコンセントのみに対応している物品を使用したい場合は、必ず持っていきまし

ょう。そうでなければ、一応持っていっておこう、くらいの感覚でいいと思います。あと、コンセントに挿しっぱなしのまま忘れることも多いので（一敗）、用心しましょう。

９.ボンタンアメ【★★】

実はあまり知られていませんが、ボンタンアメは最強のお菓子です。まず、おいしい。次に、ボンタンアメには水をよく吸収し**、利尿作用を阻害する**働きがあります。つまり、トイレに行く回数が減るということです。そのため、何か大事な予定がある前には食べておくとよいでしょう。

１０.スリッパ【★★★★】

自分は持っていかなかったことを後悔しています。海外のホテルは大体土足で、かつ**スリッパなんてものは用意されていません**。参加者の中には、土足禁止ゾーンを作っている人もいましたが、清掃が行き届いているかには若干の懸念があります（見た目にはきれいでした）。部屋内部での移動で足を自由にできるような履物は**あったほうが楽**でしょう。例えば日本のホテルで無料でもらえるような、いつでも捨てられる薄いスリッパを一足持っていくだけでも違うと思います。

１１.リップクリーム・ハンドクリーム【★★★★】

これも、自分は持っていかなかったことを後悔しています。ヨーロッパは**めちゃくちゃ乾燥しています**。なので、唇が乾いて、慣れるまではいつも痛かったです。ワセリンなどのバームを一本持っていくのがよいでしょう。また、ハンドクリームもあるといいという声もありました。

１２.名刺/名刺入れ【★】

学生ではなかなかないと思いますが、名刺をすでに持っているならば持っていくといいと思います。今回の研修中、大使館や日仏経済交流委員会、ＪＥＴＲＯ、そして民間企業等、大勢の日仏経済交流や貿易を担っている偉い方々と食事をする機会があり、名刺を頂きました。そのときに、自分の名前を売りたい方は持っていけばいいと思います。

１３.洗剤【★】

下着類のところで、洗濯に関しては部屋でした、そして洗剤はなかったと書きました。部屋で洗濯をする場合には洗剤は使用してもよいと思いますが、シャワー室は浴槽がなくシャワーのみで洗面器もないので、シャワー室の床か洗面台で洗うことになります。衛生面を気にするなら持って行ってもよいと思いますが、こういった事情はあります。

ここからは、もっていかなくてよかったもの、持っていくべきでないものについてです。

１４.鞄の施錠用品【∅】

鞄の紐を結ぶ南京錠をしている参加者もいましたが、これは基本的には必要ないかと思います。スーツケースの鍵のところで離したように、大事なのは**目を離さないこと**です。鞄を施錠することで防げるのは、どこかに置いてしまった鞄を開けられて盗まれるというシナリオだけだと思うので、それよりは鞄を常に着用して目を離さないことのほうが重要です。また、鍵を閉めてしまうといちいち開けるのが面倒くさくなり、スマホや貴重品を鞄の中にしまうのではなく**ポケットに入れがちになる**のではないでしょうか。ポケットの中を探られる、いわゆる「スリ」は、簡単でかつ見つけづらいものです。この研修でも一度、未遂ではありますがスラれかけた参加者がいました。そちらの方を警戒し、ポケットを空にしておくべきです。スマホ等は、上述のウエストポーチに入れておくのが一番です。そのため、鞄の施錠用品は相対的には必要性は低く、新たに買って持っていく必要性は低いでしょう。

１５.枕【∅】

自分は、スーツケースが余裕だったので持って行ってしまいましたが、普通の人は持っていかないと思います。**それでいいです**。ホテルは結構いいところなので、枕はふかふかでした。

１６.栓抜き【∅】

ホテルで無償提供される水はすべて**栓付きのボトルウォーター**でした。なので、当然栓抜きもありました。買ったワインやビールを部屋で飲みたいという場合は、**コルク栓でない通常の金属のものであれば**開けることができます。　　（田口　蒼一郎）

~~~~コラム~~~~

事件簿

研修中に起きた事件・事故を紹介します。誰にでも起こりうることとして、またどれが自分かわからなくし責任を回避するため、あえてすべて自分に起きたこととして記すこととします。

1.飛行機にパスポートを忘れる、2.スーツケースが開かなくなる、3.スリに遭いかける、4.遅刻

１．シャルル・ド・ゴール空港に到着して飛行機を降りいよいよフランスの地へ降り立とうとしたその時、パスポートがないことに気づいた。搭乗手続きの際には持っていたからどこかにはあるはずだが、鞄の中をいくら探しても見つからず。念のためつけておいたエアタグで位置を確認すると飛行機にあることがわかった。戻ろうとするが清掃が始まってしまい取り戻すのに時間がかかってしまった。

教訓その１。不安な時はエアタグをつけておこう。あれだけ大事だと言われていたパスポート、持っているかしっかり確認して移動しよう。

２．ダイヤル式ロックのスーツケースが空かなくなった。強い衝撃でロックナンバーが変わってしまうこともあるとのことで、３桁で、10×10×10 の 1000 通りをひたすらに、２回も試したがどれも開かない。ピッキングの得意なゼミメンバーなぞいるわけもなく、異国の地で業者に頼むのも不安だし、破壊するしかないか。ただ新しいものを買うのも億劫だし、母に借りたものであるから何とも忍びない。藁にも縋る思いでホテルのフロントの人に相談してみると、その道に精通した人がいて最小の衝撃でロック部分のみを壊してくれた。チャックは使えるままで、南京錠だけをつけ直した。

教訓その２。困ったら人を頼ろう。特にホテルの人はいろいろなトラブルに対応してきているから解決してくれることも多い。

３．スリにとって狙いやすい瞬間はいつか。電車に乗って警戒を巡らせている間ではない。彼らは心得たものである。パリでは navigo という交通系 IC を使って移動していたのだが、慣れていないかつ案内がフランス語であることも相まって、入金時には毎度手こずっていた。ここです、皆さん注意してください。人間は何かに集中しているとき、著しく視野が狭くなります。あとで言われたところによると券売機で作業している背後から、ポケットに手を突っ込まれ、カードで支払いを済ませる時にもじっくりコードを見られていたらしいが、全く気付かなかった。

教訓その３。到着して、意外と平気そうだ、と思うかもしれませんが、そんなことはありません。スマホなど要注意です。ほかに意識を飛ばしたその瞬間を狙われますから。

４．海外に行ったからと言って遅刻が許されるわけではもちろんありません。研修中のとある日、電話の着信音で目覚めた。集合時間を過ぎている。自由行動の日であったから最小限で済んだものの、研修の日であったら多大なる迷惑をかけるところであった。時差ボケおよび動き回った疲れ、そしてその疲れに気づかないくらい気分がよくなっていると、無理してさらに疲れを溜め寝坊する危険性が高まる。注意しよう。

教訓その４。アラームは何度でもかけよう。

予期しえないからこそ事故は発生するのであり、防ぐことは難しいが以上の教訓をもとに少しでも快適な研修を過ごす助けとなれば幸いである。

（前原優風）

2/27(木)

フランクフルト国際空港より

無事帰国の途へ。

Chapter 4

PERSONAL REFLECTIONS

仏独でのコミュニケーション

石田宗嗣

1 年間のゼミと短期研修を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一年間のゼミは短いようで長く、特に締めとなる研修旅行は濃密で 10 日間とは思えないほど充実していました。10 日間を通して、今まで話してきた外国人との会話量をはるかに上回る量の外国語での会話をしたと思います。道ゆく人には積極的に話しかけたし、フランス人の友達ができたので遊びにいったりもしました。現地の大学生と「大学生」らしいことをするのはものすごく刺激的な体験で楽しかった。おそらく自分が本格的に触れ合ったことがないから生じるもだと思うが、研修旅行前に感じていた外国人に対する漠然とした怖さはかなり克服できたと思います。外国の大学生も我々と同じ大学生だと気づくことが幾度となくあったからです。話している内容や、友人のいじり方、笑うポイントなど日本と一緒じゃんと思うことがよくありました。黒人の露天商がエッフェル塔のキーホルダーを売っていたので、値切って買うこともしました。1 人で交渉に行ったのでなかなか怖かったが、粘っていい値段を引き出せたときは自分のコミュ力が通じた感動を得ました。普通にお土産としても安い上に露天商と話すのはかなり楽しいので一種のエンターテインメントとしてもおすすめです。

自分はこのゼミの中では英語が話せない方で、ゼミが始まった時、4 月などは周りの学生が全員流暢に話す様子に驚き、自分はここにいるべきじゃないのではないかと思うこともありました。ただ、そんな英語弱者である自分ですら、カタコトの英語といくつかの単語を文法もむちゃくちゃで使ったらなんだかんだ伝わりました。こんなひどい英語だったのに、話が伝わらなくて困ったことは一度もなかったので、本当に驚きました。フランスとドイツはどちらも英語が母語ではない国だからこそのことかもしれませんが、こんな英語でも生きていけるのかという感動を得ました。英語ができないとこのゼミに入ることを躊躇している皆さんは悩むことなく応募することをおすすめしたいと思います。パリは素晴らしいです。美しく、スタイリッシュでちょっとクリミナルな素晴らしい街でした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

パリシテ大学で仲良くなった学生と

基準を変えるきっかけ

印藤 康介

国ごとの国民性、などと集団内の千差万別な個人の特徴を無視した言い方をしてしまえば批判の的となってしまうかもしれないが、そうは言ってもやはり気質の傾向があることは不思議ではない。国民性に関して、日本と大きくギャップを感じたフランスについて焦点を当てさせていただきたい。これは、完全に私の主観で感じたことであり、たった一度の訪問で正確に感じ取れたとは限らないことだが、フランスでは自分のペースを大事にし、間違っていると感じたものに対して声を上げて堂々と主張する方が多いと感じた。自分のペースを大事にするというのは、例えば私が訪れた昼のレストランで、他のお客さんとの順番があるのか、店員さんを呼んでも何度かあからさまに無視されたことや、赤信号をほとんど誰も守ることがないことなどである。間違っているものに対して躊躇なく指摘すると感じたというのは、経験談からいうと、私たち一行が地下鉄の改札を少し出たところで固まって待機していたら、おそらく邪魔だということをわざわざ立ち止まって声を荒げながら男性に指摘されてしまったことによる。また、フランスではストライキが頻発することや、研修中に訪れた子供福祉研究者、安發さんの講演でも挙げられていたことであるが、行政サービスに対して不満があれば、直接管理当局にまで問い合わせる人がザラにいるといった部分にもその傾向が現れているのではないだろうか。研修中訪れたパリ・シテ大学の学生の方々や企業の方々からはなぜかあまり感じなかった一方で、パリの街を歩いているときはどことなくその雰囲気を感じたのだった。

再び安發さんの話になるが、講演の中で安發さんが「国民性は政治が作る」という格言めいた言葉をおっしゃっており、講演の後、それが本当なのか否かゼミのみんなの雑談の中でちょっとした議論が巻き起こった。政治が国民性を作っているという意見、文化が作っているという意見、気候と地形が作っているという意見などなど。詳しい議論は割愛するが、どれも一定の説得力がありそうであった。

しかし、１０日間という短い期間ではあったが、今回の研修を通じて、政治的な側面が社会の雰囲気、ひいては国民性を醸成している部分はやはり大きいのではないかと感じた。パリでの、移民政策の影響ではびこるスリの危険、フランクフルトでの、大麻合法化のせいもあり漂う街の不穏な空気など、社会問題が顕在化している点は、もちろん残念なことであったが、その一方でフランス人にとって、身の回りの矛盾している事象に敏感になり、社会問題をより自分のことのように考えるきっかけになっているように私には思えた。日本とは異なる政治の下で、明らかに日本とは異なる人々の生活や意識を肌で感じた。

今回の研修で私は初めて海外に出たが、既成のルールをよく守り、間違いは言外に匂わせるといった、かれこれ十数年無意識に染み付いていた自分の行動基準を改めて振り返る機会となり、より批判的に観る考え方が少し加わったのではないかと思った。

赤信号でも歩くのがフランス流

ヨーロッパから得た学びと未来への視座

榊原将輝

私は 9 月からの 1 年間、ヨーロッパに交換留学に行く予定だ。しかし、それを前にして、私はヨーロッパに関する知識が乏しいと感じていた。そこで、短期間ではあるが欧州の社会や文化に直接触れる機会として、本研修への参加を決めた。この研修に先立つ 1 年間のゼミでは、欧州の政治・経済情勢を学ぶとともに、アカデミックな英語の使い方についても学習する機会を得た。これにより、海外での学びに対する視野が広がっただけでなく、英語を使って議論する力が鍛えられたと感じる。特に、ゼミを通じて欧州メディアの視点を知ることができたのは貴重な経験だった。

また、このゼミでの学びが契機となり、私は個人的にも海外メディアのポッドキャストを聴く習慣を身につけ、英語資格試験の受験にも取り組むようになり、語学力の向上はもちろん、世界のニュースをより多角的に理解する力も養われたと思う。このように、研修前の 1 年間を通じて、海外への視野が広がったことは、今後の留学に向けた大きな準備となった。

実際にフランスとドイツを訪れてみて印象的だったのは、言語や文化の違いはあるものの、日常生活の営みそのものには日本との共通点が多いことだ。市場での買い物、カフェでの会話、公共交通機関での移動など、人々の暮らしは異なる文化や言語環境にあっても通底するものがある。実際、自分も 10 日間を終えた後には、正直ヨーロッパと日本どちらに暮らせと言われても特に気にしないかもな、と感じていたほどだ。この気づきによって、留学に対する心理的なハードルがより一層大きく下がり、不安よりも期待が上回るようになった。本研修を通じて得た経験を活かし、交換留学に臨むとともに、さらなる成長を目指したい。

刺激が多く、学習への意欲が高まった日々

坂田綾香

今回の欧州短期海外調査を通して、多くのことを学ぶことができました。一年間のゼミを受けている中でも感じたことですが、今回の特に研修の中で、国内外の時事についてある程度の前提知識を持っておくことと、自分の意見をしっかりと持ち、思考力をつけることの重要性を感じました。今回、一緒に欧州短期海外調査に参加したメンバーは、優秀な人ばかりで、自分が持っている知識を背景に、プレゼンで聞いた話をただ鵜呑みにするのではなく、多少批判的に聞き、的を射た質問をしていました。思考力、そして自分の確固たる意見がないと、容易にはできないことだと思うので、みなさんの姿勢を見習いたいと思いました。

また、今回の研修では、視察先で貴重なお話をたくさん聞くことができました。まだ学生ですが、社会に出てからどういった能力が求められるのか、社会に出て活躍するには多くの困難に直面するということを肌で感じました。今回の研修を通して、自分の至らない点を改善していけるように今後努力していきたいと強く感じました。

英語においても、視察先で英語のプレゼンを聞く機会も多かったですが、フランス訛りの英語がとても聞きづらく、半分くらいしか理解できていなかった場面があり、とてももったいなかったと思い、残念でした。英語力の向上も課題のひとつだと思いました。一年間のゼミを通じて、日本だけでなくヨーロッパの社会についても深く知る機会を得ることができ、有意義な時間でした。今回の研修で初めてフランスとドイツに訪れましたが、フランス人やドイツ人と交流し、日本との価値観の違いに遭遇し、驚く場面が多くあり、視野が広がりました。とても学びの多い、ゼミと研修だったと思います。

越境する視点：多文化共生と社会統合の未来を探る

KIM SEOYEON

短期調査期間では研究テーマに関する理解を深めるだけでなく、実際にヨーロッパでの多様性を体感することができた。特に印象的だったのは、ドイツのデュースブルクを訪れたときのことである。この都市は移民の多い地域であり、外国語の看板や多様な文化を反映した店舗が目立った。さらに、ドイツの大学では、見た目が典型的な「ドイツ人」ではなくても「ドイツ人」として育った人々と出会い、移民二世としてドイツ語を母語とし、ドイツ社会で生まれ育っていることも耳にすることができた。私自身も留学生として、アイデンティティや外国人としての生活について悩むことが多かったが、似た経験を持つ人々と様々な話ができたことは貴重な経験だった。この経験を通じて、「国籍やルーツではなく、個人としてのアイデンティティが尊重される社会」の重要性を実感した。

短期調査で訪れたパリ、ケルン、フランクフルトでも、多様な文化が共存する様子を目の当たりにした。人種差別に対する不安もあったが、実際に訪れてみると、ヨーロッパでは異なる国籍の人々が言葉の壁を超えて共存していることが実感できた。標識や案内板には複数の言語が記載されており、現地の人々は複数の言語を使いながら、異なる背景を持つ人々と自然にコミュニケーションを取っていた。事前の情報では、特にパリでは外国人への対応が冷たいという話も聞いていたが、実際にはとても親切な人々が多く、良い印象を持った。

ヨーロッパでの体験を通じて、研究テーマにも新たな視点が加わった。私の研究テーマである「難民移民と社会統合政策」についても、多くの進展があった。当初、この研究テーマを移民・難民の受け入れを促進するための一手段として考えていた。し

かし、研究を進めるうちに、社会統合政策が単なる説得の手段ではなく、経済的なメリットをもたらし、東アジア諸国にとっても将来的に重要な課題となる可能性があることに気づいた。この分野について、今後もさらに深く研究を続けたいと強く思うようになった。

現在、世界はますますグローバル化が進んでおり、東アジアも例外ではない。移民や難民の受け入れが増加し、移民二世の人口も増えている今、社会統合政策の重要性はますます高まっている。日本や韓国においても、ヨーロッパのように「国籍やルーツではなく、人そのものに焦点を当てた社会」を目指し、移民・難民の受け入れと統合を積極的に進めるべきではないだろうか。今回の経験を通じて、その必要性を改めて実感した。

“先進国”の先にある課題

柴田　光輝

今回の欧州短期海外調査を通じて、フランスとドイツというヨーロッパの二大国を訪れる貴重な機会を得た。これまで私は、ヨーロッパを「歴史と文化の洗練された地域」として漠然と理想視していた。一方で、移民問題や社会の分断といった負の側面については、ニュースを通して断片的に知るのみで、その実態を自分の目で確かめる機会はなかった。実際に足を運び、多様な人々と直接対話する中で、私のヨーロッパ観は大きく揺さぶられた。

フランス・パリは、まさに「美」と「混沌」が共存する都市だった。サント・シャペルの壮麗なステンドグラスや、ヴェルサイユ宮殿の荘厳な装飾は、まさに歴史と芸術の結晶であり、圧倒されるばかりだった。一方で、路上にはゴミやタバコの吸い殻が散乱し、公共の場での喫煙も日常的に行われていた。地下鉄に乗ると、移民と思われる人々が大きな荷物を抱え、時には車内で寝ている姿も見られた。これまで「華の都」として描かれてきたパリのイメージとは異なる、現実の姿がそこにはあった。

ドイツでは、ホーホフェルト小学校の視察を通じて、移民の子供たちが置かれた厳しい環境を目の当たりにした。彼らの多くはドイツ語を話せず、親を亡くしたり、家庭が機能していなかったりするケースも少なくない。それでも、教師たちは彼らを受け入れ、「ドイツ人になれ」と強制するのではなく、一人ひとりのアイデンティティを尊重しながら教育を施していた。この姿勢には強く感銘を受けると同時に、日本の教育との違いを痛感した。日本では、学校はあくまで「学ぶ場」としての役割が強いが、ホーホフェルト小学校は「生きる場」でもあり、衣食住を提供する側面を持っていた。教育とは何か、学校の役割とは何かを改めて考えさせられた。

今回の研修を通じて、私は「ヨーロッパは理想的な社会である」という単純な幻想を捨てることができた。確かに、EU を通じた環境規制や移民受け入れの取り組みなど、先進的な面も多い。しかし、その理想を現実に落とし込む過程では、貧困や差

別、行政の機能不全といったさまざまな問題が生じている。それらを乗り越えるために、現場の人々がどのように努力しているのかを知ることができたことは、非常に大きな収穫だった。

また、日本とヨーロッパを比較することで、逆に日本の良さも再認識することができた。例えば、日本では公共の場の清潔さや、行政の手続きのシンプルさ（相対的に見て）が保たれている。一方で、日本には移民を受け入れる土壌が十分に整っているとは言えず、多文化共生の議論も限定的だ。これから日本社会が直面するであろう課題について、今回の研修を通じて学んだヨーロッパの事例を活かせるのではないかと感じた。

1 年間のゼミを経て

高橋空

1 年間のゼミと 10 日間のフランス、ドイツでの研修を経て、多くの学びを得た。

もうすぐ大学 3 年生になって就職活動をしないといけない、という状況の中で、私はあまり自分のやりたいことが定まっておらず、周りの人、特にこのゼミに参加している人は将来のビジョンがしっかり見えている人が多く、自分だけが置いていかれている焦りを覚えた。今回の短期海外調査を通して、自分が興味ないと切り捨ててしまっていた分野にも触れ、視野を広げることができた。正直目まぐるしいスケジュールの中で刺激だけ受けて咀嚼できないまま次の話を聞くことを繰り返してしまっていたのは事実だが、それはこれから咀嚼するとして、たった 10 日間の中で転職した人、並行して別の団体に所属している人、起業した人など本当に様々な人に出会うことができた。元々就職に対して、「一度決めたらずっと同じ職場で働き続けるもの」という考えを持ってしまっていたが、「まずは今の興味を追求しよう」「選択肢は 1 つや 2 つではない」という考えに変えたことで就職に抱いていた不安も前向きに向き合えるようになった。

海外に対する意識も今回の研修で多く変わったことの一つだ。私は幼少期に海外に住んでいて、正直将来はもう海外にはいかず、日本で働いて日本に住みたいと考えていた。しかし、海外で働いているたくさんの日本人の方にお話を伺う中で、海外で働く選択肢を盲目的に排除することは勿体無いことであると感じるようになった。フランスやドイツで働く中で、日本では当たり前と言われていることは当たり前じゃないと認識し、日本の社会のあり方について日々の中で考えている人がいて、ようやく自分が気後れしていた世界なんて本当に小さいものでもっともっと世界は広がっていることを実感した。

特に、パリ・シテ大学の学生との交流会で自分が日本人の友達と同じくらいの気持ちでフランス人の学生と交流できたことが自信に繋がった。私は初対面の人とコミュニケーションを取ることが苦手だ。初対面の交流会に行くと大抵友人たちはいつの間にか仲良くなっており、私は波に乗れず置いていかれる、そのような場面に今まではよく出くわしていた。しかし、交流会の後みんなでご飯を食べることになった頃にはいつの間にか自分の周りにはもう友達とも言えるくらい話すことができるフランス人の学生がたくさんいた。フランスではカフェの前で友人が出てくるのを待っているとテラス席に座っている人に「何日パリにいるの？」と聞かれるなど、気さくに話しかけてくれる人が多く、私も自然と身構えずに会話することができるようになった。今後は人と話すことが苦手だからと臆することなく、積極的に人と関わって色々

な人の考えや意見に触れていこうと決心した。

10 日間の研修を経て、自分の中の壁が崩れた。店によっては英語さえ通じない、磁気がすぐ壊れる IC カードにビクビクし、ご飯は基本的にパンとハムで、スリに気をつけてと言われすぎて定期的にポケットの中身を確認していたけれどとても刺激的で新鮮な毎日だった。高校時代世界史選択だった私にとっては信じられないくらい夢のような街並みや文化遺産に触れることができて毎日感動が止まらなかった。各地で出会った人は皆自分なりの哲学を持っていて自分のしていることに対して熱意とパッションを持っている人たちばかりでそういう人たちが報われるような社会であるべきだと感じた。刺激を受けてそれで終わりではなく、今後の人生の糧にできるように努力し続けようと思う。

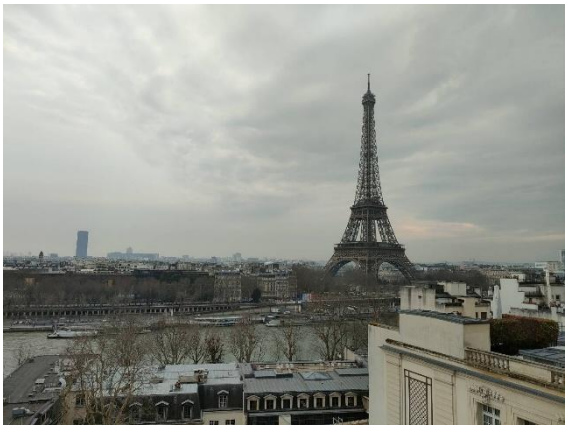
ケルン大聖堂の中のステンドグラス。一番感動したと言っても過言ではない。

世界史の教科書でみてからずっと好きだったナポレオンの戴冠式。

無知の知

谷川陽海

私はこれまで海外というのは恐ろしい場所だと妄想しており、アジア人は差別の対象だとも考えていた。これまでの人生に海外経験がないことや内向的な性格も影響していたのだろう。1年間のゼミ活動、そして今回の研修を通じて、私の浅はかさ、そして「知らない」ということの孕む危険性を自覚することの重要性に気がついた。さて、「無知の知」というソクラテスの言葉を耳にしたことがある人は多くいるだろう。端的に言えば「無知であることを知っていることが重要であり、無知に対して自覚がないことがより罪深い」という意味だ。私も言葉自体は知っていたし、重要な考え方であると認識していた。しかしながら、私は本調査によって、初めて自分が「無知」であるということを体感したのだ。冒頭にも示したが、私の中で欧州の認識は日本よりも華やかで恐ろしい場所だという一種の僻みのような感情を抱いていた。ゼミ活動で欧州についての学びを深める中で、欧州は様々な改革を積極的に取り込み、EUを通じた環境規制や人道的援助にも一定の成果を出していることを改めて知った。そして初めて足を踏み入れたヨーロッパは人種・性別に関係なく多様性に溢れており、この期間に出会った全ての人は我々に親切で、かつ熱意にあふれていた。私は少しの戸惑いを感じたが、様々な分野の訪問先で聞いたお話の中に共通点を見いだし、非常に納得させられた。それは「ヨーロッパとはルールメイカーである」というものだ。金融・福祉・教育・産業のどの場面においても、欧州には最先端を進むことが求められており、その上で秩序を形成していくことが世界における欧州の役割であるという。その視点が得てみると、ヨーロッパが怖く感じるという考えは極めて自分が無知なことの裏返しだったと簡単に気づき、視野が大きく広がった。ヨーロッパにおいて多様性が認められ、お互いにリスペクトをもって接することは当然なのだと感じた。そしてこの衝撃とともに、私が知っていることのほとんどはある一側面についてのみであり、知った気になっていただけ



なのではないかと疑念を抱いた。狭い世界に閉じこもり、偏った情報を摂取しているだけでは、自らが無知であるという現状認識さえ正しく出来ないのだと強く感じた。また、この事実を大学生活が残り 2 年残っている状態で知れたことを喜ばなければならないと感じた。この 1 年間、そしてこの濃密な 10 日間を経て得た衝撃を忘れることなく、社会にでるまでに様々なことに挑戦し、知見を広げていきたいと思う。

ゼミナールと海外研修を振り返って

田口蒼一郎

この基礎ゼミナールで学んだヨーロッパ現代史の基礎知識は、ヨーロッパに関する理解を深め、また観光面の満足を豊かにし、コミュニケーションを円滑にするのに役立ったと思います。例えば、第二次世界大戦での反省による特にドイツの融和政策は移民の増加の一つの間接的な原因であり、その統合における作用と副作用を生み出しました。この問題は現在の政治における主な議論の一つであり、現地学生との議論に役立ちました。また観光面でも、クレディ・アグリコルへ訪問に行った際、「このビルはかつてはサルコジの邸宅だった」と言われました。これはニコラ・サルコジが誰なのか、重要人物なのかを分かっているために驚くこができました。英語でのコミュニケーションや発表は、パリでもデュイスブルク・フランクフルトでも総じて支障なく上手くいったかと思います。一つ後悔があるとすれば、それは現地の言葉をゼミナール生で自主的に学習していれば、より滞在を楽しめたであろう、ということです。しかし、それでもこの日本での準備は、現地での実習調査での学びと比較すると「期待通りの」もので、常に結果が想定されて進んでいくものでした。一方で、現地での経験は毎日が予想通りではなく、ある意味で不安定なもので、そして強烈な体験でした。

まずパリで気づいたのは、都市環境におけるはっきりとした差異でした。治安が悪い空港と言われていたド・ゴール空港は実際には綺麗で整っており、またパリ中心地のいたる所にある建築物は石造りで空に伸びる、日本とは異なる空間的広がりを有する建築物でした。一方で、郊外にはガラスを多用した現代的な娯楽施設やショッピング施設なども数多く見られました。さらに道路の壁面にはいくつも落書きが並んでおり、路上には不法投棄されたらしいゴミが多く散見され、また路上生活者の物乞いにも、少なくとも毎日１０人は会うほどでした。

そうした目に見える程の大きな差がある、異なったものが共存、あるいは平行して存在している街、というのがパリの第一印象です。その後も、シテ大学との交流や市内を見る内に外見も内面も多種多様な人と出会いました。そうした異なるものが日

常にある中で、フランス人あるいはパリ人は、「フランス」という自尊心を統合的に持っているのかと思うと、ある種の実感できない感動と、同時に日本人としての近しい感情を覚える親近感が湧きました。４、５日目には慣れを感じてきましたが、それでもやはり興味深いものでした。元々差異のあるものを統合したアイデンティティをもつというのは、日本人にも共通していると感じます。

STATION Fやクレディ・アグリコルなど企業への訪問では、もはや「先進国」ではない国として、それでも米国等にキャッチアップするために新たなイノベーションを国内から起こす、起業家やスタートアップを育成する、という強い信念を感じました。現在ではロシア・ウクライナ戦争やトランプ政権といった不確実な「脅威」に対して、民間企業としていかに対応して経済環境の変化に適応し、雇用、そして産業全体を守るかということが重要な課題であり、戦略を一つ一つ慎重に選んでいるという様子が伺えました。

総じて、パリやフランスにおける精神は興味深いもので、そこには「差異」を取り込んだり排除したりする「平衡感覚」というものが、根本に組み込まれているように感じました。そして、その精神は大局的に見ればフランスの政治や経済全体を押し上げることも、押し下げることも可能なのだと感じました。

次に、ドイツ、デュイスブルク・フランクフルトについてです。ドイツについては、ベルリンには行かず、また日程も実質的には短かったことを考慮しなければなりませんが、フランスで感じたような差異は確かにありましたが、それ以上に均質的で薄いヴェールに覆われているような感覚がありました。「差異」の例は、プロテスタント系の地区とカトリック系の地区の都市環境の差や、多くの移民との共存、移民の多様性による都市環境の差異は目に見えました。しかし、都市の中では差異は共存しているのではなく、似たようなものが集まっている集団ごとに分散しているようでした。移民街にいったときも小学校の先生たちを除けば移民しかいない、といった具合です。それらは相対的に見れば均質で、破ってはいけない取り決めがあるように感じられました。企業訪問でも、前述のとおり企業の強みをどのように生かすか、課題にどのように対応するかを聞きましたが、職場では仕事以外の交流というものは少ないということも聞きました。

こうした国や都市間での違いは、その歴史や文化と共に、制度の違いが生んでいるのではないかという問いがあります。安發さんの講演では、児童福祉という文脈でこのことが語られました。移民街の小学校への訪問の後、ドイツ人の学生が、「これは自分にも衝撃的だった」と言っていたことを思い出し、やはりドイツには統合を進

める政策の影で、隔たりもまた生じていたのだと感じました。

ヨーロッパは様々な面で日本の将来である、と研修前から考えていましたが、その意味で、この実地研修ではよい面の陰に隠れた懸念点に焦点をあてるべき訪問が多かったように思います。地政学的リスクや移民、世代間対立などの日本の現在と将来の間でのトレードオフの問題について、この部分的な将来を観察できる例として、同時に不確定な脅威に対し共に立ち向かうべき友好国であるとヨーロッパを認識し、それぞれの分野での連携と情報共有を進めるべきだという考えが固まった研修になりました。

一橋の強さと交友関係について

前原優風

このゼミのクライマックスである海外研修について、主な印象と、交友関係の二点から、今後このゼミナールに参加する人々が読者となることを想定して総括を記す。まず前提として、おそらく、ゼミの中で私の印象は、みんなと仲良くなりたい、帰国子女で海外モチベが高い、である。日本にいる間もゼミの集大成であるレポートを完成させるのと同じくらい仲良くなりたい気持ちが強かった気がする。

主な印象としては、一橋大学の強さを存分に感じられる研修であったことで、一つ目に補助金をかなり出していただけること、二つ目に渡航先での視察における一橋 OB・OG とのつながりおよびその方々の現地でのコネクションの広さによるものである。
様々な人に支えられて資金も手間もかかる海外渡航をする、というのは少なからず責任を感じるものである。岩倉使節団とちょっと似てはいないだろうか、と考えてみたりもしたが、もちろん私には畏れ多かった。全力でその調子に振り切るには一年間のゼミで自身のプレゼンの質を極限まで高めておくこと、ヨーロッパについての知見を深めておくことが必要となる。また、現地での視察でも、グローバルに活躍する企業や施設や研究者の方々が我々のために時間を取って歓迎してくださり、話を聞かせていただけたおかげでぼやけていた将来に少しは道筋が見え、今後社会で奮闘する自らの姿が想像できる気がした。

続いて、交友関係についてであるが、皆おもしろい人々で一年間共に過ごせて光栄であった。彼ら彼女らの理路整然と自らの主張を述べ、高度な質問を投げかける様は、見ているだけで成長できたと信じている。ただ今年度のゼミで授業後食事に行ったのは二回であった。仲は良好であったが人となりを深く知る機会があまりなかったこともまた事実である。しかし、いざフランス・ドイツに行き 10 日間を共に過ごすと指数関数的勢いで仲良くなり感慨深かった。今後とも付き合いが続くことを願っている。

この研修は、間違いなく私の大学生活のハイライトとなることだろう。

研修先での昼食

文化相対主義へのめざめ

八ッ橋 賢

1 年間のゼミと 10 日間のフランス・ドイツ研修は今思えば非常にあっという間の体験でした。法学部生ながら経済学部のグローバルリーダーズプログラムの一環である短期海外調査（欧州）に応募し無事通ったはいいものの、自分以外は皆知り合いの状態なのではないか、経済学部生の話題に全くついていけなかったらどうしようと最初のゼミではとても緊張していました。実際はゼミ生の大半が一人でプログラムに申し込んでいて、私の不安は杞憂に終わりました。週 1 回火曜日の四限に開講されるゼミは、春夏はヨーロッパに関する輪読とリサーチテーマの草案発表を行い、秋冬はリサーチテーマに関するより詳細なプレゼンと、移民に関するグループでのプレゼンの準備を行いました。輪読後の意見交流やリサーチテーマに関するディスカッションでは、経済学部生の視点から新しい知見を受けることも多々ありました。

私はこのプログラムで実際に赴くまで、「欧州」および「白人」という概念に対して曖昧ながらに羨望と、その裏返しとしての劣等感を抱いていました。「日本人は自国が欧米にどのように評価されているかを異常に気にしている。」「日本人はバナナだ。皮は黄色いがその実は白い。」といった言説は少なくとも私においては妥当するものだと考えていました。海外経験として、オーストラリアに行ったことはあるのですがオーストラリアの場合はアジア系移民の数が多く、私が脳内で観念する「欧米」とはまた少し異なる風景が広がっていました。初めて欧州をこの目で見るということで、産業革命以後一度は世界の大半をその支配下に置き、人権や主権国家体制、経済搾取といった功罪を世界に残した欧州の、その政治的中枢に位置したフランスとドイツの街並みは、文化は、どのようなものであるのか非常に期待していました。パリの街並みは非常に綺麗でした。コラムにも書きましたが、メトロの一つ一つの駅名に世界史に登場する偉人、思想家が登場しパリという都市が歩んだ歴史の重さを感じさせてくれました。しかし一方で路上喫煙が日本の比にならないほ

ど多く加えて信号無視が完全に常態化している街でもありました。幼児を連れた高齢女性が堂々と紙タバコを吸っている様には驚愕しました。観光地として確立されきったパリと比較するのは可哀想かもしれませんが、パリの世界観の統一された街並みを見た後のドイツは日本の地方都市のような雰囲気がありました。

このプログラムを通じて、私は良い意味で欧州に対して失望することができたと思っています。というより今まで抱いていた過度な幻想や嫉妬が消滅し、より現実的な認識に塗り替えられたといった方が誤解を招かないでしょうか。もちろんドイツやフランスにはそれぞれ優れた文化がありますが、それを一直線的な評価軸の上に乗せ、優劣を決める必要はないのだと思いました。街の清潔さや食事のクオリティの高さについては、日本には日本の良いところがあると海外に滞在することで再確認できたと思います。そういった点でこのゼミ及び短期海外研修は私にとって非常に意義深いものでした。